佐賀県文化財調査報告書第94集

佐賀県農業基盤整備事業に係る
文化財調査報告書 7

1989年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県農業基盤整備事業に係る
文化財調査報告書 7

１９８９年3月

佐 賀 県 教 育 委 員 会

はじめに

この報告書は、佐賀県農業基盤整備事業に先立ち、埋蔵文化財の確認調査を実施した結果をまとめたものです。

県教育委員会では、文化財の保護事業と農業を営む方々の生産基盤を整備する事業との調和を図るため、事前に確認調査を実施して埋蔵文化財を保護するとともに、記録の保存をすすめています。

昭和62年度も関係各位の御協力のもとに、事業計画地内における埋蔵文化財の存否を確認する発掘調査を行ったところ、旧石器時代から江戸時代に至る多くの遺跡が確認されました。この確認調査の結果をふまえ、県及び市町村の農林担当部局とのあいだで農業基盤整備事業計画と埋蔵文化財の保護について協議し、関係各位のご協力によって多くの遺跡を後世に伝えることができるようになりました。

また、本調査については、昭和61年度に実施した確認調査によって、その所在を確認した遺跡のうち、設計変更等の協議を尽くした結果、最終的に発掘調査に至ったものです。これらの埋蔵文化財については、すでに調査報告書が刊行されたものもありますが、ここにその調査報告の概要を収録し成果の一端を紹介するものです。

調査にあたって、文化庁・県農林部・関係市町村の教育委員会・土地改良担当課並びに地元の皆様から深い御理解と御協力を賜り、お陰をもちまして、埋蔵文化財の保護について所期の使命を果たすことができました。　ここに関係各位に心からお礼申し上げます。

平成元年３月31日

佐賀県教育委員会

教育長　志　岐　常　文

例　　言

1．本書は国庫補助を受け、昭和62年度及び翌63年度に施行計画の佐賀県農業基盤整備事業に先立ち、昭和62年度に実施した確認調査並びに本調査の成果をまとめたものである。

2．確認調査は関係市町村教育委員会の協力を得て、佐賀県教育委員会が実施した。

3．遺構の実測及び写真撮影は調査員が行った。

4．遺物の実測・製図・報告書作成作業は、佐賀県文化課で行った。

・遺物整理……中島美須三・田中ハルミ

・遺物実測……古賀安子・梅野角子・上瀧光子・神田浩子・宮地正子

・製　　図……三好文子・鳥谷智子

5．本書の執筆は下記の分担で行った。また、執筆に当たっては各調査担当者より提出された「確認調査結果報告書」及び「発掘調査実績報告書」を参考にした。各調査担当者には必要に応じて教示をいただいた。

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ－1、2、4、……藤口健二

Ⅲ－3、5…東中川忠美

Ⅲ－6、Ⅴ－9、10、22、Ⅵ……徳永貞紹

Ⅳ……徳富則久

Ⅴ－1……中尾修二

Ⅴ－2、3…原田大介

Ⅴ－4～6…久保伸洋

Ⅴ－7、8…緒方祐次郎

Ⅴ－11～13…堤　安信

Ⅴ－14……福田義彦

Ⅴ－15、16……川崎吉剛

Ⅴ－17～21…種浦　修

Ⅴ－23、24…西村隆司

Ⅴ－25……坂井義哉

Ⅴ－26～29…原田保則

Ⅴ－30、31…渡部俊哉

Ⅴ－32……加田隆志

Ⅴ－33……盛　峰雄

Ⅴ－34、35…田島龍太

Ⅴ－36……山口久範

Ⅴ－37……明瀬慎吾

6．本書の編集は徳永貞紹・藤口健二が担当した。

凡　　例

1．遺構番号に用いた分類略号は、

ＳＢ：住居跡・建物跡、　ＳＨ：竪穴住居跡、　ＳＥ：井戸跡、　ＳＤ：溝跡

ＳＧ：集石遺構、　ＳＪ：甕棺・壺棺、　ＳＫ：土壙

ＳＸ：自然谷・不明遺構・その他、　Ｐ：柱穴・小穴　を示す。

2．用いた方位は、地図が座標北、遺構図は磁北である。

3．挿図中の記号で、

■は遺構・遺物包含層が検出された試掘溝

□は遺構・遺物包含層が検出されなかった試掘溝

－－－は推定される遺跡の広がり、を示す。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過……1

1．昭和62年度農業基盤整備事業に伴う文化財確認調査……1

(1)　設計協議

(2)　文化財確認調査

(3)　農業基盤整備事業と文化財保護に係る協議

2．埋没地割り確認調査

Ⅱ．調査組織……9

Ⅲ．昭和62年度文化財確認調査の内容……11

1．佐賀東部地区の調査……11

(1)　鳥栖市……12

(2)　基山町……12

(3)　北茂安町……12

(4)　三根町……14

(5)　中原町……16

(6)　東脊振村……16

(7)　神埼町……20

(8)　三田川町……20

(9)　千代田町……20

2．佐賀西部地区の調査……30

(1)　佐賀市……31

(2)　諸富町……34

(3)　多久市……34

3．佐賀南部地区の調査……36

(1)　武雄市……37

(2)　北方町……37

(3)　白石町……43

(4)　有明町……44

(5)　鹿島市……44

(6) 塩田町……44
4．佐賀北部地区の調査……46
(1) 伊万里市……47
(2) 西有田町……48
(3) 相知町……48
5．佐賀上場地区の調査……50
(1) 唐津市……51
(2) 肥前町……51
(3) 玄海町……51
(4) 鎮西町……52
6．筑後川下流用水事業に係る調査……54
(1) 佐賀東部導水路……54
(2) 大詫間幹線水路……54

Ⅳ．埋没地割り確認調査……55

1．調査の概要……55
2．調査の内容……55
(1) 白石西第一地区……55
(2) 白石西第二地区……56
3．小　結……61

Ⅴ．昭和62年度発掘調査の概要……62

1．江口二本松遺跡（北茂安町）……62
2．船石遺跡（上峰町）……64
3．船石南遺跡（上峰町）……66
4．石動三本松遺跡（東脊振村）……68
5．下石動遺跡（東脊振村）……70
6．石動裏田遺跡（東脊振村）……72
7．鶴前田遺跡（神埼町）……74
8．柳郷城跡（神埼町）……76
9．下六丁遺跡（神埼町）……78
10．横武四本黒木遺跡（神埼町）……80
11．藤ノ木西分遺跡（千代田町）……82

12. 余江西二本松遺跡（千代田町）……84
13. 直鳥四本松遺跡（千代田町）……86
14. 上和泉遺跡（佐賀市）……88
15. 佐保遺跡（大和町）……90
16. 池上二本松Ｂ遺跡（大和町）……92
17. 土師本村遺跡（諸富町）……94
18. 石塚古墳群１号古墳（諸富町）……96
19. 三重二ツ寺遺跡（諸富町）……98
20. 三重本村遺跡・三重庚神茶屋遺跡（諸富町）……100
21. 太田本村遺跡（諸富町）……102
22. 小杭村中遺跡（諸富町）……104
23. 上田町遺跡（多久市）……106
24. 木浦町遺跡（多久市）……108
25. 吉祥寺遺跡（武雄市）……110
26. みやこ遺跡（武雄市）……112
27. 小野原遺跡（武雄市）……114
28. 玉江遺跡（武雄市）……116
29. 甕屋窯跡Ａ遺跡（武雄市）……118
30. 湯崎東遺跡（白石町）……120
31. 多田遺跡（白石町）……122
32. 国広遺跡（鹿島市）……124
33. 西尾遺跡（伊万里市）……126
34. 草履作遺跡（唐津市）……128
35. 十蓮Ⅱ遺跡（唐津市）……130
36. 松尾田古墳群（呼子町）……132
37. 中川原西遺跡（鎮西町）……134

Ⅵ. 総　括……136

挿　図　目　次

図１　昭和62年度農業基盤整備事業に伴う文化財調査地区位置図……3
図２　佐賀東部地区周辺地形図……11
図３　基山町園部地区試掘溝設定図……13
図４　北茂安町北茂安東部地区試掘溝設定図……14
図５　三根町三根東地区試掘溝設定図……15
図６　中原町中原北部地区試掘溝設定図……17
図７　東脊振村（大塚ケ里地区）試掘溝設定図……19
図８　神埼町（石井ケ里地区）試掘溝設定図……21
図９　神埼町（横武地区）試掘溝設定図……23
図10　三田川町（田手地区）試掘溝設定図……25
図11　千代田町千代田工区（下西地区）試掘溝設定図（１）……28
図12　千代田町千代田工区（下西地区）試掘溝設定図（２）……29
図13　佐賀西部地区周辺地形図……30
図14　佐賀市久保泉東部地区試掘溝設定図……31
図15　佐賀市久保泉西部地区試掘溝設定図（１）……32
図16　佐賀市久保泉西部地区試掘溝設定図（２）……33
図17　佐賀南部地区周辺地形図……36
図18　武雄市橘地区第４工区試掘溝設定図……38
図19　武雄市武雄南部第３工区試掘溝設定図……39
図20　白石町白石西第二工区（多田）試掘溝設定図……41
図21　白石町白石西第四－２工区（久治）試掘溝設定図……42
図22　白石町白石西第四－２工区（湯崎）試掘溝設定図……43
図23　鹿島市鹿島西部地区試掘溝設定図……45
図24　佐賀北部地区周辺地形図……46
図25　伊万里市立岩地区試掘溝設定図……47
図26　佐賀上場地区周辺地形図……50
図27　陣跡位置図……52
図28　白石西第一地区位置図……55
図29　白石西第一地区試掘溝設定図……56
図30　白石西第一地区Ａトレンチ検出溝跡……57
図31　白石西第二地区位置図……57

図32　白石西第二地区試掘溝設定図……58
図33　白石西第二地区Ａ・Ｂトレンチ遺構実測図……59
図34　Ｂトレンチ土壙出土土器実測図……59
図35　白石第二地区Ｃトレンチ遺構配置図……60
図36　白石西第二地区Ｃトレンチ道路跡実測図……61
図37　江口二本松遺跡周辺地形図……62
図38　①江口二本松遺跡Ⅰ区全景　②Ⅱ区全景　③Ⅱ区ＳＨ01・ＳＨ02・ＳＨ03
　　④Ⅱ区ＳＨ04・ＳＨ05……63
図39　船石遺跡周辺地形図……64
図40　①・②船石遺跡Ⅵ区全景　③Ⅵ区ＳＨ609　④Ⅵ区ＳＨ606
　　⑤Ⅵ区ＳＢ602　⑥Ⅵ区ＳＤ610……65
図41　船石南遺跡周辺地形図……66
図42　①船石南遺跡ＳＪ104　②１号石棺墓・ＳＪ037・ＳＪ036　③ＳＪ017
　　④ＳＪ071・ＳＪ072～074・ＳＪ075　⑤１号集石遺構　⑥作業風景……67
図43　石動三本松遺跡周辺地形図……68
図44　①石動三本松Ａ遺跡第１地区全景　②ＳＨ006　③石動三本松Ｂ遺跡第１地区ＳＤ002
　　④ＳＤ004　⑤石動三本松Ｂ遺跡第２地区全景……69
図45　下石動遺跡周辺地形図……70
図46　①下石動遺跡第４地区ＳＤ302・303・304　②第５地区　③第６地区ＳＤ313
　　④第７地区ＳＨ311・312……71
図47　石動裏田遺跡周辺地形図……72
図48　石動裏田遺跡調査地区全景……72
図49　①石動裏田遺跡調査地区全景　②ＳＴ001　③・④ＳＴ002
　　⑤ＳＴ003　⑥ＳＴ004　⑦ＳＴ005……73
図50　鶴前田遺跡周辺地形図……74
図51　①鶴前田遺跡１区全景　②２区全景　③・④１区道路跡
　　⑤１区土層断面　⑥２区土層断面……75
図52　柳郷城跡周辺地形図……76
図53　①柳郷城跡調査区全景　②１区全景　③１区掘立柱建物跡
　　④１区土壙　⑤１区土壙遺物出土状況　⑥１区遺物出土状況……77
図54　下六丁遺跡周辺地形図……78
図55　①下六丁遺跡調査区全景　②ＳＤ001～004　③ＳＤ003・004
　　④ＳＤ001堆積状況　⑤ＳＤ004堆積状況　⑥ＳＤ003木製品出土状況……79

図56　横武四本黒木遺跡周辺地形図……80
図57　①横武四本黒木遺跡調査区全景　②２区全景　③ＳＤ002
④ＳＫ004・005　⑤ＳＫ004　⑥ＳＤ007遺物出土状況……81
図58　藤ノ木西分遺跡周辺地形図……82
図59　①藤ノ木西分遺跡Ａ地点東側全景　②Ｂ地点全景　③Ｃ地点全景……83
図60　余江西二本松遺跡周辺地形図……84
図61　①余江西二本松遺跡南側近景　②ＳＢ001　③ＳＰ026
④ＳＫ029……85
図62　直鳥四本松遺跡周辺地形図……86
図63　①直鳥四本松遺跡東側全景　②西側全景　③東側遺構検出状況
④西側遺構検出状況……87
図64　上和泉遺跡周辺地形図……88
図65　①上和泉遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ地区全景　②Ｃ地区ＳＫ010　③Ｃ地区ＳＫ011
④Ｄ・Ｅ地区全景　⑤Ｄ地区ＳＫ012　⑥Ｅ地区ＳＤ005……89
図66　佐保遺跡周辺地形図……90
図67　①佐保遺跡Ａ地区ＳＪ－31・32　②Ａ地区ＳＢ－２　③Ｂ地区全景
④Ｃ地区全景　⑤Ｃ地区掘立柱建物跡……91
図68　池上二本松Ｂ遺跡周辺地形図……92
図69　①池上二本松Ｂ遺跡全景　②ＳＪ－１　③ＳＰ－50
④ＳＤ－49・50・51……93
図70　土師本村遺跡周辺地形図……94
図71　①土師本村遺跡全景　②ＳＥ72　③ＳＫ９……95
図72　石塚古墳群１号古墳周辺地形図……96
図73　①石塚古墳群１号古墳全景　②挂甲出土状況　③馬具出土状況……97
図74　三重二ツ寺遺跡（諸富町）……98
図75　①三重二ツ寺遺跡全景　②・③遺物出土状況……99
図76　三重本村遺跡・三重庚神茶屋遺跡周辺地形図……100
図77　①三重本村遺跡Ⅰ区全景　②Ⅱ区ＳＤ001　③Ⅰ区南側溝
④Ⅱ区ＳＤ001……101
図78　太田本村遺跡周辺地形図……102
図79　①太田本村遺跡Ⅱ区全景　②Ⅱ区ＳＤ032　③Ⅱ区北側……103
図80　小杭村中遺跡周辺地形図……104
図81　①小杭村中遺跡２・３区全景　②２区全景　③３区全景

④２区ＳＤ041周辺　⑤１区ＳＥ004　⑥３区ＳＸ140……105
図82　上田町遺跡周辺地形図……106
図83　①上田町遺跡ＳＸ001　②ＳＸ002　③ＳＸ004……107
図84　木浦町遺跡周辺地形図……108
図85　木浦町遺跡第Ⅱ地点遺構配置図……108
図86　①木浦町遺跡第Ⅰ地点全景　②第Ⅱ地点ＳＨ001・002　③ＳＨ003・004……109
図87　吉祥寺遺跡周辺地形図……110
図88　①吉祥寺遺跡３区全景　②Ｐ－30　③ＳＪ303……111
図89　みやこ遺跡周辺地形図……112
図90　①みやこ遺跡２－23調査区　②ＳＰ024～026　③ＳＪ035……113
図91　小野原遺跡周辺地形図……114
図92　①小野原遺跡４Ｄ区全景　②４Ｄ区ＳＥ411　③・④４Ｂ区ＳＰ401……115
図93　玉江遺跡周辺地形図……116
図94　①玉江遺跡７区全景　②７区ＳＨ707　③７区ＳＰ702
④７区ＳＫ610……117
図95　甕屋窯跡Ａ遺跡周辺地形図……118
図96　①甕屋窯跡Ａ遺跡近景　②Ａ遺跡全景　③ＳＢ134
④ＳＫ125……119
図97　湯崎東遺跡周辺地形図……120
図98　①湯崎東遺跡第３層遺構全景　②Ｅ５区第２層近世墓地跡全景　③ＳＫ278
④ＳＥ201……121
図99　多田遺跡周辺地形図……122
図100　①多田遺跡Ａ地区ＳＤ002　②・③Ｃ地区ＳＸ01　④Ｃ地区遺構状況……123
図101　国広遺跡周辺地形図……124
図102　①国広遺跡Ａ・Ｂ区　②全景　③Ａ・Ｂ区
④溝及び小穴群　⑤ＳＤ－02・03　⑥木製鉤
⑦漆器椀……125
図103　西尾遺跡周辺地形図……126
図104　①西尾遺跡Ａ地点調査区全景　②掘立柱建物跡　③箱式石棺……127
図105　草履作遺跡周辺地形図……128
図106　①草履作遺跡全景　②(A)・(B)区　③３層土壙群
④２層土馬出土状況……129
図107　十蓮Ⅱ遺跡周辺地形図……130

図108　①十蓮Ⅱ遺跡全景　②・③Ｂ地区全景……131
図109　松尾田古墳群周辺地形図……132
図110　①・②松尾田古墳群ＳＴ002　③ＳＴ001……133
図111　中川原西遺跡周辺地形図……134
図112　①中川原西遺跡遠景　②土層堆積状況　③土坑全景
④ＳＫ01土坑・ＳＸ01配石遺構　⑤～⑧　出土石器……135

表　目　次

表１　農業基盤整備事業施行予定地区内文化財確認調査一覧表（昭和62年度）……5
表２　昭和62年度発掘調査遺跡一覧表……7

Ⅰ．調査に至る経過

1．昭和63年度農業基盤整備事業計画に伴う文化財確認調査

(1) 農業基盤整備事業施行計画に係る協議

佐賀県では県農林部所管の農業基盤整備事業及び市町村所管の団体営事業に係る埋蔵文化財の保護については、県農林部と県教育委員会の間で確認した『農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項』（昭和53年４月締結、昭和59年４月改正）に基づき協議調整している。昭和63年度農業基盤整備事業施行計画については、昭和62年９月下旬に農地整備課・農業振興課・建設鉱害課から施工予定地の図面を添え文化課に協議調整を求められた。

この施行計画に係る埋蔵文化財確認調査の対象面積は、合計1,670.1ha に達した。地区別にみると、佐賀東部地区（鳥栖市・基山町・北茂安町・三根町・中原町・東脊振村・神埼町・三田川町・千代田町）636.1ha、佐賀西部地区（佐賀市・諸富町・多久市）472.0ha、佐賀南部地区（武雄市・北方町・白石町・有明町・鹿島市・塩田町）466.7ha、佐賀北部地区（伊万里市・西有田町・相知町）51.7ha、佐賀上場地区（唐津市・肥前町・玄海町・鎮西町）43.6ha である。関係する農業基盤整備事業として、県営圃場整備事業・干拓地等農地整備事業・県営土地改良総合整備事業・団体営圃場整備事業・団体営土地改良総合整備事業をはじめ、農業構造改善事業・山村振興農林漁業対策事業、農道整備事業・農地等鉱害復旧事業など多岐にわたっている。

また、九州農政局所管の国営上場水利事業に伴う文化財協議（唐津市・玄海町・鎮西町）、水資源開発公団所管の筑後川下流用水事業に伴う文化財協議（北茂安町・千代田町・神埼町）もなされた。

(2) 文化財確認調査

協議をうけた事業計画地区（工区）の設計図に関して、まず工区内に周知の文化財が有るか遺跡地図等によって確認するとともに、関係市町村の文化財担当専門職員から埋蔵文化財に関する情報の収集を行うほか、遺跡が立地しうる地形等の自然条件にあるかといった点を含めてまず事前の検討作業を行った。この後、文化課では各事業計画地区について、関係市町村教育委員会の文化財担当職員とともに現地踏査を実施して検討を行い、その資料をもとに遺跡の存在が予測され確認調査が必要な地区・地点（表１）を決定した。

確認調査の実施に当たって、関係市町村の教育委員会・土地改良担当課、県農林部の関係諸課・各農林事務所との『昭和63年度農業基盤整備事業に係る文化財保護に関する協議会』（第一回）を県教育委員会が主催して10月16日に開催した。協議会においては、全体協議の後、市町村ごとに関係者による個別協議で事業計画の概要説明、現地踏査等の検討結果の報告、確認調査の円滑な実施に当たっての打合わせを行った。

文化財確認調査は、上場地方及び西松浦郡等の稲刈りが早く終了する市町村では10月下旬から開始し、その他の市町村でも麦の種蒔き時期との関係で11月中旬までに実施した。確認調査は、原則として２×２ｍの試掘溝を20ｍ間隔に碁盤目状に設定し、埋蔵文化財の有無・性格・広がり等を調査した。

(3) 農業基盤整備事業と文化財保護に係る協議

調査によって事業計画地（工区）内で確認された遺跡は、佐賀東部地区617,000㎡、佐賀西部地区35,000㎡、佐賀南部地区73,000㎡、佐賀北部地区5,000㎡、佐賀上場地区12,000㎡、の合計742,000㎡である。この確認調査の結果を基に、関係市町村教育委員会が主体となって個別協議を開催し、遺跡に影響を及ぼす地点については水路位置の変更・盛土による田面高の量上げ・圃場の区画変更などの設計変更を中心に技術的・経済的に可能な保存方法を検討し、事業計画と文化財保護に関する調整を図った。この間、農林側には数度にわたる設計変更に積極的に対処いただいた。

このような個別協議を経て、12月18日に第二回目の『農業基盤整備事業に係る文化財保護に関する協議会』を開催し、昭和63年度の事業計画と文化財保護との最終的な調整が成された。この結果、盛土法などの設計変更によって遺跡を現状保存を図り、87,300㎡については昭和63年度に発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

昭和62年度に関係各市町村教育委員会が実施した発掘調査（表２）は、昭和61年度に確認調査を実施し、農業基盤整備事業担当部局との協議を経た結果、記録保存で対応することになったものである。

２．埋没地割り確認調査

条里等の地下に埋没している地割りの確認調査は、昭和57年度から着手した。昭和62年度も、前年に引続き、杵島郡白石町の圃場整備事業の工事施工地域にて実施した。

このような現地での確認調査のほか、法務局並びに市町村が保管する「旧地籍図」について、その記載された内容を文化財保護の基礎資料とするため、縮小製図を行っているが、昭和62年度は、佐賀市役所保管分の一部について縮小製図を委託した。また、前年度までに実施した成果をもとに、『神埼郡地籍図集成（一)』を刊行した。

図1　昭和62年度農業基盤整備事業に伴う文化財調査地区位置図

	確認調査地区	発掘調査遺跡
I佐賀東部地区	1. 鳥栖市（鳥栖北部）	① 江口二本松遺跡
	2. 〃 （鳥栖西部）	② 船石遺跡
	3. 基山町（柳部）	③ 石動三本松遺跡
	4. 北茂安町（北茂安東部）	④ 下石動遺跡
	5. 〃 （北茂安西部）	⑤ 石動裏田遺跡
	6. 三根町（三根西一期）	⑥ 鵜前田遺跡
	7. 〃 （三根東）	⑦ 柳郷城跡
	8. 中原町（中原北部）	⑧ 藤ノ木西分遺跡
	9. 東背振村（大塚ケ里）	⑨ 金江西二本松遺跡
	10. 神埼町（石井ケ里・志波屋）	⑩ 高島四本松遺跡
	11. 〃 （横武）	⑪ 上和泉遺跡
	12. 三田川町（田手）	⑫ 土師本村遺跡
	13. 千代田町（下西）	⑬ 三重二ッ寺遺跡
	14. 〃 （迫島）	⑭ 三重本村遺跡
II佐賀西部地区	15. 佐賀市（久保泉東部）	⑮ 三重庚神茶屋遺跡
	16. 〃 （久保泉西部）	⑯ 大田本村遺跡
	17. 〃 （惣郷）	⑰ 石塚1号墳
	18. 〃 （城西第二）	⑱ 佐保遺跡
	19. 〃 （北川副）	⑲ 池上二本松B遺跡
	20. 〃 （江勢）	⑳ 上田町遺跡
	21. 諸富町（諸富第5）	㉑ 木浦町遺跡
	22. 〃 （諸富第4）	㉒ みやこ遺跡
	23. 多久市（多久東部）	㉓ 小野原遺跡
III佐賀南部地区	24. 武雄市（川登）	㉔ 玉江遺跡
	25. 〃 （武雄南部）	㉕ 吉祥寺遺跡
	26. 〃 （橘）	㉖ 婆屋窯跡A遺跡
	27. 〃 （本部）	㉗ 湯崎東遺跡
	28. 北方町（橋下・西王寺II）	㉘ 多田遺跡
	29. 〃 （大崎・第二高野）	㉙ 国広遺跡
	30. 白石町（白石西第一）	㉚ 西尾遺跡
	31. 〃 （白石西第二）	㉛ 十蓮II遺跡
	32. 〃 （白石西第四）	㉜ 草履作遺跡
	33. 有明町（有明第三）	㉝ 松尾田古墳群
	34. 鹿島市（鹿島西部）	㉞ 中川原西遺跡
	35. 〃 （中村）	㉟ 小杭村中遺跡
	36. 塩田町（堤ノ上）	㊱ 下六丁遺跡
IV佐賀北部地区	37. 伊万里市（国見山麓）	㊲ 橋武四本黒木遺跡
	38. 〃 （二里）	
	39. 〃 （立岩）	
	40. 西有田町（大山）	
	41. 〃 （南川）	
	42. 〃 （切株3期）	
	43. 相知町（大野）	
	44. 〃 （相知）	
V佐賀上場地区	45. 唐津市（唐ノ川）	
	46. 〃 （山田）	
	47. 〃 （枝去木）	
	48. 肥前町（切木）	
	49. 玄海町（小加倉）	
	50. 〃 （仮賀川内）	
	51. 〃 （串）	
	52. 鎮西町（加倉）	

表1　農業基盤整備事業施工予定地区内文化財確認調査一覧表（昭和62年度）

地区	市町村名	工事地区名	所在地	確認調査面積	調査結果	担当	備考
佐賀東部地区	鳥栖市	鳥栖北部	鳥栖市原古賀町字三本松	9.2(ha)	遺跡は確認されなかった	石橋	
		鳥栖西部	鳥栖市平田町字大平田	8.5	遺跡は確認されなかった	石橋	
	基山町	園部	基山町大字園部字本竿	12.0	古墳～平安時代の集落跡	山田・田中	東福寺遺跡
	北茂安町	北茂安東部	北茂安町大字江口	94.0	中近世の城館跡	中尾・七田	中野城跡
		北茂安西部	北茂安町大字中津隈	62.0	遺跡は確認されなかった	中尾・七田	
	三根町	三根西一期	三根町大字寄人	50.0	遺跡は確認されなかった	徳富	
		三根東	三根町大字西島	48.0	室町～近世集落跡	徳富	西島二本杉遺跡
	中原町	中原北部	中原町大字原古賀	26.4	弥生～古墳時代の集落跡	天本	原古賀遺跡群
	東脊振村	大塚ケ里	東脊振村大字大曲	35.0	古代官道・水田跡	久保	大曲二の坪遺跡
	神埼町	石井ケ里・志波屋	神埼町大字志波屋・大字鶴	61.0	弥生～古墳時代の集落跡	八尋・緒方	志波屋一の坪遺跡ほか
		横武	神埼町大字横武	50.0	中世～近世の環濠集落跡	八尋・緒方	横武城跡
	三田川町	田手	三田川町大字田手	15.0	奈良・平安時全の集落跡	草野	殿ノ隈遺跡ほか
	千代田町	下西	千代田町大字下西	85.0	中世の集落跡・遺物包含層	堤	余江西二本松遺跡・下西八本松遺跡
		迎島	千代田町大字迎島	80.0	遺跡は確認されなかった	堤	
佐賀西部地区	佐賀市	久保泉東部	佐賀市久保泉町大字下和泉	43.0	弥生・中世の集落跡	福田	本村遺跡
		久保泉西部	佐賀市久保泉町大字下和泉	18.0	弥生～中世の集落跡	福田	立野遺跡・村徳永遺跡
		嘉瀬	佐賀市鍋島町荻野	96.0	遺跡は確認されなかった	東中川	
		城西第二	佐賀市本庄町	60.0	遺跡は確認されなかった	福田	
		北川副	佐賀市北川副町	61.0	遺跡は確認されなかった	福田	
		巨勢	佐賀市巨勢町	40.0	遺跡は確認されなかった	福田	
	諸富町	諸富第5	諸富町大字為重・山領	50.0	遺跡は確認されなかった	種浦	
		諸富第4	諸富町大字為重	71.0	遺跡は確認されなかった	種浦	
	多久市	多久東部	多久市南多久町大字下多久	33.0	遺跡は確認されなかった	西村・東中川	
佐賀南部地区	武雄市	川登	武雄市東川登町大字内田・永野	84.0	古墳時代の集落跡	原田・坂井	天神裏遺跡
		武雄南部	武雄市橘町大字大日	33.0	中世の集落跡	原田・坂井	井手橋遺跡
		橘	武雄市橘町大字大日・永島	40.0	中世の集落跡	原田・坂井	市場遺跡
		本部	武雄市若木町大字本部	9.0	遺跡は確認されなかった	原田・坂井	
	北方町	橋下・医王寺Ⅱ	北方町大字芦原	53.6	遺跡は確認されなかった	森田	
		大崎・第二高野	北方町大字大崎	18.2	遺跡は確認されなかった	森田	
	白石町	白石西第一	白石町大字堤	20.0	遺跡は確認されなかった	渡部	
		白石西第二	白石町大字多田・網代	47.0	古墳～中世の集落跡	渡部	多田遺跡
		白石西第四	白石町大字湯崎・久治	48.0	弥生～中世の集落跡	渡部	久治遺跡ほか
	有明町	有明第三	有明町大字辺田	33.0	遺跡は確認されなかった	東中川	
	鹿島市	鹿島西部	鹿島市大字三河内・納富分　他	27.0	縄文時代包含層	加田	吹野遺跡
		中村	鹿島市大字中村	46.0	遺跡は確認されなかった	加田	
	塩田町	堤ノ上	塩田町大字久間字堤ノ上	7.9	遺跡は確認されなかった	峯崎・七田	
佐賀北部地区	伊万里市	国見山麓	伊万里市大坪町古賀	0.2	遺跡は確認されなかった	盛・船井	
		二里	伊万里市二里町大里・中里	2.0	遺跡は確認されなかった	盛・船井	
		立岩	伊万里市山代町立岩	3.0	旧石器～縄文時代包含層	盛・船井	上屋敷遺跡
	西有田町	大山	西有田町大字大木・山谷	13.2	遺跡は確認されなかった	徳富・徳永	
		曲川	西有田町大字曲川	13.0	遺跡は確認されなかった	徳富・徳永	
		切楠3期	西有田町大字大木・山谷	0.3	遺跡は確認されなかった	徳富・徳永	
	相知町	大野	相知町大字大野	14.0	遺跡は確認されなかった	徳富	
		相知	相知町大字尾部田	6.0	遺跡は確認されなかった	森	
佐賀上場地区	唐津市	唐ノ川	唐津市大字唐ノ川	31.2	旧石器～縄文時代包含層	田島	唐ノ川遺跡群
		山田	唐津市大字山田	10.0	遺跡は確認されなかった	田島	
		枝去木	唐津市大字枝去木	1.5	遺跡は確認されなかった	田島	
	肥前町	切木	肥前町大字切木	0.5	遺跡は確認されなかった	森田・東中川	
	玄海町	小加倉	玄海町大字有浦下	0.3	遺跡は確認されなかった	徳永	
		値賀川内	玄海町大字値賀川内	1.0	中・近世の陣跡	徳永・東中川	木下利房陣跡
	鎮西町	串	鎮西町大字串	2.4	遺跡は確認されなかった	明瀬	
		加倉	鎮西町大字加倉	0.1	旧石器時代包含層	明瀬	中川原西遺跡
筑後川流水用	北茂安町	北茂安東部	北茂安町大字白壁	1.4	遺跡は確認されなかった	徳永	
	神埼町	横武	神埼町大字横武	0.2	遺跡は確認されなかった	徳永	
	千代田町	下西	千代田町大字下西	2.3	遺跡は確認されなかった	徳永	

表２　昭和62年度発掘調査遺跡一覧表

市町村名	遺跡名	遺跡の所在地	調査面積	調査主体者	調査担当者	遺跡の内容	略号
北安茂町	江口二本松遺跡	北茂安町大字江口字二本松	1,300㎡	北茂安町教委	中尾	弥生時代の集落跡	E G N
上峰村	船石遺跡	上峰村大字堤字一本谷	4,200㎡	上峰村教委	原田・鶴田	縄文～弥生時代・奈良時代の集落跡	F N I
	船石南遺跡	上峰村大字堤字一本谷	300㎡			弥生時代の墓地	F I M
東脊振村	石動三本松遺跡	東脊振村大字石動字三本松	1,400㎡	東脊振村教委	久保	古墳時代～中世の集落跡	I S B
	下石動遺跡	東脊振村大字石動字三本松	4,200㎡			弥生時代～中世の集落跡	S I N
	石動裏田遺跡	東脊振村大字石動字四本杉	600㎡			古墳群（２基を調査）	I U T
神埼町	鶴前田遺跡	神埼町大字鶴字前田	1,800㎡	神埼町教委	八尋・緒方	古代官道跡	T M D
	柳郷城跡	神埼町大字横武	2,600㎡			中世～近世の館跡・環濠集落跡	Y G O
千代田町	藤ノ木西分遺跡	千代田町大字下板字西四ノ坪	1,500㎡	千代田町教委	堤	中世の集落跡	F N K
	余江西二本松遺跡	千代田町大字余江字西二本松	2,000㎡			中世の集落跡	A N N
	直鳥四本松遺跡	千代田町大字直鳥字四本松	800㎡			弥生時代～古墳時代の集落跡	N Y M
佐賀市	上和泉遺跡	佐賀市久保泉町大字上和泉字泉	4,000㎡	佐賀市教委	福田	平安時代の集落跡	K I Z
諸富町	土師本村遺跡	諸富町大字大堂字土師	800㎡	諸富町教委	種浦	奈良時代～中世の集落跡	H J H
	三重二ツ寺遺跡	諸富町大字為重字三重二ツ寺	1,900㎡			奈良時代～中世の集落跡	M F T
	三重本村遺跡	諸富町大字為重字三重	1,200㎡			奈良時代～近世の集落跡	M H N
	三重庚神茶屋遺跡	諸富町大字為重字三重				奈良時代～近世の集落跡	
	太田本村遺跡	諸富町大字大堂字太田	900㎡			中世～近世の集落跡	OHM－2
	石塚１号墳	諸富町大字為重字石塚	76㎡			古墳群	ISZ－1
大和町	佐保遺跡	大和町大字池上字佐保	4,800㎡	大和町教委	川崎	弥生時代～平安時代の集落跡・墓地	S O H
	池上二本松Ｂ遺跡	大和町大字池上字池上	3,500㎡			弥生時代の墓地	I U B
多久市	上田町遺跡	多久市南多久町大字下多久字木浦町	1,000㎡	多久市教委	西村	弥生～古墳時代の集落跡	J Y D
	木浦町遺跡	多久市南多久町大字下多久字木浦町	2,800㎡			古墳時代の集落跡・祭祀遺構	K U R
武雄市	みやこ遺跡	武雄市橘町大字大日字郷ノ木	1,000㎡	武雄市教委	原田・坂井	弥生時代と中世の集落跡・墓地	M Y K
	小野原遺跡	武雄市橘町大字大日字小野原	1,000㎡			古墳時代の集落跡	O N B
	玉江遺跡	武雄市橘町大字永島字北上野	3,800㎡			古墳時代～中世の集落跡	T A M
	吉祥寺遺跡	武雄市東川登町大字椅野字浦川内	4,300㎡			近世阪集落跡	K S G
	甕屋窯跡Ａ遺跡	武雄市西川登町大字小田志字亀屋	2,400㎡			近世窯跡の工房跡	KKK－A
白石町	湯崎東遺跡	白石町大字湯崎字湯崎	3,000㎡	白石町教委	渡部	弥生時代～中世の集落跡	Y S H
	多田遺跡	白石町大字今泉字多田	3,200㎡			古墳時代～奈良時代の集落跡	T A D
鹿島市	国広遺跡	鹿島市大字中村字国広	500㎡	鹿島市教委	加田	中世の集落跡	K N H
伊万里市	西尾遺跡	伊万里市二里町字西尾	1,400㎡	伊万里市教委	盛・船井	旧石器～中世の包含層及び集落跡	N S O
唐津市	十蓮Ⅱ遺跡	唐津市湊町字十蓮	2,000㎡	唐津市教委	中島・田島	旧石器時代～縄文時代の集落跡	J R Ⅱ
	草履作遺跡	唐津市枝去木字草履作	4,750㎡			縄文時代と中近世の集落跡	Z O T
呼子町	松尾田古墳群	呼子町大字殿ノ浦字マツヲダ	1,700㎡	呼子町教委	東中川	古墳群（２基）	M T D
鎮西町	中川原西遺跡	鎮西町大字加倉字中川原	200㎡	鎮西町教委	明瀬	旧石器時代～縄文時代の包含層	N G N
諸富町	小杭村中遺跡	諸富町大字大堂・山領	5,970㎡	佐賀県教委	平嶋・徳永	古墳時代～中世の集落跡	O G M
神埼町	下六丁遺跡	神埼町大字横武字灰巻	1,054㎡	佐賀県教委	徳永	中世の集落跡	S R C
	横武四本黒木遺跡	神埼町大字横武字四本黒木	1,116㎡			中世の集落跡	Y T Y

Ⅱ．調査組織

1．調査主体

佐賀県教育委員会　（事務局　文化課）

2．総　　括

事務局長　北村　一義　県文化課長（昭和６２年５月まで）武藤佐久二

県文化課長（昭和６２年６月より）次　　長　尾形　善郎

県文化課参事　大坪　英樹　県文化課長補佐

3．庶　　務

菊池　文男　県文化課庶務係長　　鶴田　明美　県文化課庶務係

直塚　清純　県文化課庶務係　　西岡　真一　県文化課庶務係

4．調　　査

調査主任　森　醇一朗　県文化課文化財調査第２係長

調査員	天本　洋一	県文化課文化財調査第２係		加田　隆志	鹿島市教育委員会
	東中川忠美	〃		種浦　修	諸富町教育委員会
	七田　忠昭	〃		八尋　実	神埼町教育委員会
	森田　孝志	〃		緒方祐次郎	神埼町教育委員会
	徳富　則久	〃		堤　安信	千代田町教育委員会
	徳永　貞紹	〃		草野　誠司	三田川町教育委員会
	平嶋　文博	〃		久保　伸洋	東脊振村教育委員会
	福田　義彦	佐賀市教育委員会		山田　正	基山町教育委員会
	田島　龍太	唐津市教育委員会		中尾　修二	北茂安町教育委員会
	石橋　新次	鳥栖市教育委員会		原田　大介	上峰村教育委員会
	西村　隆司	多久市教育委員会		明瀬　慎吾	鎮西町教育委員会
	船井　向洋	伊万里市教育委員会		渡部　俊哉	白石町教育委員会
	原田　保則	武雄市教育委員会		峯崎　幸清	塩田町教育委員会
	坂井　義哉	武雄市教育委員会			

5．調査協力

佐 賀 市教育委員会	千代田町教育委員会	玄 海 町教育委員会
唐 津 市教育委員会	三田川町教育委員会	鎮 西 町教育委員会
鳥 栖 市教育委員会	東脊振村教育委員会	呼 子 町教育委員会
多 久 市教育委員会	基 山 町教育委員会	西有田町教育委員会
伊万里市教育委員会	中 原 町教育委員会	北 方 町教育委員会
武 雄 市教育委員会	北茂安町教育委員会	白 石 町教育委員会
鹿 島 市教育委員会	三 根 町教育委員会	有 明 町教育委員会
諸 富 町教育委員会	上 峰 村教育委員会	塩 田 町教育委員会
大 和 町教育委員会	相 知 町教育委員会	
神 埼 町教育委員会	肥 前 町教育委員会	

九州農政局上場農業水利事業所

水資源開発公団筑後川下流用水建設所

佐賀県農林部土地改良課

農地整備課

建設鉱害課

農業振興課

佐賀中部農林事務所

唐津農林事務所

鳥栖農林事務所

伊万里農林事務所

武雄農林事務所

鹿島農林事務所

各市町村土地改良担当課

各市町村土地改良区

地元各位

Ⅲ．昭和62年度文化財確認調査の内容

1．佐賀東部地区の調査

図２　佐賀東部地区周辺地形図（1：100,000）

1．鳥栖市（鳥栖北部）
2．鳥栖市（鳥栖西部）
3．基山町（園部）
4．北茂安町（北茂安東部）
5．北茂安町（北茂安西部）
6．三根町（三根西一期）
7．三根町（三根東）
8．中原町（中原北部）
9．東脊振村（大塚ケ里）
10．神埼町（石井ケ里・志波屋）
11．神埼町（横武）
12．三田川町（田手）
13．千代田町（下西）
14．千代田町（迎島）
①江口二本松遺跡
②船石遺跡
③石動三本松遺跡
④下石動遺跡
⑤石動裏田遺跡
⑥鶴前田遺跡
⑦柳郷城跡
⑧藤ノ木西分遺跡
⑨余江西二本松遺跡
⑩直鳥四本松遺跡

(1) 鳥栖市　（鳥栖北部地区、鳥栖西部地区）

鳥栖北部地区は鳥栖市原古賀町字三本松の9.2haについて確認調査を実施した。現地は朝日山の北西方、ＪＲ路線付近から県道鳥栖・川久保線へと北西方向に伸びる、谷状の水田地帯（標高20～26ｍ）である。東側の低丘陵上には麓遺跡（弥生時代の散布地）、その南に原古賀遺跡（古墳～中世の集落跡）があり、西には薄尾遺跡（縄文時代）や薄尾古墳群がある。

調査は24箇所の試掘溝を設定して行った。その結果、４箇所の試掘溝で砂層や砂礫層から土師器の小破片が出土した他は、遺構・包含層は検出されなかった。

鳥栖西部地区では鳥栖市平田町字大平田の３haについて確認調査を実施した。現地はＪＲ麓駅の西、線路の南で、所熊山の北側に位置する標高22～28ｍの水田部である。18箇所の試掘溝を設定したが、遺構・包含層とも検出されなかった。

(2) 基山町　（園部地区　図３）

園部地区は基山町大字園部字東福寺・字本竿・字立花の３地域で対象面積約12haの確認調査を実施した。

東福寺地域の調査対象地は園部谷から秋光川・山下川に沿って開けた標高37～42ｍの平坦部に相当し、35箇所の試掘溝調査の結果、土壙群が検出され６～７世紀の須恵器や土師器片が出土した。個別協議の結果、水田部は盛土工法で対応し、水路部の450㎡を発掘調査することとなった。

本竿地域の調査対象地は園部谷から東流する山下川の南側に接し、水田となっている標高約43～46ｍの比較的平坦な地形である。12箇所の試掘溝を設定したが、遺構・包含層は検出されなかった。

立花地域の調査対象地は約4.1haで、杓子ケ峰から伸びる丘陵と契山から東へ伸びる丘陵に挟まれた扇状地上の水田と畑部（標高55～57ｍ）である。南側には昭和59年度の確認調査で奈良～平安時代の遺構・遺物を検出した立花西遺跡が隣接している。33箇所の試掘溝を設定し調査した結果、土壙及び柱穴が検出された。須恵器・土師器が出土し、奈良・平安時代の集落跡と推定された。この取扱いについては個別協議の結果、工事計画を昭和６４年以降に持ち送ることとなっが、昭和59年度発見分も合せると広い面積となるため設計変更を図るよう求めた。

(3) 北茂安町（北茂安東部地区、北茂安西部地区　図４）

北茂安東部地区は北茂安町大字白壁の標高約４～５ｍの平野部で、調査地域の東側に古墳時代の石貝遺跡、南側には中世の白壁五本松遺跡・座主野遺跡等が所在する。確認調査は28箇所の試掘溝を設定したが、遺構・遺物は発見されなかった。しかし、筑後川の右岸堤防に近接する中世の中野城跡周辺では、その周壕とも推定される部分が水路予定部にかかるため、発掘調査（600㎡）を実施することとなった。

北茂安西部地区は北茂安町大字中津隈字二本松及び字三本松の標高3.8～5.5ｍの平野部に17

図3　基山町園部地区試掘溝設定図

箇所の試掘溝を設定した。周辺の丘陵端部には弥生時代の中津隈遺跡や干飯遺跡が所在するが、確認調査地域では耕作土の下は砂層及び砂礫層であり、遺構・遺物は発見されなかった。

図4　北茂安町北茂安東部地区試掘溝設定図

(4)　三根町　（三根東地区、三根西一期地区　図5）

三根東地区は三根町大字西島の切通川と寒水川に挟まれた平野部で、調査地区内には北に弥生時代の田中遺跡及び南に西島二本杉遺跡が知られる。南西方には本分貝塚を始めとする弥生時代の貝塚群が多く分布している。試掘溝を36箇所設定して調査したところ、西島二本杉遺跡

図5　三根町三根東地区試掘溝設定図

のうち西のクリークで囲まれた島部において4,800㎡程の広がりをもつ中世～近世の集落跡の所在を確認した。この地点は、南北方向の水路部（1,000㎡）と平行して町道も計画されており、同時に発掘調査を実施することとなった。

三根西一期地区は南里ケ里工区（三根町大字寄人）で５箇所の試掘溝、新町工区（三根町大字市武）で31箇所の試掘溝を設定して、確認調査を実施した。三根町西部の南里ケ里工区は千代田町・三田川町と接する地域で、田手川と井柳川に挟まれた標高3.8～４ｍの平野部である。南里ケ里集落一帯には弥生時代の南里ケ里遺跡が所在し、その西南方には古代の南里ケ里貝塚が知られている。一部の試掘溝から土器片が検出されたが周辺遺跡からの流れ込みと判断された。新町工区は三根町域が中央部で最も括れた所に相当し、永石集落の周辺地域に31の試掘溝を設定して調査した結果、遺構・遺物は発見されなかった。なお、「宇都宮さん」と呼ばれる島状の水田中の西側が開いたコ字状プランの土塁らしい高まりは、昭和６３年度に確認調査した結果、瓦用の粘土を採取した時に出来た土盛りと判明した。またあわせてこの南方のクリークで囲まれた微高地（墓地・雑木地）も確認調査したところ、遺構・遺物は発見されなかった。

(5) 中原町　（中原北部地区　図６）

中原北部地区は中原町原古賀の上地集落以南の、ＪＲ長崎本線を越えてさらに南へ国道34号線までの26.4ha が当初の施行計画地である。確認調査は全体で287箇所の試掘溝を設定して実施した。その結果、削平される水田部と水路部に分布する遺跡は、34号線の北側で22,000㎡、ＪＲ長崎本線を挟んだ２地点で計3,000㎡、ＪＲ長崎本線の北側で15,000㎡と4,500㎡、その北方の上地集落の南側500㎡、合計45,000㎡という膨大な面積になることが判明した。遺跡の性格は弥生時代の集落跡とみられ、古墳時代～奈良時代の集落跡も一部の地点では存在するようであった。中原町では昭和63年が圃場整備事業の着手初年度であった。確認調査の結果によれば当初の施行計画及び設計では遺跡の保存上問題があり、また調査体制も未整備なため、個別協議の結果、まず施行計画面積を減らしたうえ、設計変更によって要調査面積を12,600㎡とし、調査体制を整えることとなった。

(6) 東脊振村（東脊振工区第２工事区・大塚ケ里　図７）

東脊振工区第２工事区は東脊振村大字大曲字二ノ坪・鶴ノ森及び永枕に所在する。調査は永田ケ里・大塚ケ里から南の辛上に至る田手川東岸の35ha について実施した。この地域は村内では最も低地にあたり平坦な水田地帯である。調査対象地の西側は田手川を挟んで丘陵上に吉野ケ里遺跡群が知られ、東側には弥生時代から古墳時代の集落跡である松原遺跡や瀬ノ尾遺跡が所在している。ところが試掘溝調査の結果は、明確な遺構は検出されず、また磨滅した状態の土器や陶磁器が少量発見されだけであった。しかし調査対象地の南端で三田川町との境界をなす部分は、吉野ケ里丘陵を切通して西に続く古代官道の推定地であり、またその付近には水田跡の存在する可能性があったため、この地点（3,200㎡）の発掘調査を実施することとなっ

図6　中原町中原北部地区試掘溝設定図

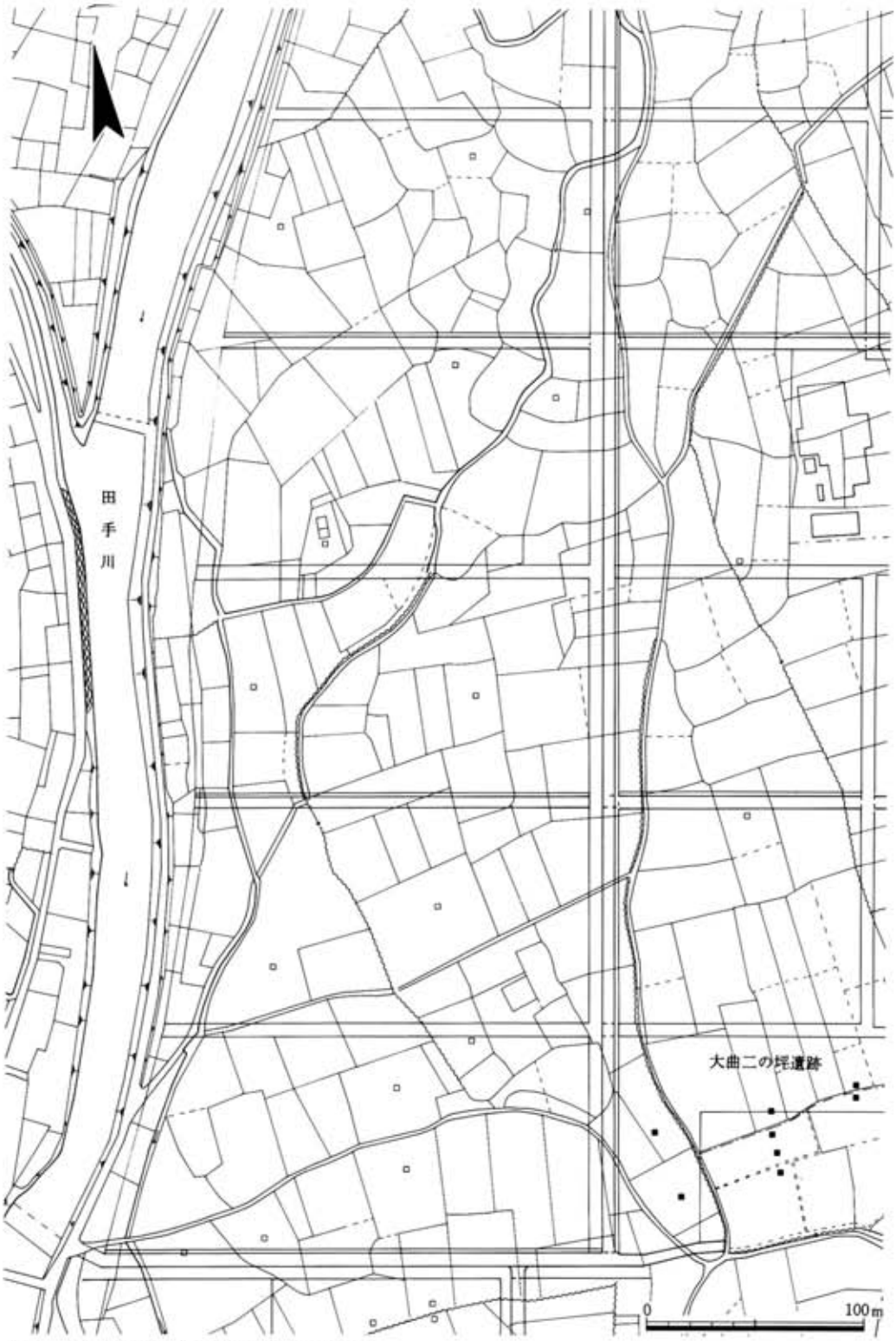


図7　東脊振村大塚ケ里地区試掘溝設定図

た。

(7) 神埼町　（神埼工区石井ケ里地区・横武地区、志波屋地区　図8・9）

神埼工区石井ケ里地区は神埼町大字志波屋及び大字鶴のうち61ha について確認調査を実施した。調査対象地は神埼町の北東部に位置し、三本松川と馬場川に挟まれた低段丘上に位置し110箇所の試掘溝を設定し調査したところ、古墳時代から奈良時代にかけての集落跡など遺跡の範囲は170,000㎡に及ぶことが確認された。このうち水路工事部分等にかかる遺跡面積は14,000㎡にも達することが判明した。

横武地区は神埼町大字横武の横武集落周辺の50ha が対象地で、北はJR長崎本線及び県道小城・北茂安線以南、南は国道34号線までの水田地帯である。横武集落の南にはクリークが発達し、そこには横武城跡や館跡が所在している。確認調査の結果、水路工事部分にあたる遺跡面積だけでも26,000㎡に達することが判明した。検出された遺構に溝状遺構・土壙・小穴があり、一部では焼土や灰層が集中する島があった。遺物は主に土師器類が出土した。特に、横武城のクリーク公園予定地の多数の島には表土下に遺構・遺物が存在することが確認された。

志波屋地区は農道整備事業に係るもので、県道佐賀川久保・鳥栖線の志波屋から三谷方面への計画路線を確認調査した。当地には旧石器時代の船塚遺跡があり、また一部で方形の竪穴住居跡とみられる遺構や土壙を検出した。この農道計画については協議の結果、昭和64年度に持ち越すこととなった。

神埼町においては、圃場整備事業にかかる遺跡面積は合計40,000㎡に達するので、個別協議において大幅な設計変更なり、計画の見直しを要請した。再協議の結果、石井ケ里地区及び横武地区で合計24,000㎡の発掘調査を実施することとなった。

(8) 三田川町（三田川工区田手地区　図10）

三田川工区田手地区は三田川町大字田手字二本杉及び杉籠と大字吉田字殿隈の水田・畑が確認調査対象地となった。西は田手川、北は三田川町との境界、東は国道385号線に囲まれ、南は県道吉田・鶴線の南方までがその範囲である。西の吉野ケ里丘陵上には弥生時代から中世の遺跡が集中し、志波屋四ノ坪遺跡で確認された古代の官道の東側延長は今回の調査対象地域に入っている。また南側には弥生時代から中世の杉籠遺跡が所在している。試掘溝36箇所を設定して調査した結果、溝のほか弥生時代から平安時代までの土器片や中世の陶磁器片が出土した。個別協議の結果、中国塗料（株）の敷地の北方地点及び県道吉田・鶴線の北の２地点、合計３地点の水路部2,600㎡について調査を実施することとなった。

(9) 千代田町（千代田工区下西地区、迎島地区　図11・12）

千代田工区下西地区は千代田町大字下西字八本松及び大字余江字西二本松ほか、の２地域について確認調査を実施した。

大字余江字西二本松ほか地域は、昭和62年度施工の追加工事計画によって調査したものであ

図８　神埼町石井ケ里地区試掘溝設定図

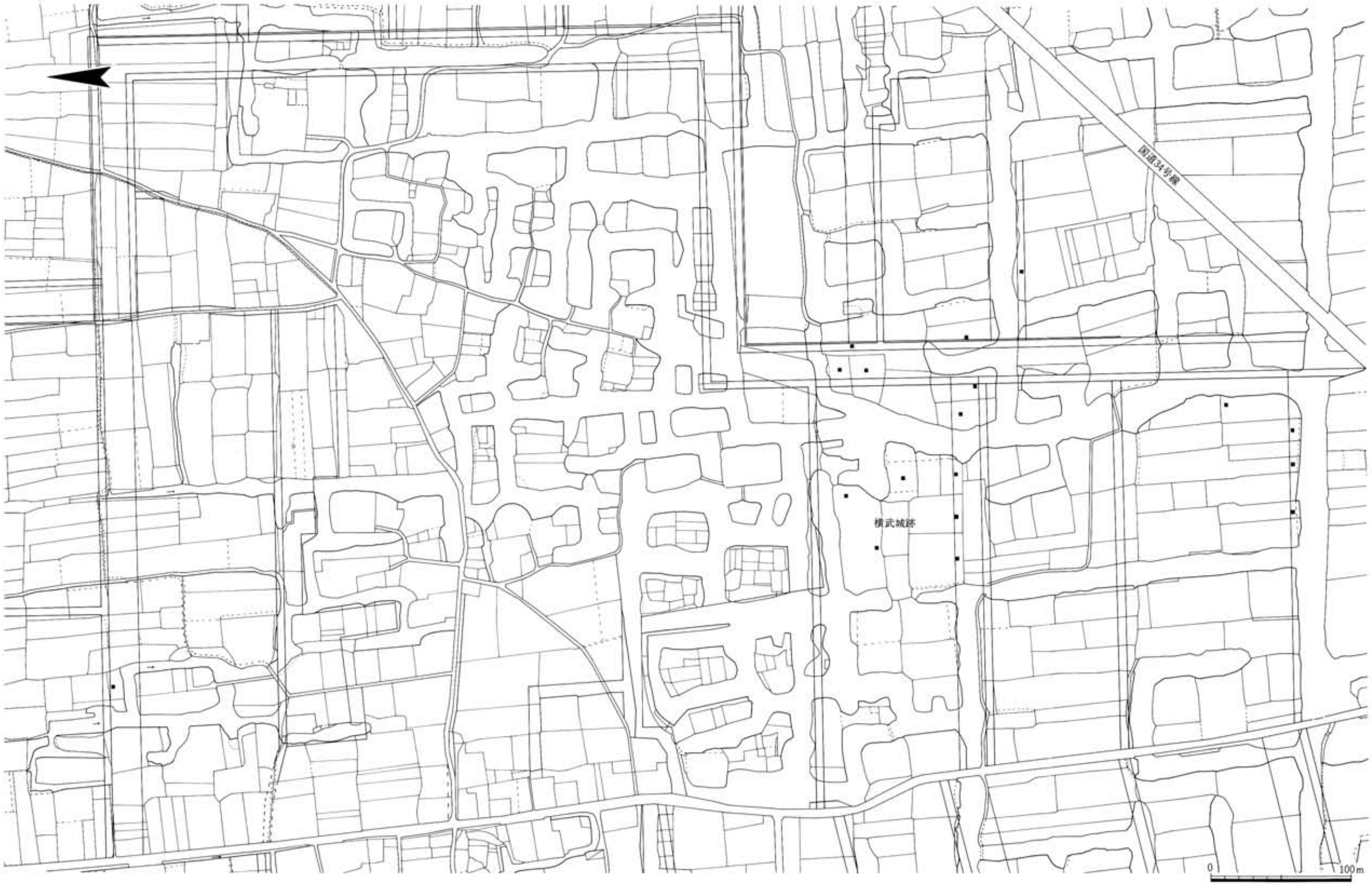


図9　神埼町横武地区試掘溝設定図

図10　三田川町田手地区試掘溝設定図

る。対象地は、原ノ町交差点南方に広がる標高2.5～３ｍ強の水田地帯である。対象地は、東は中地江川、西はほぼ県道神埼・諸富線で限られた約60ha の地域で、水路予定部に５２箇所の試掘溝を設定して調査した。その結果、５箇所の試掘溝で小穴のほか溝・土壙らしき掘込みが検出された。出土遺物には平安時代の土師器などがある。これによれば、東野ケ里集落の西南部から大橋集落の北にかけて平安時代以降に形成された集落跡とみられる。遺跡は旧中地江川及びクリークによって削られているようであり、現存する遺跡面積は10,000㎡程度と推定された。個別協議の結果、水路予定地にあたる1,600㎡を昭和62年度に調査することとなった。

大字下西字八本松ほか地域は国道264号線より南、余り江地区西側の水田地帯（標高3.5ｍ前後）で、下西・仁田の両集落周辺の水路予定地に81箇所の試掘溝を設定した。確認調査の結果、中世の遺物包含層が検出された水路予定地2,000㎡について調査を実施することとなった。

迎島地区は千代田町大字迎島字二本柳ほかの80ha が対象地である。標高3.5ｍ前後の平坦な水田地帯で、一部畑が見られる。水路予定地に71箇所の試掘溝を設定して確認した結果、遺構・遺物は検出されなかった。

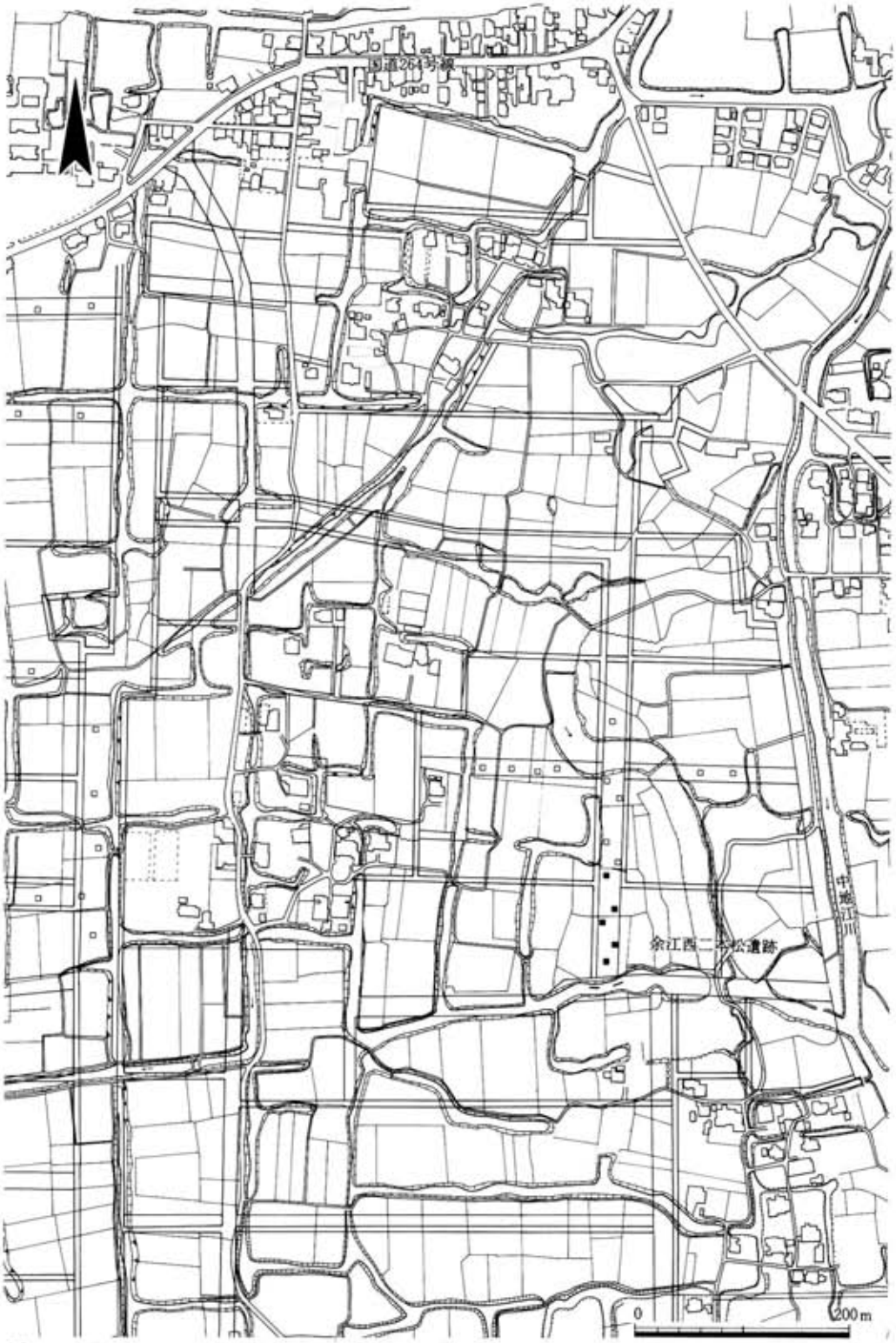


図11　千代田町千代田工区下西地区試掘溝設定図(1)

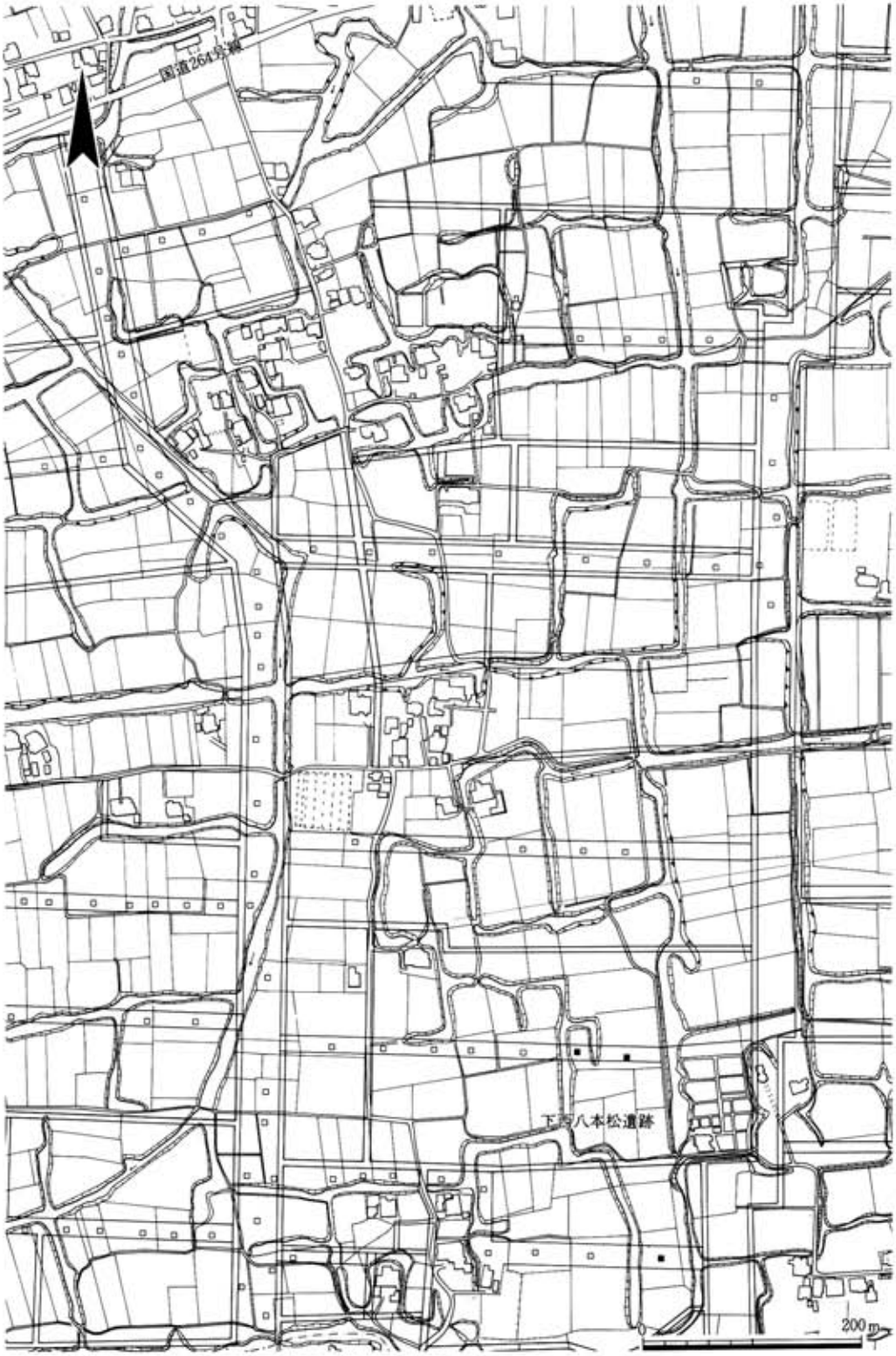


図12　千代田町千代田工区下西地区試掘溝設定図(2)

2．佐賀西部地区の調査

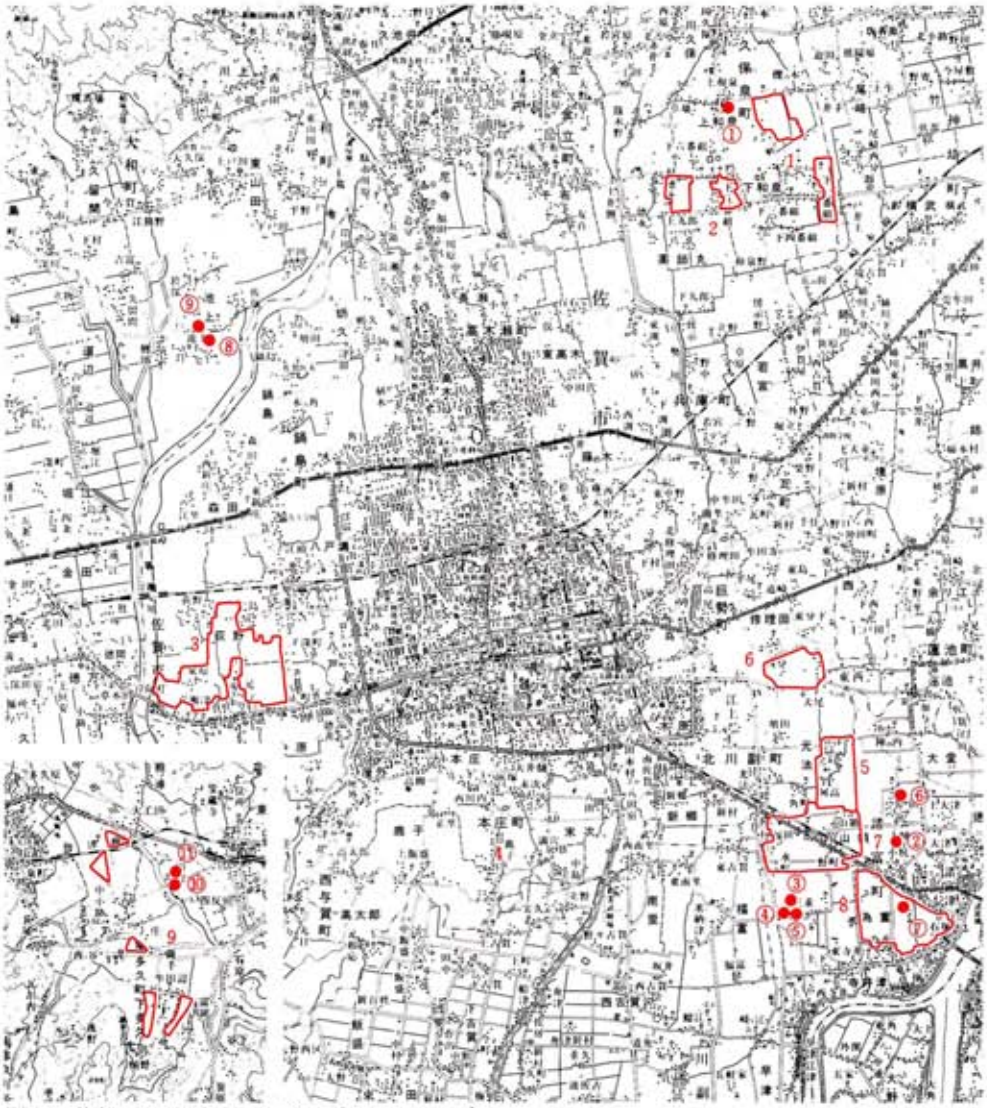


図13　佐賀西部地区周辺地形図（1：100,000）

1．佐賀市（久保泉東部地区）
2．佐賀市（久保泉西部地区）
3．佐賀市（嘉瀬地区）
4．佐賀市（城西第二地区）
5．佐賀市（北川副地区）
6．佐賀市（巨勢地区）
7．諸富町（諸富第５地区）
8．諸富町（諸富第４地区）
9．多久市（多久東部地区）

①上和泉遺跡
②土師本村遺跡
③三重二ツ寺遺跡
④三重本村遺跡
⑤三重庚神茶屋遺跡
⑥太田本村遺跡
⑦石塚１号墳
⑧佐保遺跡
⑨池上二本松Ｂ遺跡
⑩上田町遺跡
⑪木浦町遺跡

(1) 佐賀市　（久保泉東部地区、久保泉西部地区、嘉瀬地区、城西第二地区、北川副地区、巨勢地区　図14・15・16）

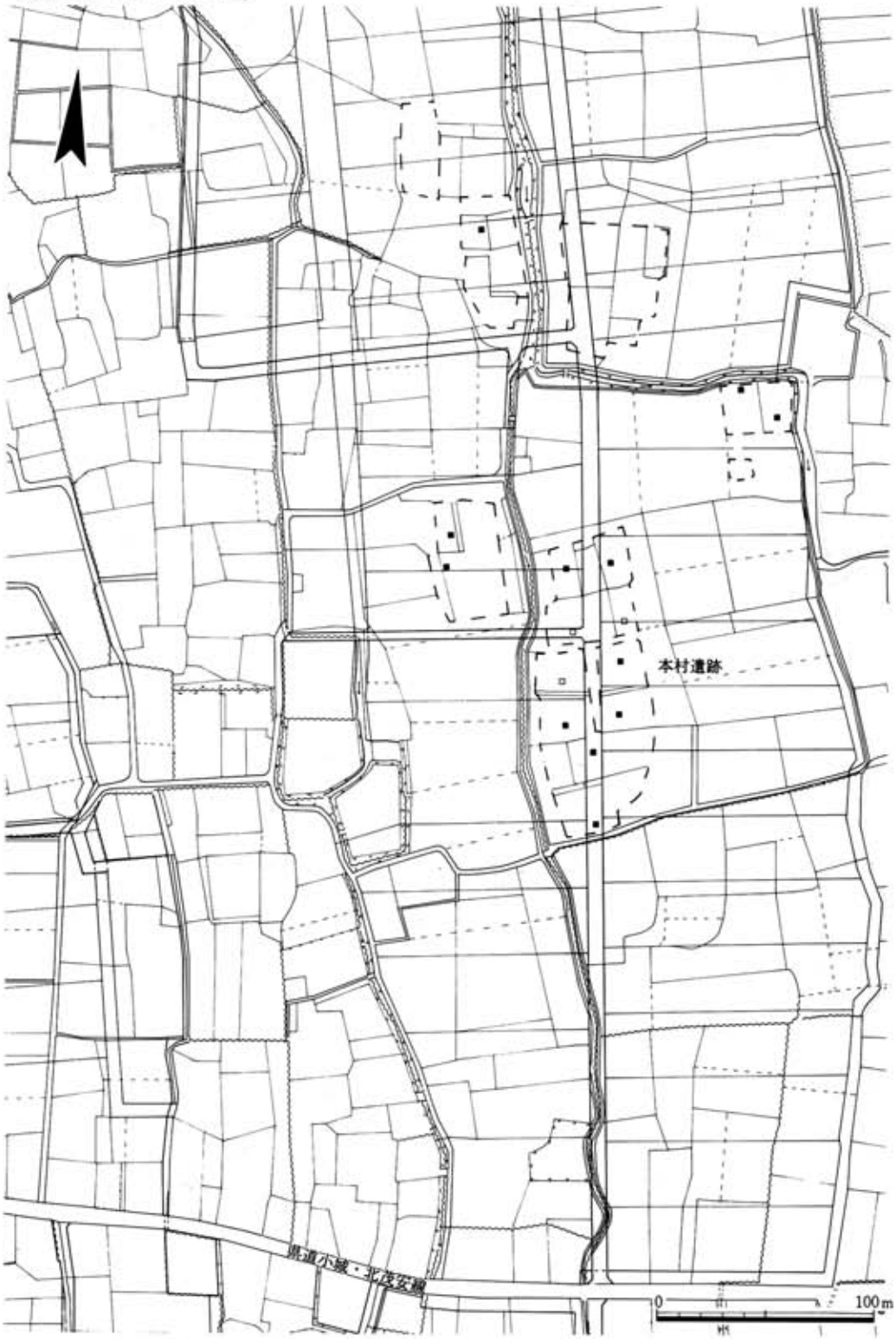


図14　佐賀市久保泉東部地区試掘溝設定図

久保泉東部地区は佐賀市久保泉町大字下和泉に所在し、北の第２工区・南の第３工区の合計43haについて確認調査を実施した。対象地は久保泉町の東南部に位置し、水田が大部分を占め、水田との比高約１ｍの畑地が点在している。第２工区では畑地部分と水路予定地に重点的に試掘溝を設定した。畑地部分については微量の土器片や黒色堆積土がみられたが遺構は検出されなかった。水路予定地からは遺構・遺物とも検出されなかった。第３工区では畑地部分の

図15　佐賀市久保泉西部地区試掘溝設定図(1)

試掘溝において弥生時代から中世に及ぶ溝・土壙・井戸などの遺構が検出され、同時代の土器類も少量出土した。当初計画では水路予定地及び削平される部分の遺跡面積は7,000㎡と判明した。この東部地区は昭和64年度工事分であるが、先行調査の要請があった。協議の結果、遺跡のない第２工区から工事着手することとし、調査が可能となる環境整備がなされた時点で検討することとなった。

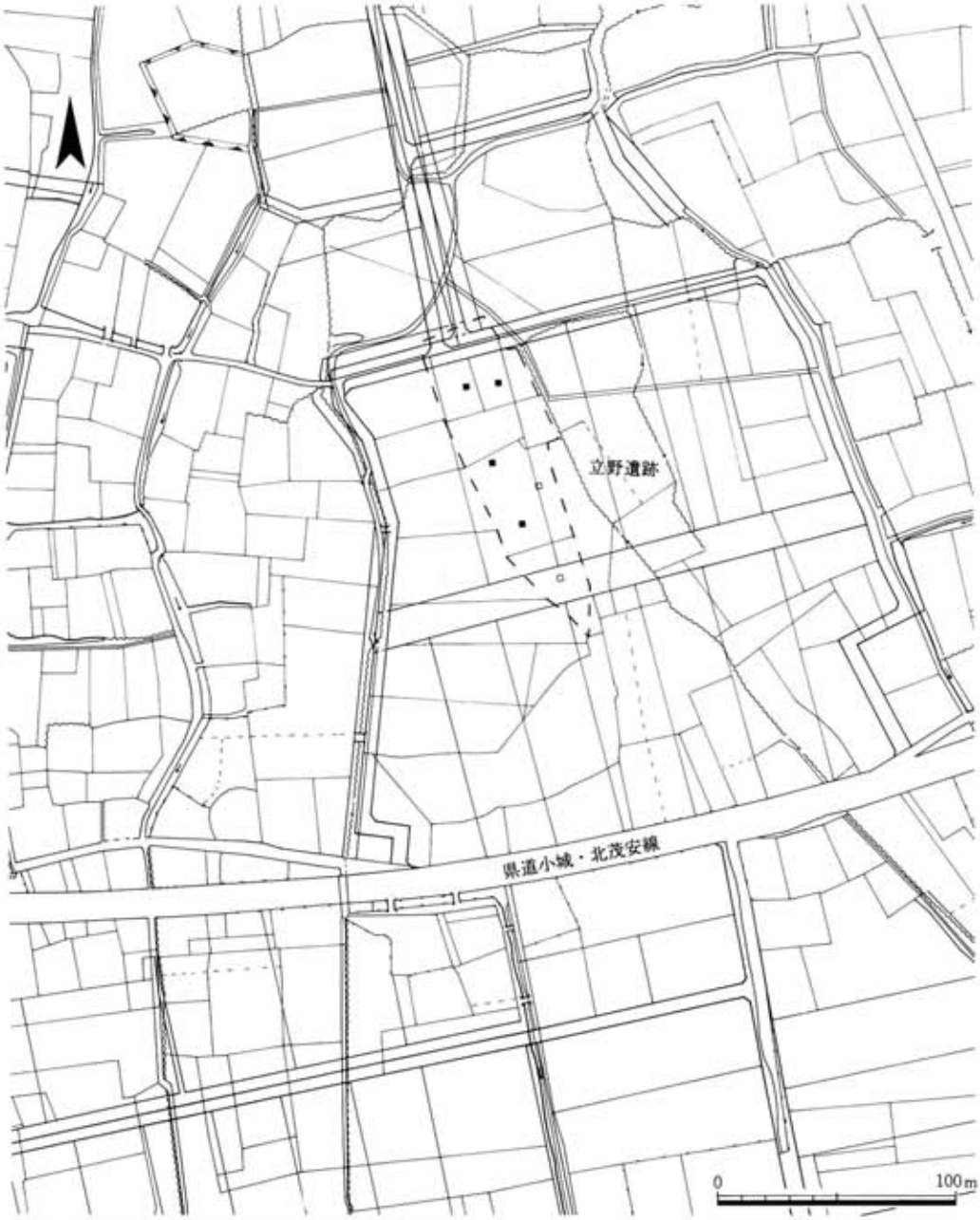


図16　佐賀市久保泉西部地区試掘溝設定図(2)

久保泉西部地区は佐賀市久保泉町大字下和泉に所在し、対象地は主要地方道小城・北茂安線から北で、県道脊振・佐賀線より西側の地域である。地区内には西に村徳永遺跡、東に立野遺跡がある。今回は第２工区の18ha について、下五番組集落の東側と西側の２地域の確認調査を実施した。その大半は水田であるが、畑地も比較的多く見られ、遺跡は工区東西の調査地とも畑地で発見された。遺構は弥生時代から平安時代に及ぶ竪穴・土壙・溝・小穴などである。個別協議の結果、当初計画の水路部と削平部分を一部設計変更して、西側（村徳永遺跡）で2,300㎡、東側（立野遺跡）で4,500㎡について調査を実施することとなった。

嘉瀬地区は佐賀市嘉瀬町大字荻野と佐賀市鍋島町大字八戸に所在し、嘉瀬川東岸側の水田地帯である。対象地はＪＲ長崎本線と国道207号線に挟まれ、東西を県道鍋島停車場線と市道北島・荻野線に囲まれた地域（127,8ha）のうち、確認調査は96ha について実施したが、土器細片が少量出土したのみで遺構は検出されなかった。

城西第二地区は佐賀市本庄町に所在し、県道東与賀・佐賀線と市道城内・中島線に挟まれた本庄・鹿子地域の水路予定地及び西方のカントリーエレベーター建設予定地に試掘溝を設定し調査したが、遺構は検出されなかった。

北川副地区は佐賀市北川副町に所在し、調査対象地は標高３ｍ程度の水田地帯である。新川対岸の諸富町では弥生時代や近世の遺跡が存在するため、当地区にもその広がりが考えられたが、水路予定地に13箇所の試掘溝を設定した調査の結果、遺跡は確認されなかった。

巨勢地区は佐賀市巨勢町に所在し、犬尾集落の西側対象地（40ha ）の大部分は標高３ｍほどの水田である。水路予定地に28箇所の試掘溝を設定し調査した。土器の細片が少数発見されたが、遺構は存在しなかった。

(2) 諸富町　（諸富第４工区・諸富第５工区・諸富第６工区　図17）

第４工区は諸富町大字為重に所在し、旧国鉄佐賀線諸富駅の南側水田地帯71ha が調査対象地である。筑後川の西岸に近く、標高も約２～３ｍと低平な沖積平野部である。工区内には蓮華文などの装飾文様がある金銅製品や馬具類が副葬された石塚古墳（１号）が所在している。水路予定部に19箇所の試掘溝を設定し調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。この地域は、表土下15～30㎝で地山と考えられる灰黄色粘質土が堆積していた。

第５工区は諸富町大字為重及び山領に所在し、試掘溝41箇所を設定、また第６工区は諸富町大字為重に所在し、試掘溝30箇所を設定したが、いずれも遺構は検出されなかった。

(3) 多久市　（多久東部地区）

多久東部地区は第１工区（中小路・両ノ原地区）と第３工区（牟田辺地区）の合計33ha が対象地である。

第１工区（中小路・両ノ原地区）は多久市南多久町大字下多久字中小路と多久市北多久町大字多久原字両ノ原に所在する。現地は標高27～37ｍの丘陵地の水田で、大正年間に耕地整理が

実施されている。削平される部分と水路予定地に試掘溝を37箇所設定した。遺構は検出されず、遺物は黒曜石やサヌカイトの剝片・近世の陶磁器片が攪乱層から出土した。

第３工区（牟田辺地区）は多久市南多久町大字下多久字牟田辺に所在する。現地は牛津川に面した標高10ｍ前後の水田、牟田辺遺跡の立地した丘陵を挟む標高11～24ｍの東・西側の水田で、確認調査は、削平される部分と水路予定地に78箇所の試掘溝を設定して実施した。牟田辺遺跡や牟田辺古墳群に隣接する地域であり、遺構が検出されるものと予測されたが、一部の試掘溝で旧石器時代の包含層と平安時代から鎌倉時代の柱穴が確認された。旧石器時代の包含層は厚さ５～10㎝でその面積は約40㎡ほどである。出土遺物に、サヌカイト製のドリルと剝片、黒曜石剝片等（旧石器時代～弥生時代）、須恵器・土師器・瓦器・石鍋・青磁・白磁（平安時代～鎌倉時代）などがあるが、上位からの流れ込みであった。

3．佐賀南部地区の調査

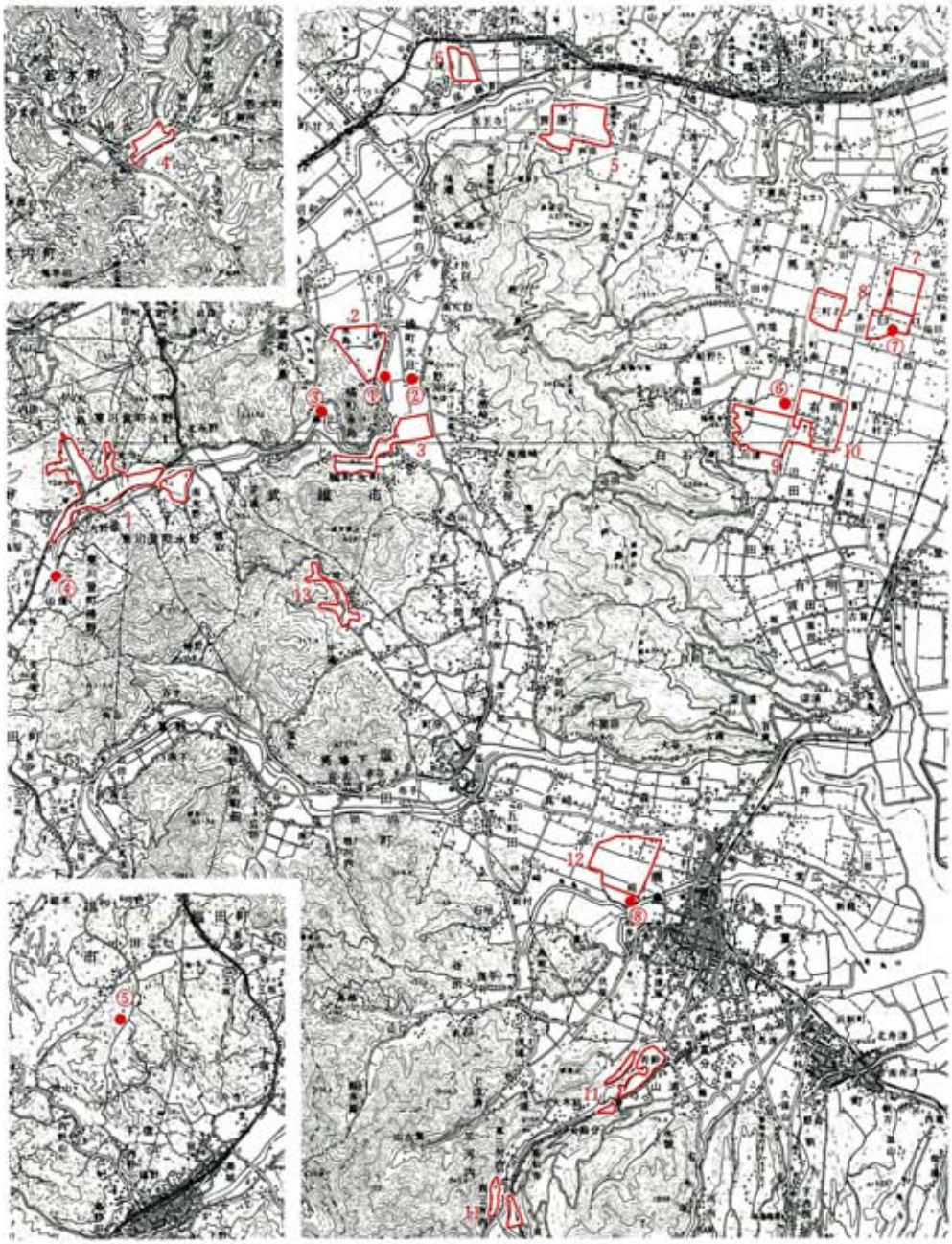


図17　佐賀南部地区周辺地形図（1：100,000）

1．武雄市（川登地区）
2．武雄市（武雄南部地区）
3．武雄市（橘地区）
4．武雄市（本部地区）
5・北方町（橋下地区）
6．北方町（大崎地区）
7．白石町（白石西第一地区）
8．白石町（白石西第二地区）
9．白石町（白石西第四地区）
10．有明町（有明第三地区）
11．鹿島市（鹿島西部地区）
12．鹿島市（中村地区）
13．塩田町（堤ノ上地区）
①みやこ遺跡
②小野原遺跡
③玉江遺跡
④吉祥寺遺跡
⑤甕屋窯跡Ａ遺跡
⑥湯崎東遺跡
⑦多田遺跡
⑧国広遺跡

(1) 武雄市（橘地区、川登地区、武雄南部地区、本部地区　図18・19）

橘地区は武雄市橘町大字大日と大字永島に所在する。大字大日地内は六角川右岸の標高６～８ｍの水田・畑地で、工事区内には小野原遺跡が、北側には隣接してみやこ遺跡がある。

調査は対象地20 haのうち水路及び削平予定部を中心に40箇所の試掘溝を設定した。その結果、１箇所でピットを検出したのみで、明確な遺構・遺物は認められなかった。

大字永島地内は六角川の左岸、潮見山の南麓部の水田・畑地である。周辺には中広形銅矛が出土した玉江遺跡がある。

調査は対象地20 haのうち水路及び削平予定部を中心に37箇所の試掘溝を設定した。その結果11箇所で遺構・遺物が検出された。中世の土師器を主体に、輸入陶磁器や一部弥生土器片もみられた。

川登地区は武雄市東川登町大字内田と大字永野に所在する。内田工区は六角川左岸、永野工区は六角川右岸と、六角川を挟んで対峙する。周辺には縄文時代の西光寺遺跡や武雄南部系の絵唐津で著名な内田皿山（小山路）窯跡がある。

調査は対象地84 haのうち水路及び削平予定部を中心に133箇所の試掘溝を設定して行った。その結果、７箇所で小さなピット状の遺構を検出したのみで、顕著な遺構は検出されなかった。遺物も数箇所で古墳時代と推測される土器片が少量出土しただけである。

武雄南部地区は武雄市橘町大字大日字大日・納手に所在する。六角川左岸の標高５ｍ前後の水田部で、地区内には納手遺跡が、対岸にはみやこ遺跡がある。

調査は第３工区（３ ha）、第４工区（30 ha）のうち水路及び削平予定部分に43箇所の試掘溝を設定した。その結果、第３工区の６箇所で遺構・遺物が検出された。中世の集落跡と考えられる。

本部地区は武雄市若木町大字川古字小路ほかに所在する。御所川によって開析された狭い谷水田で、県道北方―川古線と伊万里―多久線が交差する一帯である。工事区内には小路遺跡、宮崎遺跡等の縄文時代の遺跡がある。

調査は対象地９ haのうち水路及び削平予定地に63箇所の試掘溝を設定した。その結果、黒曜石剥片の散布は認められるものの、明確な遺構・遺物は検出されなかった。

(2) 北方町（橋下地区、大崎地区）

橋下地区は北方町大字芦原に所在する。白石平野の西端、六角川と杵島山系とに挟まれた標高約４ｍの水田地帯である。周辺には連弧文明光鏡や方格規矩四神鏡を出土した椛島山遺跡、後期古墳群が集中する勇猛山古墳群が存在する。

調査は対象地53.6 haのうち水路部分を中心に34箇所の試掘溝を設定した。その結果、１箇所で長さ１ｍ以上の板状の木材と１点の小さな弥生土器片を検出したのみで、顕著な遺構・遺物は認められなかった。

図18　武雄市橋地区第四工区試掘溝設定図

図19　武雄市武雄南部第三工区試掘溝設定図

図20　白石町白石西第二工区（多田）試掘溝設定図

大崎地区は北方町大字大崎に所在する。国道34号線と六角川に挟まれた一帯で、県道武雄多久線と34号線との三差路南側水田部分である。北側の丘陵裾部には大副遺跡や館遺跡等の弥生～古墳時代の遺跡が密集する。

対象地18.2 ha のうち水路部分を中心に13箇所の試掘溝を設定して調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

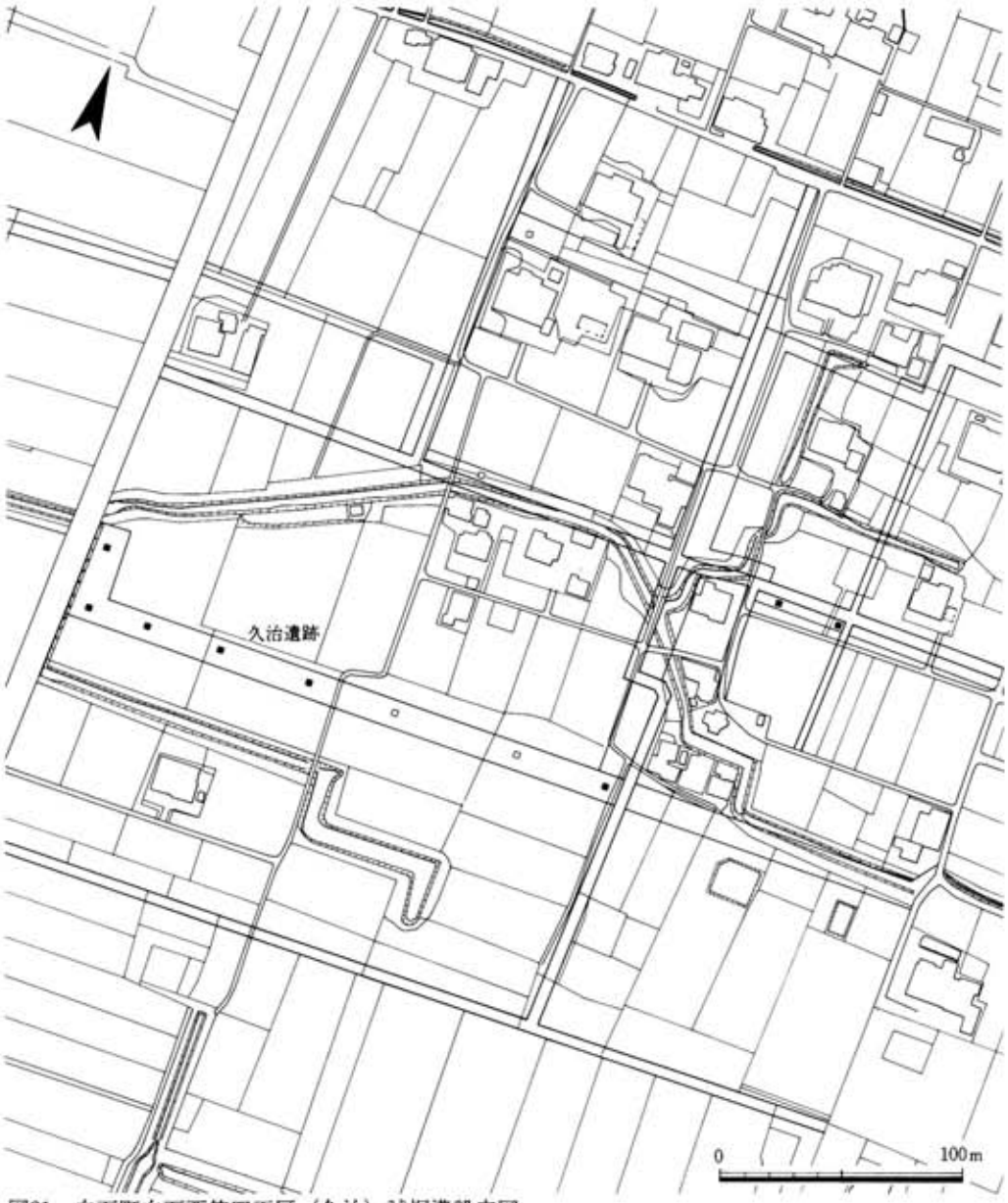


図21　白石町白石西第四工区（久治）試掘溝設定図

(3) 白石町（白石西第一・第二・第四地区　図20～22）

白石西第一地区は白石町大字堤に所在する。六角川右岸の標高２～３ｍの低平な水田部で、地区の東側約500ｍには古墳時代～中世の集落跡である多田遺跡がある。

調査は対象地20 ha のうち水路予定部に25箇所の試掘溝を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

白石西第二地区は白石町大字今泉と網代に所在する。六角川右岸の標高２～３ｍの水田部である。工事区内には先述した多田遺跡がある。

調査は対象地47.0 ha のうち水路予定部に今泉地内で13箇所、網代地内で23箇所の試掘溝を設定した。その結果、多田では遺跡一帯を中心にして11箇所の試掘溝から遺構・遺物が検出された。古墳時代～中世の大規模集落跡の存在が考えられる。なお、網代では遺構・遺物は検出されなかった。

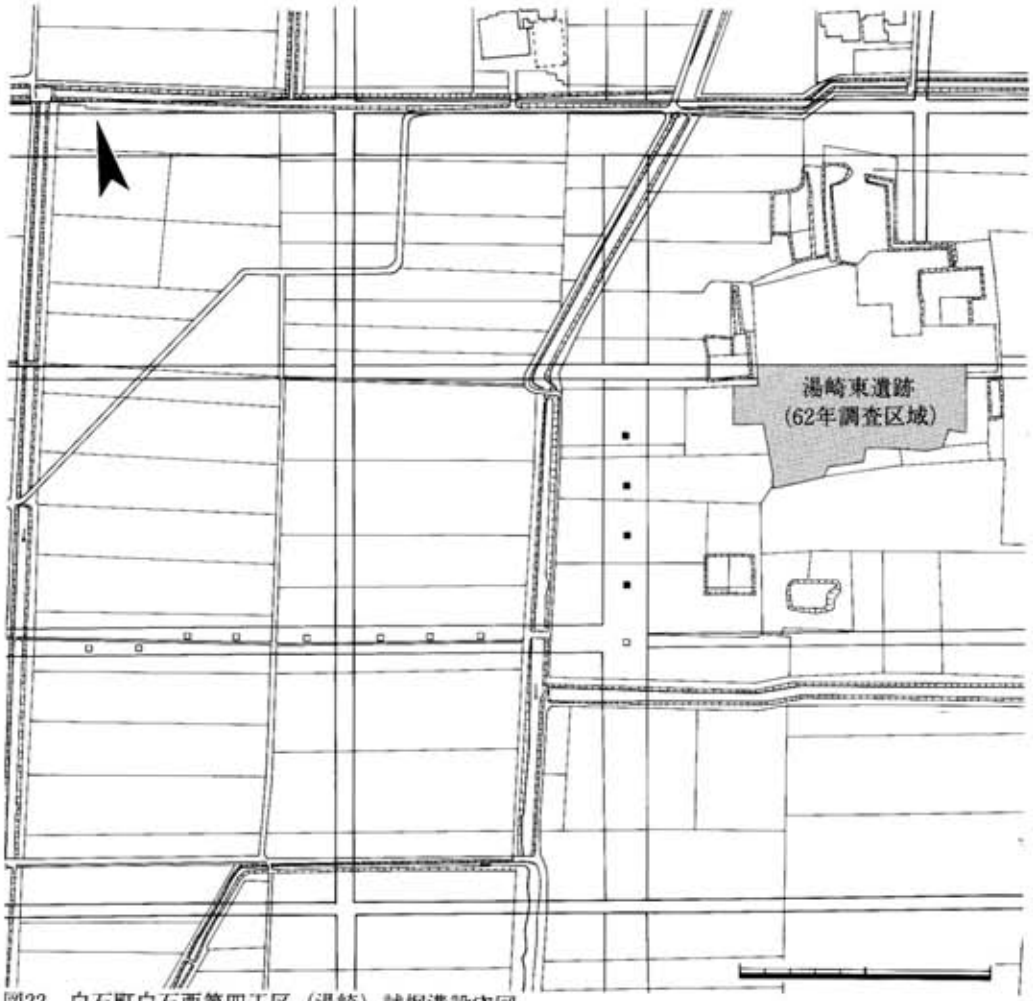


図22　白石町白石西第四工区（湯崎）試掘溝設定図

白石西第四地区は白石町大字湯崎と久治に所在する。杵島山系東麓部の標高３ｍの水田部である。湯崎地内には湯崎遺跡と湯崎東遺跡が一部含まれている。また、久治地内は弥生～古墳時代の集落跡である久治遺跡として周知されている。

白石西第四地区の対象地48.0 ha のうち水路予定部に湯崎で37箇所、久治で12箇所の試掘溝を設定した。湯崎の確認調査は８・９・11月の３回にわたって実施したが、その結果、数箇所の試掘溝で土師器・須恵器の小破片が出土したのみで、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。また、久治ではほとんどの試掘溝で歴史時代の土師器・須恵器等の遺物包含層が確認された。

(4) 有明町（有明第三地区）

有明第三地区は有明町大字迎田に所在する。白石町久治との町境一帯で、弥生時代～中世の久治二本松遺跡・久治三本松遺跡は工事区内にある。

対象地33.0 ha の水路予定部分に39箇所の試掘溝を設定して調査したが、近世の陶磁器片が２～３箇所の試掘溝で出土したのみで、明確な遺構・遺物は検出されなかった。

(5) 鹿島市（鹿島西部地区、中村地区　図23）

鹿島西部地区は鹿島市大字三河内ほかに所在する。中川の両岸一帯で、工区は上流の三河内周辺と下流の納富分周辺に分かれている。工事区内には峰遺跡や銀鋳道遺跡などがあり、とくに納富分一帯は遺跡の密集地帯として知られている。

調査は対象地27.0 ha のうち水路及び削平予定部を中心に117箇所の試掘溝を設定した。その結果、遺跡の密集している納富分一帯では顕著な遺構・遺物は検出されず、逆にこれまで未周知であった西三河内で５箇所の試掘溝から縄文時代のピット状の遺構をはじめとして、縄文土器片、黒曜石フレイク・石核などが検出されている（吹野遺跡）。

中村地区は鹿島市大字中村に所在する。鹿島川と塩田川に挟まれた標高２ｍの水田部である。地区の南に昭和62年度に発掘調査が実施された国広遺跡（本書Ｐ124）がある。

対象地46.0 ha に65箇所の試掘溝を設定して調査した結果、近世陶磁器片が数点出土したのみで明確な遺構・遺物は検出されなかった。

(6) 塩田町（堤ノ上地区）

堤ノ上地区は塩田町大字久間字堤ノ上に所在する。標高40～60ｍの傾斜面で、現在は棚田として利用されている。付近の丹生野溜池からは石斧等が採集されている。

対象地7.9 ha に23箇所の試掘溝を設定して調査を行った。その結果、遺構・遺物は全く検出されなかった。

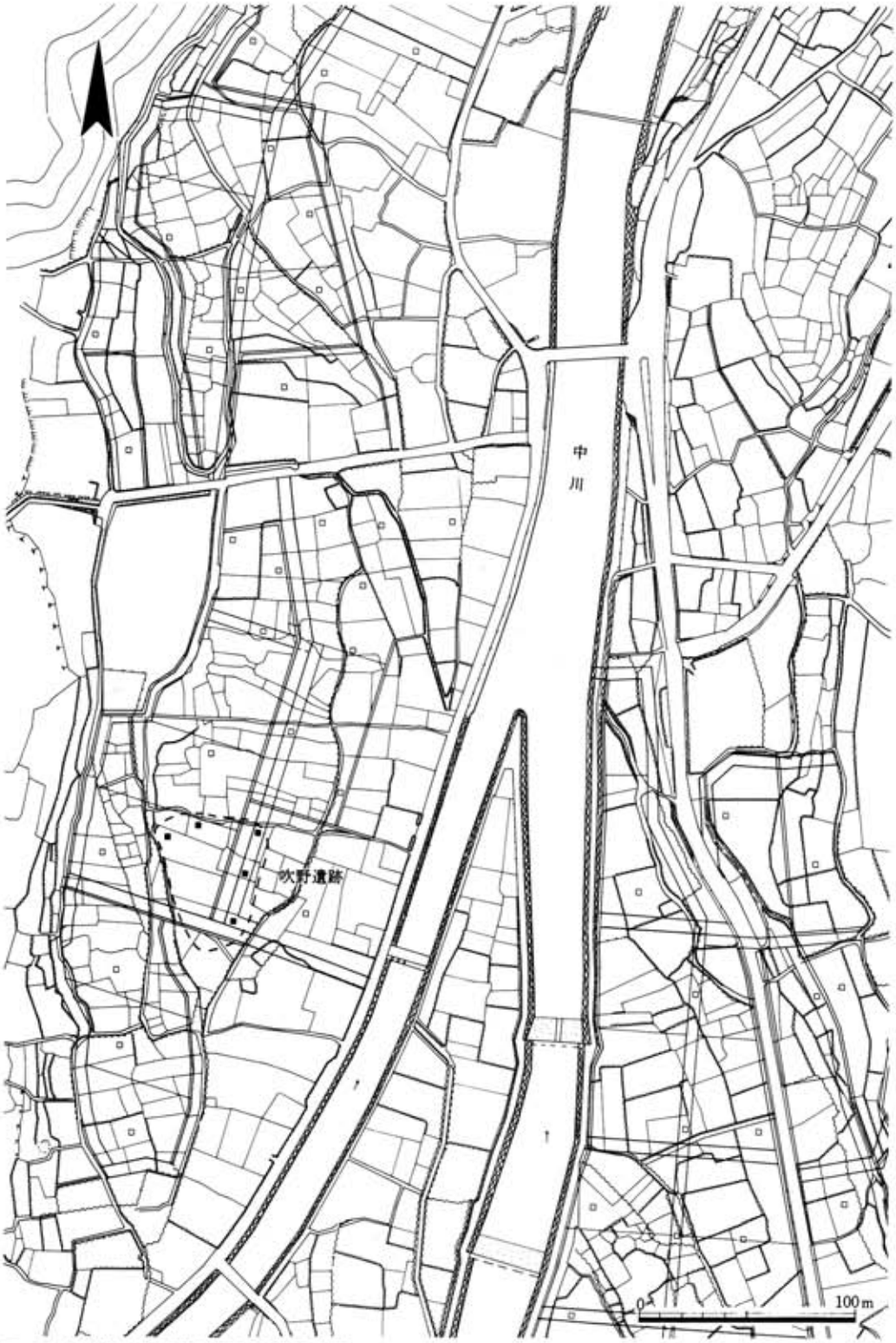


図23　鹿島市鹿島西部地区試掘溝設定図

4．佐賀北部地区の調査

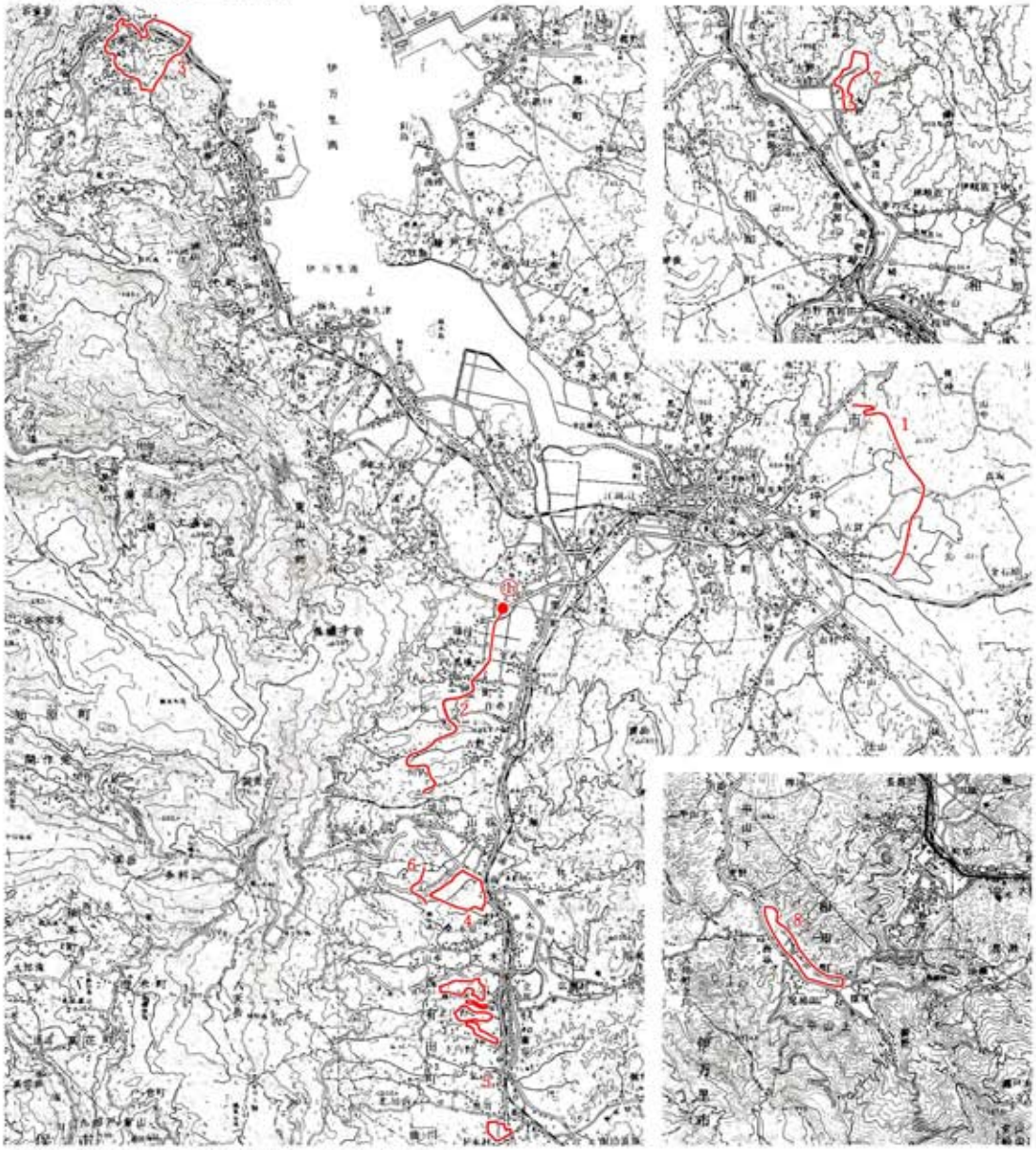


図24　佐賀北部地区周辺地形図（1：100,000）

1．伊万里市（国見山麓）
2．伊万里市（二里）
3．伊万里市（立岩）
4．西有田町（大山）
5．西有田町（曲川）
6．西有田町（切楠３期）
7．相知町（大野）
8．相知町（相知）
①西尾遺跡

(1) 伊万里市（二里地区、立岩地区、国見山麓地区　図25）

二里地区は伊万里市二里町大里及び中里の農免農道計画（5,000m）に係る確認調査である。路線は国見山と烏帽子岳から東方の有田川方向に発達した山麓部（標高20～115m）に計画され、一帯は棚田・畑・果樹園等となっている。周辺には西尾遺跡・内ノ馬場遺跡・米山遺跡が所在している。28箇所の試掘溝を設定したが、遺構は検出されず、耕作土層から黒曜石数点と磁器が数十点出土した。

図25　伊万里市立岩地区試掘溝設定図

立岩地区は伊万里市山代町立岩に所在し、臨時石炭鉱害復旧事業に係る確認調査である。調査対象地は南から北へ延びる標高約30～60ｍの丘陵上に位置し、一帯には小規模な棚田が広がっている。工事により削平される地点に27箇所の試掘溝を設定した。棚田は尾根部や緩傾斜面を開いたもので、開田時の削平度が著しい。そのなかで、立岩皮籠石のある立岩公民館の南南西、市道７号線と８号線の分岐点東側の水田において、２箇所の試掘溝で旧石器時代から縄文時代の包含層を検出した。遺物として安山岩製の横長剥片・黒曜石製の台形型剥片・縄文土器破片等が出土した。この地点は上屋敷遺跡の範囲内にあり、当該水田の区画内での遺跡の面積は約460㎡程度と推定される。この取扱いについては、後年に工事を計画する時点で再協議することとなった。

国見山麓地区は広域営農団地農道整備事業の白野～松浦線に係るもので、調査対象地は伊万里市大坪町古賀に所在し、今岳（標高221ｍ）西麓の標高70～80ｍの丘陵上に位置する。計画路線のうち縄文時代の柏別遺跡・糸屋敷遺跡の範囲にかかる２箇所に試掘溝を10箇所設定した。調査の結果、開田のためか遺跡は発見されなかった。

(2) **西有田町（大山地区、曲川地区、切楠地区）**

大山地区は西有田町大字大木及び山谷に所在する。大木地域では丘陵部に18箇所と水田部に４箇所の試掘溝を設定したが、水田の床土中から石鏃を検出した以外、遺物包含層は確認されなかった。山谷地域では26箇所設定した試掘溝のうち３箇所で少量のフレイク、チップを耕作土及び床土中から検出したのみであった。

曲川地区は西有田町大字曲川の上内野及び下本村で確認調査を実施した。上内野地域の対象地は八天岳（707.4ｍ）から東に延びる丘陵の端部付近の南側斜面一帯に位置する。地区東側の浄源寺には旧石器～縄文時代の境川（ふろづき）遺跡が所在している。９箇所の試掘溝のうち１箇所で流れ込みと見られる染付磁器片が１点発見されただけである。下本村地域の対象地は八天岳の南側支峰（612ｍ）から東へ延びる丘陵端部の東北方に位置する水田部である。周辺には北下原（上原）遺跡・北下原遺跡・前原遺跡など旧石器～縄文時代の遺跡が分布している。調査は3.7ha のうち地形から見て遺跡が立地する可能性がある地点に41箇所の試掘溝を設定した。しかし明治と昭和の２回の土地区画整理事業によるためか、１箇所で近世の陶磁器を包含する耕作土が検出された以外は、遺構等は発見されなかった。

切楠地区は西有田町大字大木及び山谷の農道計画（800ｍ）に係る調査である。遺跡が立地する可能性がある地点に３箇所の試掘溝を設定したが、遺構・遺物包含層は認められなかった。

(3) **相知町　（大野地区、相知地区）**

大野地区は、相知町大字大野に所在し、夕日山（272.9ｍ）と陣の山（303.7ｍ）の南・西山麓に囲まれた松浦川右岸側の水田地帯が確認調査対象地である。北方の丘陵上には小山遺跡・倉方遺跡・丸熊遺跡が、また東方の丘陵上には入道町遺跡・八反ケ倉遺跡が所在する。昭和62

年度実施の追加工事に係るものを加えて、水路予定部等に23箇所の試掘溝を設定した結果では、かつて当地は松浦川とそれに流入する小河川による土砂の堆積が著しく、また湿地及び深田状態にあったようである。試掘坑のひとつで検出した杭列と横木は、近世以降に耕作地の土止めをした跡と推定される。これ以外には遺構・遺物は検出されなかった。

相知地区は相知町大字平山上字尾部田で確認調査を実施した。八幡岳の北麓丘陵のひとつで尾部田集落が立地する丘陵上には縄文～弥生時代の尾部田遺跡が所在する。調査はこの丘陵端部から平山川西岸の上流側一帯の水田部等に48箇所の試掘溝を設定したが、遺構・遺物は検出されなかった。

5．佐賀上場地区の調査

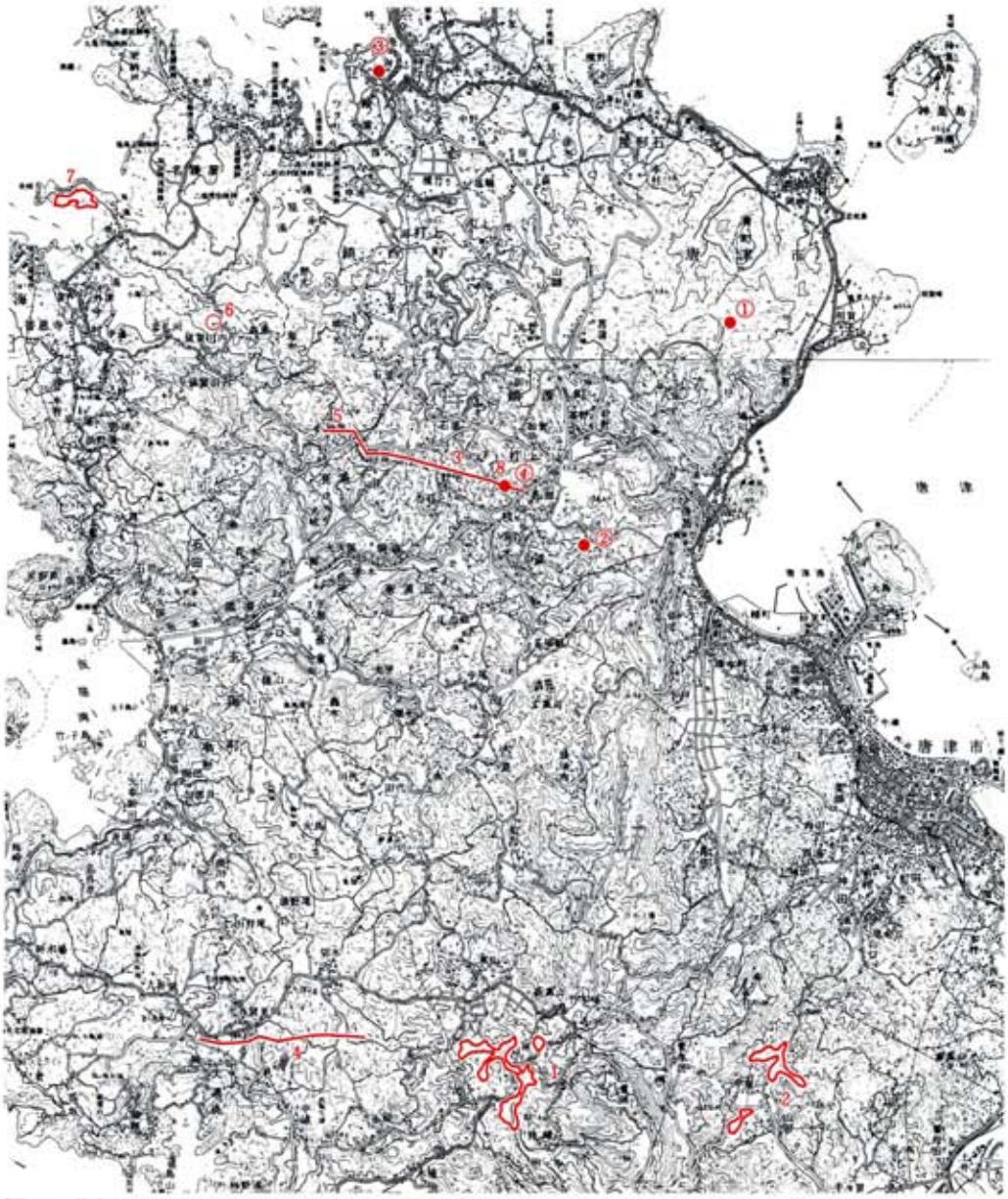


図26　佐賀上場地区周辺地形図（1：100,000）

1．唐津市（唐ノ川工区）
2．唐津市（山田Ⅱ期工区）
3．唐津市（名護屋幹線用水路）
4．肥前町（上倉幹線用水路）
5．玄海町（名護屋幹線用水路）
6．玄海町（15号ファームポンド）
7．鎮西町（串工区）
8．鎮西町（名護屋幹線用水路）

①十蓮Ⅱ遺跡
②草履作遺跡
③松尾田古墳群
④中川原西遺跡

(1) 唐津市（唐ノ川工区、山田Ⅱ期工区、名護屋幹線用水路枝去木地区）

唐ノ川工区は唐津市唐ノ川字境ほかに所在する。上場台地の南西側標高140～170mにあり、松浦川の支流田中川によって開析された盆地状低地で、現在は棚田を中心とした水田地となっている。周辺には旧石器時代の一の坂（境）遺跡、縄文時代の堀田遺跡等がある。

対象地31.2haのうち主要な水田部分に75箇所の試掘溝を設定して調査した結果、6箇所で石鏃・石槍・石核・剥片（黒曜石・安山岩他）等の多数の遺物が出土し、旧石器～縄文時代の遺跡を確認した。

山田Ⅱ期工区は唐津市山田字日ノ谷ほかに所在する。上場台地の南端、松浦川支流の山田川によって開析された標高30～70mの枝状谷の最奥部で、狭小な棚田状の水田である。山田川の下流、千々賀地区には千々賀遺跡・千田島遺跡等の弥生時代の遺跡が分布する。

対象地10haのうち削平予定部を中心に20箇所の試掘溝を設定して調査したが、表土層から近世以降の陶磁器片が出土した以外は、遺構・遺物は検出されなかった。

名護屋幹線用水路（国営上場農業水利事業）枝去木地区は唐津市枝去木―野中を結ぶ用水路で、鎮西町・玄海町との境に沿って走る。後述する鎮西町加倉・玄海町小加倉地区の確認調査も同事業に起因するものである。枝去木周辺には枝去木分校入口遺跡・野中遺跡等の旧石器～縄文時代の遺跡が密集する。

用水路約1.2km及びファームポンド予定地約2,600㎡に20箇所の試掘溝を設定して調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。なお、隣接する鎮西町では加倉地区で中川原西遺跡が確認されている。

(2) 肥前町（上倉幹線用水路切木、万賀里川地区）

上倉幹線用水路（国営上場農業水利事業）切木、万賀里川地区は、国道204号線に沿いながら、その南側丘陵を東西方向に走る用水路である。周辺には生石遺跡・松本溜Ⅰ遺跡等の旧石器～縄文時代の遺跡が多く散分する。

今年度は唐津と肥前町との境の赤坂ダム付近から、肥前町役場切木出張所付近までの約2km の確認調査を実施した。削平予定部分を中心にして17箇所の試掘溝を設定したが、地形的に比較的急峻な部分が多かったため、遺構・遺物は検出されなかった。

(3) 玄海町（名護屋幹線用水路小加倉地区、同15号ファームポンド　図27）

名護屋幹線用水路（国営上場農業水利事業）小加倉地区は玄海・唐津・鎮西の境一帯で、玄海町有浦下小加倉に所在する。周辺には小加倉遺跡、牟田遺跡等の旧石器～縄文時代の遺跡が多い。

小加倉集落の北側、総延長700mの水路予定地内に13箇所の試掘溝を設定した。その結果、表面採集で石斧、黒曜石製石鏃等がみられるものの、試掘溝内からは遺構・遺物は検出されなかった。

図27　陣跡位置図（1：25，000）

1．串工区新発見陣跡（鎮西町）　　2．木下利房陣跡（玄海町15号ファームポンド）

15号ファームポンドは名護屋幹線用水路の末端に構築されるもので、玄海町値賀川内頓ノ山に所在する。標高137ｍの丘陵南麓部の建設予定地は史跡木下利房陣跡に隣接することから、その取り扱いについて数度の協議が重ねられた。結局、建設予定地を変更しても変更地にも陣跡が存在することから、ファームポンドを可能な限り指定地境から遠ざける、ファームポンド完成後の環境整備を植栽等を中心にして遺跡の環境を損わないものとする等の条件のもとに、当初の計画を修正する形で建設が実施されることとなった。

確認調査は建設予定地約7,000㎡について実施した。その結果、陣跡の関連と考えられる石墨の残存が部分的に認められた。石墨は、基底幅で３ｍ以上、２段に築かれている箇所もあった。

平成元年４月から玄海町教育委員会が発掘調査の予定である。

(4)　鎮西町（串工区、名護屋幹線用水路加倉地区　図27）

串工区は鎮西町大字串字串崎ほかに所在する。上場台地から玄海灘に突き出た細長い半島状

の緩やかな低丘陵である。工事予定地は縄文時代の遺跡である串崎A・C遺跡と一部重複し、周辺には小野木重次陣跡などの肥前名護屋城跡関連の遺跡も数多い。

対象地18.0haのうち串崎A・C遺跡を中心に48箇所の試掘溝を設定して調査した。その結果、2箇所の試掘溝で耕作土中から黒曜石剝片・砕片が出土したのみで、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

なお、昭和62年2月の串地区の現地踏査の際、串の集落から串浦漁港への降り口西側の丘陵上に従来知られていない陣跡を発見した。陣跡の石垣や土塁の遺存は極めて良好で、帯曲輪をめぐらした主郭、その東側に続く第2郭と堂々とした構造を有す。また、主郭には2箇所に石垣で築かれた虎口も設けられている。農林部局、地元住民との協議の結果、この陣跡は地域除外とし保存されることとなった。

名護屋幹線用水路（国営上場農業水利事業）加倉地区は、先述した唐津市枝去木、玄海町小加倉と連続する工事区で鎮西町加倉字中川原に所在する。周辺には中川原遺跡、前田Ⅱ遺跡等の旧石器・縄文時代の遺跡が密集する。

水路及び工事用水路部分に4箇所の試掘溝を設定して調査した結果、1箇所の試掘溝で遺構と遺物が検出された。工事が62年度実施であったため、10月から鎮西町教育委員会により本調査を行った。その内容については「Ⅴ．昭和62年度発掘調査の概要　37中川原西遺跡」で報告がなされている。

6．筑後川下流用水事業に係る調査

水資源開発公団（筑後川下流用水建設所）による筑後川下流用水事業（右岸域）に係る文化財確認調査は、佐賀東部導水路の三養基郡北茂安東部工区、大詫間幹線水路の神埼郡神埼町横武工区、同郡千代田町下西工区について実施した。

(1) 佐賀東部導水路

北茂安東部工区は北茂安町大字白壁に所在する。筑後川の支流である古川と道瀬川に挟まれた標高約５ｍの水田部である。周辺には中世の遺物散布地である白壁五本松遺跡、座主野遺跡が存在する。

調査は延長1,350ｍ、幅10ｍの水路予定地に24箇所の試掘溝を設定して行った。その結果、筑後川の氾濫に因ると思われる厚い砂の堆積があり、遺構・遺物は検出されなかった。

(2) 大詫間幹線水路

横武工区は神埼町大字横武に所在する。城原川と中地江川に挟まれた標高約４ｍの水田部である。横武地区周辺は中世のいわゆる「環濠集落跡」が点在しており、調査区の南方にも横式城跡が存在する。

調査は延長500ｍ、幅４ｍの水路予定地に10箇所の試掘溝を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

下西工区は千代田町大字下西に所在する。中地江川右岸域の標高約３ｍの水田部である。調査区の西方には弥生時代集落跡の貴別当神社遺跡が、地区東南方の佐賀市との市町境には中世集落跡の余江西二本松遺跡が存在する。

調査は延長650ｍ、幅35ｍの水路予定地に15箇所の試掘溝を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

Ⅳ．埋没地割り確認調査

1．調査の概要

昭和61年に引続き埋没した地割りの確認調査を実施した。本年度の調査は、当該年度県営ほ場整備事業の対象地区となっている杵島郡白石町の白石西第一・第二地区の２地区を対象に実施した。

その結果、白石西第一地区で現況の地割りと傾きを同じくする小溝跡等、白石西第二地区では、現在白石平野全般に行われている地割りに斜行する道路下より旧道跡と思われる地割り等が検出された。

2．調査の内容

(1) 白石西第一地区

白石西第一地区は、白石町大字堤に所在する（図28)。三町北集落西半部を中心にした東西約300ｍ、南北約500ｍの地区で、標高は約2.3ｍ～2.7ｍである。地区東側には古墳時代～平安時代の集落跡である多田遺跡が存在する。また地区北側は、岡崎方面から走ってきた夫婦(めおと)堀が分流する地点にあたる。

図28　白石西第一地区位置図
（１：50,000）

事前の聞き取り調査によると、本地区内及び周辺で、「14の坪」、「15の坪」、「25の坪」、「さんじん坪（30坪)」、「35の坪」、「36の坪」、「１の角」、「２の角」、「３の角」、「４の角」、「５の角」、「７の角」、「９の角」、「11の角」等の地名が採集できた。これらの遺称より坪並を復元すると、本年度対象となった地区の東辺より西に１町の部分を南北に走る線、及び北辺より南に一町弱の部分を東西に走る線が里境に想定され、またこのうち南北に走る線は、「～坪」呼称地区と「～角」呼称地区の境となっていることが判る。この復元坪並は、日野氏の発表[註1]や『白石町史』等の記述とも合致する。

調査は、地区中央北寄りに東西181.2ｍの試掘溝（Ａトレンチ)、地区南側に東西80ｍ（Ｂトレンチ）と183.8ｍ（Ｃトレンチ）及び南北に103.5ｍ（Ｄトレンチ）の試掘溝を設けて実施した（図29)。

本地区の基本土層は、厚さ約20㎝の耕作土（暗褐色粘質土）下に明灰色粘質土の層が見られた。また、一部の地区でこの両層間に腐臭を放つ暗青灰色粘質土が見られたが、これは堀（いわゆるクリーク）から上げられた土で作られた基盤土と考えられる。明灰色粘質土の下部は地表下約0.8ｍで暗青灰色粘質土、地表下約1.1ｍで青灰色粘質土となっていた。

調査の結果、地区北側に設けたＡトレンチでは、試掘溝西端より45～65ｍ付近で深い落ち込

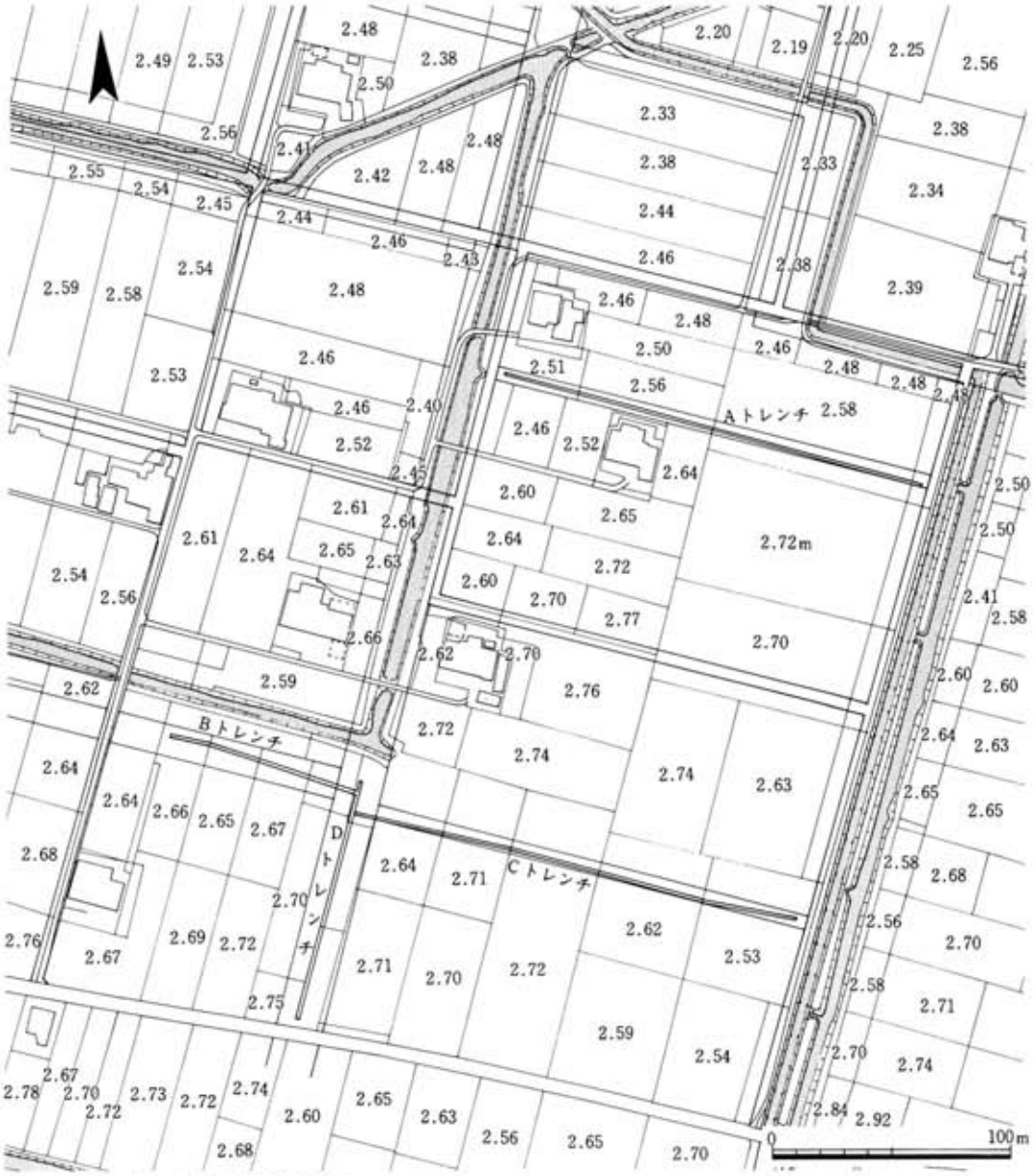


図29　白石西第一地区試掘溝設定図

み、118m付近で南北小溝跡が検出された。前者は裏堀跡と考えられる。[註2] 後者（図30）は幅1.2m、深さ0.3mの南北溝跡で、遺物は出土しなかった。周辺の現況地割りと傾きが同じことから、現在の水田が以前はこの地点に畦畔を持っていたと考えられる。

南の地区では、B、C、Dトレンチの境付近に不規則な落ち込みが検出されたが、聞き取りにより、昭和時代に掘り下げられ再び埋められた溝の跡であることが判明した。

(2)　白石西第二地区

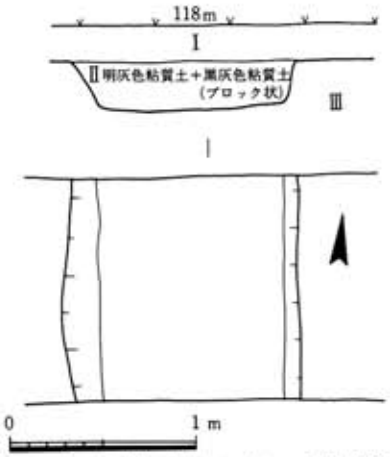


図30　白石西第一地区Ａトレンチ検出溝跡
（１：40）

図31　白石西第二地区位置図
（１：50,000）

白石西第二地区は、白石町大字今泉に所在する（図31）。県道福富―武雄線に南接する東西250ｍ～350ｍ、南北650ｍの地区で標高2.0～2.3ｍである。本地区南部は弥生時代～中世の遺物散布地である多田遺跡、地区北側は古代～中世の遺物散布地である今泉遺跡として知られている。

本地区付近の小字については、「中の角」という小字が残っていることから「～角」呼称地区に当たることが推定されるが、具体的な数詞を持つ小字は採集できなかった。

日野氏の条里坪並の復原によると[註1]、本地区の北辺、南辺、東辺がそれぞれ里境となっている。

調査は、地区北側にＬ字状に、84.4ｍの南北試掘溝（Ａトレンチ）、214.4ｍの東西試掘溝（Ｂトレンチ）を、また地区南側に287.6ｍの東西試掘溝（Ｃトレンチ）および遺構が検出された地区に３本の補助試掘溝（Ｃ－Ａ、Ｂ、Ｃトレンチ）を設けて行った（図32）。

本地区の基本土層は、約12～20㎝の耕作土（灰褐色粘質土）下に黄灰色粘質土の層が見られ、検出された遺構はこの層に掘り込まれていた。

調査の結果、北側の地区に設けたＡトレンチから東西方向の小溝跡、Ｂトレンチから土壙、小穴、南北溝跡が検出された（図33）。

Ａトレンチの小溝跡は、幅0.5～0.8ｍ、深さ0.3～0.5ｍで、埋土は暗灰色粘質土、遺物は検出されなかった。

Ｂトレンチの土壙は、検出部分で長さ2.4ｍの方形を呈するもので、深さ約0.6ｍ。埋土は暗灰色粘質土と黄灰色粘質土が混じった土である。埋土より、土師器壺・甕片が出土した。土師器壺（図34－１）は、偏球形の体部にやや内湾しながら外傾する長い口頸部を持つもので、外面はヨコナデないしナデ調整を行い、一部にハケ調整痕が残る。内部は口頸部ヨコナデ、頸部にハケ調整痕、体部上半は指頭圧調整、下半はヘラケズリである。頸部径6.2㎝、体部最大径13.7㎝。甕口縁（図34－２）は頸部の内外面に稜を持って屈曲するもので、口唇部に面を持つ。口唇端はやや上部につまみ上げる。外面は、胴部ハケ調整、口頸部ヨコナデ、内面は、胴部ヘラケズリ、口頸部ハケ調整である。小穴は径0.8ｍ、深さ0.2ｍで埋土は暗灰色粘質土と黄灰色粘質土の混じった土、遺物は出土しなかった。溝跡は幅1.1ｍ、深さ0.2ｍで、埋土は前者とほ

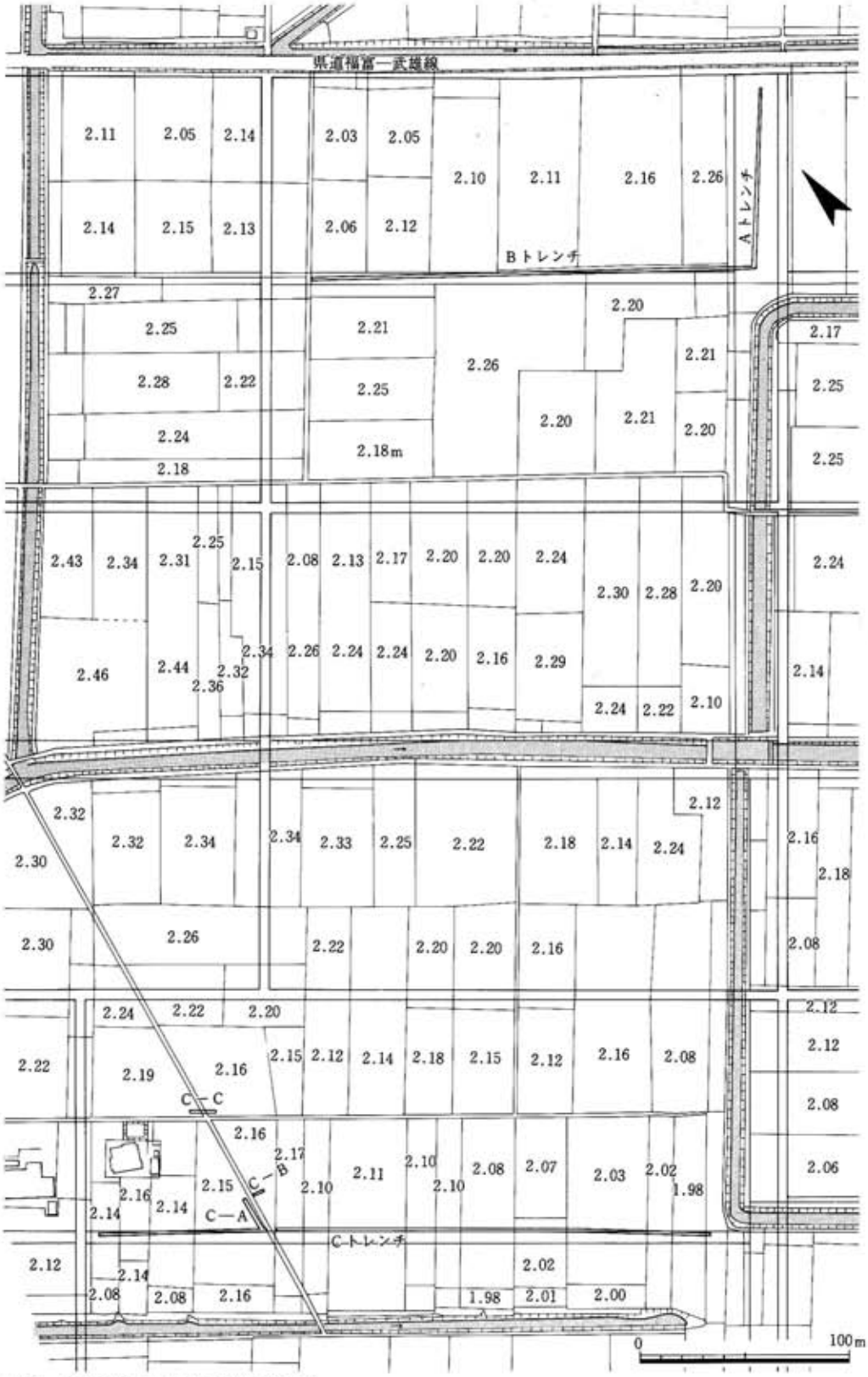


図32　白石西第二地区試掘溝設定図

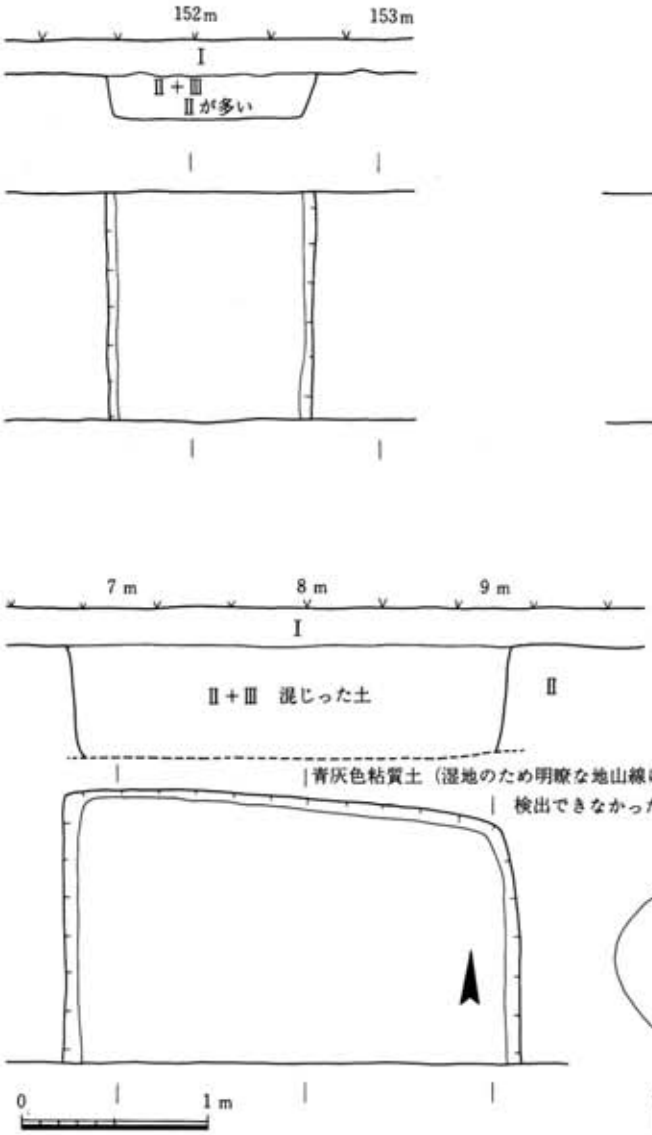


図33　白石西第二地区Ａ・Ｂトレンチ遺構実測図

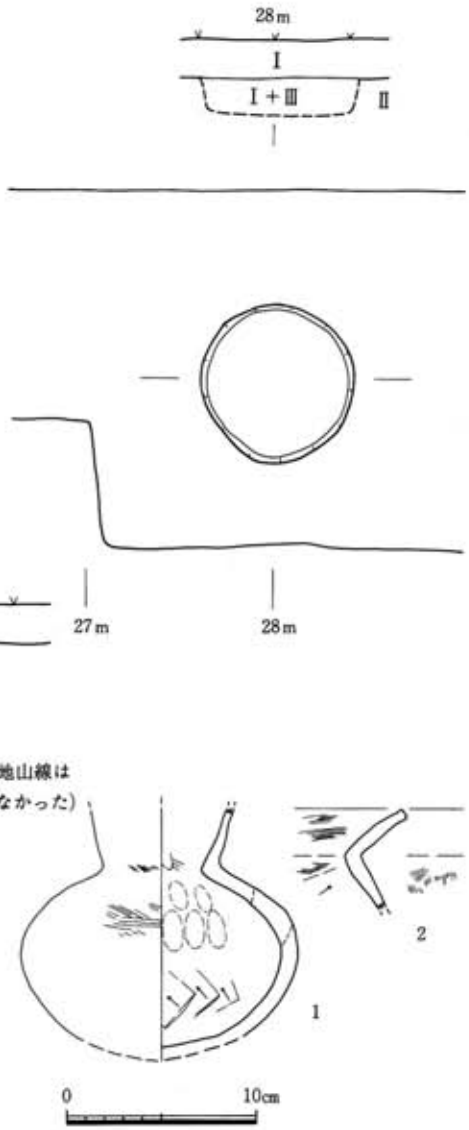


図34　Ｂトレンチ土壙出土土器実測図

ぼ同じであるが黄灰色粘質土の割合が多い。遺物は、出土しなかった。

南側の地区では、現在の農道下より道路に付随する側溝と思われる遺構が検出された(図35)。

溝跡（図36）は幅0.8～1.1m、深さ0.4～0.6mの２本が平行して走り、この東西両溝跡ともに調査地区内で１ケ所ずつとぎれている。Ｃ－ＡトレンチとＣ－Ｂトレンチの状況から、この切れ目は互い違いになっている可能性が強い。この両溝跡から推定される道路幅は4.8mである。埋土は暗灰色粘質土で、埋土中より磁器（染め付け）片、土師器片、瓦器片が出土したが、すべて小片のみで実測に耐えない。

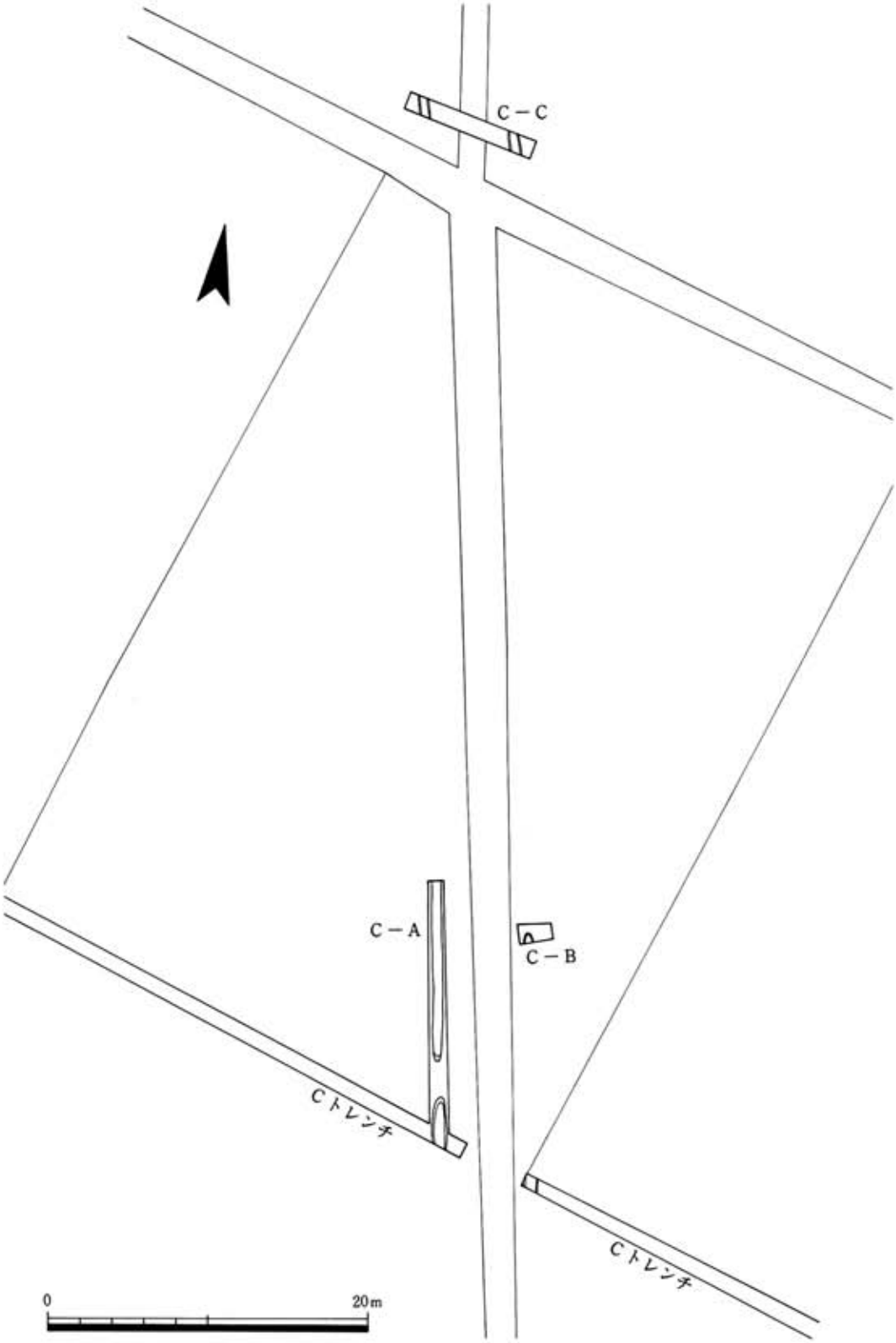


図35　白石西第二地区Cトレンチ遺構配置図

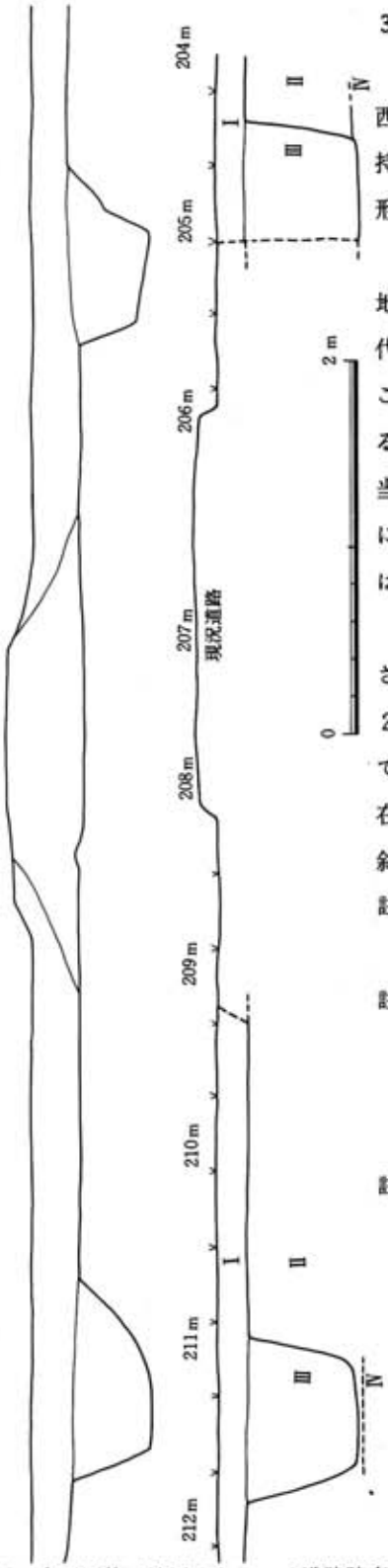


図36　白石西第二地区Ｃトレンチ道路跡実測図

3．小　結

白石西第一地区Ａトレンチで検出された小溝跡、及び白石西第二地区Ａ・Ｂトレンチで検出された溝跡は、現況畦畔の持つ傾きと同方向を呈することから、現在の水田地割りの古形態を示すものと考えられる。

Ｂトレンチで検出された土壙より出土した土器から、当該地が集落跡というまとまった遺跡ではないにしても、古墳時代前期には人間の生活が営める状態にあったことが判明したことは重要な成果であった。『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書６』で検討した白石平野の微地形図[註3]では、当該地は多田遺跡が立地する微丘陵と微谷部をはさんで北側に存在する微丘陵部の縁辺にあたり、遺跡の立地条件としては必ずしも最悪ではない。

白石西第二地区のＣトレンチ及びその補助トレンチで検出された道路の側溝と考えられる溝跡は、現況の道路（幅約２ｍ）が、近世期以前には幅4.8ｍを有し、側溝を持つものであったことを示していると考えられる。この道路跡は、現在白石平野に行われている地割りに斜行するもので、今後の斜行地割りに関する資料の蓄積を待ちたい。

註１　日野尚志「変形・変則条里について―佐賀平野の場合―」『条里制の諸問題Ⅱ』奈良国立文化財研究所　1983

註２　地元の人の話によると、以前白石平野では、家を建てるとき敷地の裏に当たる部分の土地を掘り下げて家の基盤を造り、家を解く（解体する）時不用物とともにこの裏堀を埋めたと言う。現在（圃場整備前）も、この裏堀を持つ家がいくらか見られた。

註３　『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書６』佐賀県教育委員会　1988

Ⅴ．昭和62年度発掘調査の概要

1．江口二本松遺跡（略号：ＥＧＮ）

遺跡の所在地

三養基郡北茂安町大字江口字二本松

調査主体者

北茂安町教育委員会

調査期間

昭和62年７月～９月

調査面積

1,300㎡

図37　江口二本松遺跡周辺地形図（１：25,000）

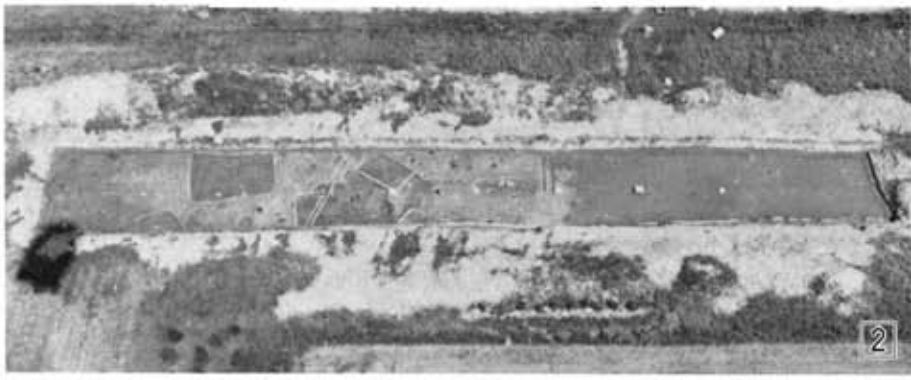
遺跡の概要

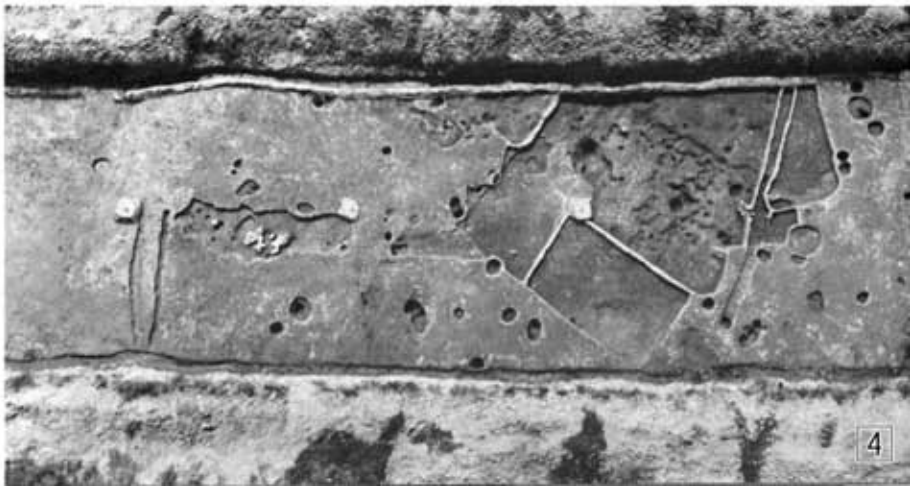
江口二本松遺跡は、筑後川水系通瀬川の左岸に位置する標高４ｍ程度の低平地で、現江口集落の東側に広がる遺跡である。周囲には、西側1,300ｍに、61年度調査された江口四本松遺跡、中津隈四本松遺跡があるが、比較的遺跡の密度は薄い地域である。調査区は、幹線用排水路予定地と小排水路予定地の２ケ所について行い、前者をⅠ区、後者をⅡ区として行った。

Ⅰ区は、弥生時代後期の土壙３基、近世の土壙１基、その他小穴少数が検出された。全体的に遺構の密度は薄く、継続的な生活が営まれたとは考えにくい。出土遺物は、弥生時代中期～後期の土器を中心に、甕、器台等が出土した。

Ⅱ区は、現西大島集落の西側に位置しⅠ区同様本来は、微高地に集落が形成されていたと思われるが、現在は、比高差の殆どない平坦地である。調査によって、古墳時代前期～中期にかけての住居跡５軒、土壙６基、その他小穴多数が検出された。遺構は、調査区西側に偏っており、集落の東限であると考えられる。住居跡５軒は、調査幅員６ｍという制限により完掘できなかったが、いずれも平面方形であろう。ＳＨ01は柱穴３つが確認され、4.9×4.5＋αｍ程度で、遺物の残りも比較的よく、甕口縁部、底部、甕１個体分等が出土した。ＳＨ04は、5.1×5.0＋αｍ程度で柱穴を２つ確認した。他の住居跡は、半分以上が調査区外のため計測できなかった。遺物は、土師器、須恵器を中心に、甕、壺、高杯などが出土した。また、土製勾玉も２個出土した。

以上のように、江口二本松遺跡は、平野部に営まれた、弥生～古墳時代を中心とした集落跡である。しかし、調査範囲も水路予定地であり狭く、遺跡の全体規模、性格等を正確に理解し得たとはいい難く、今後の調査等の資料によって、検討を重ねていきたい。





1．江口二本松遺跡
　Ⅰ区全景（南から）
2．Ⅱ区全景（南から）
3．Ⅱ区ＳＨ01、ＳＨ02
　ＳＨ03（南から）
4．Ⅱ区ＳＨ04、ＳＨ05
　（南から）

2．船石遺跡（略号：ＦＮＩ）

遺跡の所在地

三養基郡上峰村大字堤字一本谷

調査主体者

上峰村教育委員会

調査期間

昭和62年７月～12月

調査面積

4,200㎡

図39　船石遺跡周辺地形図（１：25,000）

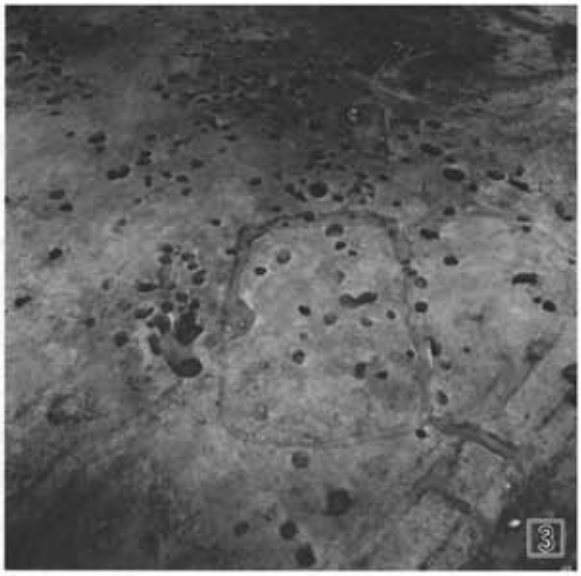
遺跡の概要

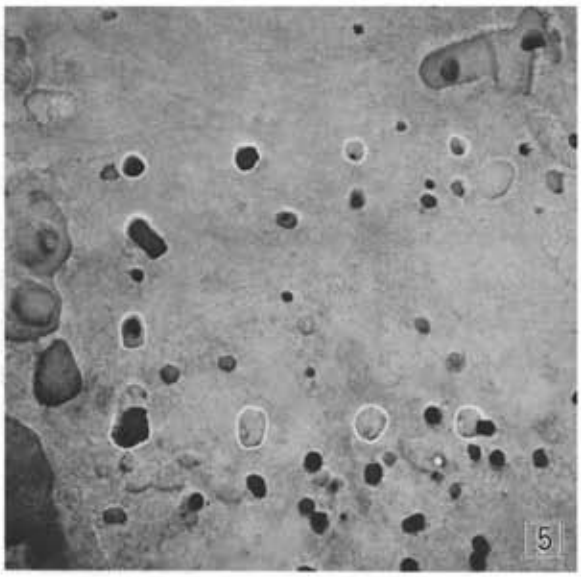
船石遺跡は、上峰村中央部、切通川東岸に位置し、南北に延びる舌状段丘の先端付近一帯（標高14ｍ～25ｍ）に広がりをもつ、弥生時代を中心とした縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。本遺跡周辺には、西方の切通川対岸二塚山丘陵上に二塚山遺跡、五本谷遺跡、切通遺跡、一本谷遺跡などが所在し、また東南方には多数の甕棺墓・土器棺墓その他の墳墓をもつ船石南遺跡が隣接しており、弥生時代の遺跡が濃密に分布している。調査は、面的工事で切土される部分3,600㎡（Ⅵ区）と水路工事で掘削される部分600㎡（Ⅶ区）について実施した。

Ⅵ区の調査では、弥生時代中期の竪穴式住居跡10軒・土壙群、奈良時代以降の掘立柱建物跡２棟・土壙群・溝跡３条（内２条は区画溝）などが検出された。弥生時代の竪穴式住居跡群は調査区域西部に集中して検出され、平面形態は隅丸方形を基調としており、棟方向を北東にとる一群とこれに直交する一群とからなっている。調査区東部では住居跡が検出されなかったことから、Ⅵ区の西部が弥生時代中期の居住区の東限であることが推定される。一方、奈良時代以降の遺構については、掘立柱建物跡、平面形態方形の土壙はいずれも北東あるいは北北東の軸をとっているが、これに対し、区画溝と考えられる溝跡は２条がほぼ東西あるいは南北方向となっており、時間差が予想される。出土遺物は、弥生式土器片・石器類、土師器片、須恵器片、船載青磁片などである。特に、調査区南限のすり鉢状の土壙より出土した「肥人」の箆描き文字をもつ奈良時代後半の須恵器坏は、当時この地を識字階級者が占有していたことを物語るものとして注目される。

Ⅶ区の調査では、縄文時代後期の土壙２基？、弥生時代中期の円形竪穴式住居跡１軒・土壙３基などが検出された。出土遺物は、土壙内より一括して出土した縄文式土器片・打製石斧他石器類、弥生式土器片・石器類などである。

船石遺跡は、前述のように弥生時代中期を主体とした大集落址であるが、隣接する船石南遺跡とともに、弥生時代中期のこの地における集落と墓域のあり方を解明するための貴重な資料ということができよう。





1．船石遺跡Ⅵ区全景（北から）
2．Ⅵ区全景（直上から）
3．Ⅵ区ＳＨ609（北東から）
4．Ⅵ区ＳＨ606（南東から）
5．Ⅵ区ＳＢ602（直上から）
6．Ⅵ区ＳＤ610（東から）

3．船石南遺跡（略号：ＦＩＭ）

遺跡の所在地

三養基郡上峰村大字堤字一本谷

調査主体者

上峰村教育委員会

調査期間

昭和62年４月～９月

調査面積

300㎡

図41　船石南遺跡周辺地形図（１：25,000）

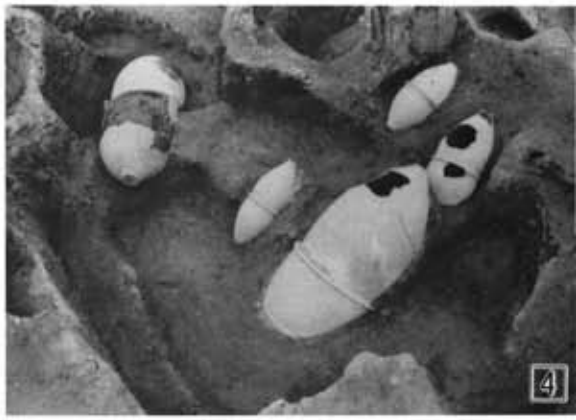
遺跡の概要

船石南遺跡は、弥生時代前期末葉から後期にかけて営まれた甕棺墓・土器棺墓主体の墳墓群であり、上峰村中央部、切通川東岸の南北に延びる舌状段丘先端東南部一画に位置している。墓域は、同段丘上に存在する弥生時代中期を中心とした船石遺跡の東南方に隣接した標高16ｍ前後の水田、畑地下および東方の船石工業団地内に広がっている。

今回の調査は、昭和60年度調査地区に東接した区域で工事により削平を受ける部分300㎡について実施した。その結果、弥生時代前期末葉から後期にかけての甕棺墓・土器棺墓121基、土壙墓１基、石棺墓１基、性格不明の集石遺構２基、その他土壙、ピットなどが検出された。特に、多数の甕棺墓・土器棺墓は、各々が複雑に重複した状態で検出されたが、時期的には中期に営まれたものが大半を占めている。また、全体としては、前期末葉のものは少数ではあるが東西方向に、中期前半のものは南北方向に埋置されるという傾向が看取される。

主な出土遺物としては、中期前半代の104号甕棺内より細形銅矛１本（切先部分約10㎝のみ遺存）が出土している。この他、墓壙覆土中より弥生式土器片、石包丁片１点、鉄製品片１点（鉄斧の一部？）などが出土している。

今回の調査で検出された墳墓は、甕棺墓・土器棺墓をはじめ120余基であった。これに昭和60年度調査で検出されたもの（597基）、さらに船石工業団地敷地内や工事による削平を免れたもので水田下にその存在が確認されているものなどを加えると、この一帯には膨大な数の墳墓が存在あるいは存在していたことになる。当時の墓地としては規模、密度ともに最大級のものが営まれていたことが推測される。また、これらの墓地を営んだ集団としては、隣接する船石遺跡の集団を想定することが妥当であり、「生産の場」が未調査ではあるが、「生活の場」、「埋葬の場」を調査できた船石・船石南の両遺跡は、当時の「ムラ」の復元には第一級の資料といえる。また、本遺跡と時期を同じくして営まれたと考えられる船石遺跡Ｉ区（船石天神宮境内内、昭和57年度調査）の支石墓・甕棺墓などとの関係、時期的にはやや下るものの一部並行する二塚山遺跡群との関係などの究明も今後の大きな課題である。



1．船石南遺跡
　ＳＪ104　棺底より銅矛出土
2．１号石棺墓　ＳＪ037(中)　ＳＪ036(右)
　（南から）１号石棺墓がＳＪ037を切る
3．ＳＪ017（成人棺）（南から）
　同一墓壙内に２個の小児棺をともなう
4．ＳＪ071（中・成人棺）ＳＪ072～074
（小児棺）ＳＪ075（左上成人棺）（西から）
　ＳＪ075（前期末）は東西軸
　ＳＪ071～074（中期）は南北軸をとる
5．１号集石遺構（東から）
6．作業風景（北から）

4．石動三本松遺跡（略号：ＩＳＢ）

遺跡の所在地

神埼郡東脊振村大字石動字三本松

調査主体者

東脊振村教育委員会

調査期間

昭和62年９月～11月

調査面積

1,400㎡

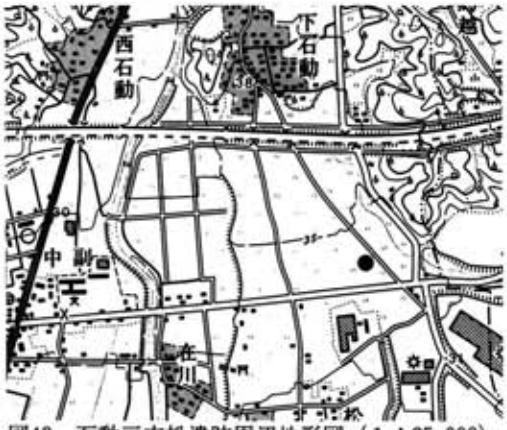
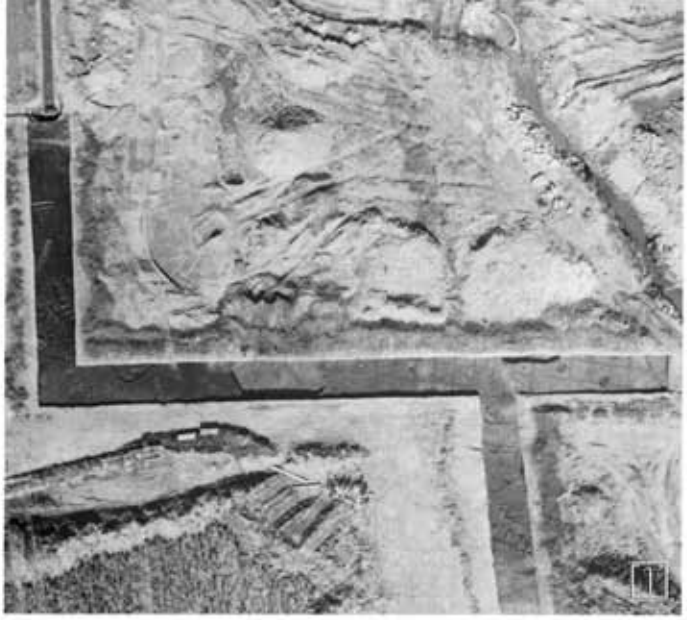


図43　石動三本松遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

石動三本松遺跡は水路部と切土部の調査で、遺跡の北部からは古墳時代の竪穴住居跡６軒、南部からは中世の溝跡などを検出した。遺跡は河岸段丘面の中央部にあたり、特に北部は比較的平坦で遺構の残存状況は良かった。古墳時代の竪穴住居跡は一辺が５～８ｍの平面が方形のもので、壁面高が50cmあり土層の堆積状況から見ても当時の規模とさほどの違いは無いようである。竪穴住居跡の埋土からは土師器を中心にした出土遺物が多く、須恵器は古式の特徴を持ったものが数点検出されている。一辺が８ｍほどある一番大きな竪穴住居跡からは床の中央から炉跡と考えられる痕跡が検出できた。これらの事から、竪穴住居跡群は石動三本松遺跡の北側200ｍに位置する下石動遺跡の５世紀頃の集落とほぼ同時か若干の時期差をもった集落と見られる。遺跡の南部は現況の水田に条里と見られる痕跡があり、調査でもこれと関係のある中世以降らしい溝跡が検出できた。遺跡の南東部からは中世の遺物とともに縄文時代早期の押型文土器が出土している。石動三本松遺跡は遺構・遺物の密度は比較的に低かったが、古墳時代中期の集落構造を考える上での好資料や佐賀東部地区における押型文土器の新資料を得ることができた。



1．石動三本松Ａ遺跡
　第１地区全景（上から）
2．石動三本松Ａ遺跡第１地区
　ＳＨ006竪穴住居跡（西から）
3．石動三本松Ｂ遺跡第１地区
　ＳＤ002溝跡（南から）
4．石動三本松Ｂ遺跡第１地区
　ＳＤ004溝跡（北西から）
5．石動三本松Ｂ遺跡第２地区
　調査地区全景（南東から）

5．下石動遺跡（略号：ＳＩＮ）

遺跡の所在地

神埼郡東脊振村大字石動字三本松

調査主体者

東脊振村教育委員会

調査期間

昭和62年12月～昭和63年３月

調査面積

4,200㎡

図45　下石動遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

下石動遺跡はほぼ中央を東西に走る九州横断自動車道に係る調査によって、その概要がわかった。遺跡は弥生時代中期と古墳時代後期から７・８世紀の集落跡、中世の溝跡などが発見された。今回の圃場整備に係る調査においても、前回の調査結果を補強する形で多くの資料を得ることが出来た。調査は第４地区から第９地区までの本調査を行った。

第４地区は、調査地区の中では最も南にあたり、７～８世紀頃の溝跡を３条検出した。この内の一つは幅10ｍ、深さ0.8ｍ程あり溝と云うより川跡と呼べるような遺構で、遺構埋土には砂土が多く、水量がかなりあったと見られる。第５地区は、５～６世紀の竪穴住居跡約12棟、７～８世紀の土坑約10基、竪穴住居跡１棟、中世の溝跡１条、時期不明の小穴多数を検出した。

第６地区は、中世の溝跡３条、奈良時代の土坑２基、弥生時代中期前葉の土坑１基と小穴を少し検出した。第７地区は、古墳時代後期の竪穴住居跡２軒と縄文時代と見られる土坑を１基検出した。第８地区は、奈良時代ごろの土坑・穴を10基と、微高地の端の遺物を多数含んだ包含層を検出した。第９地区は、土器の小破片は数点見られたが明確な遺構や遺物は検出できなった。

今回の調査では、下石動遺跡の広がりを確認するとともに、九州横断自動車道関係での調査された遺構・遺物の資料により補足・追加することができた。下石動遺跡は東脊振村内でも最大規模の集落遺跡で弥生時代から奈良平安時代にまで及ぶ内容、量ともに資料の豊富な遺跡で、今回の調査で多くの成果を得た。

1．下石動遺跡第４地区
　ＳＤ302、303、304溝跡
　（上から）
2．第５地区（上から）
3．第６地区ＳＤ313溝跡
　埋土土層断面（南から）
4．第７地区
　ＳＨ311、312竪穴住居跡
　（西から）

6．石動裏田遺跡（略号：ＩＵＴ）

遺跡の所在地

神埼郡東脊振村大字石動字四本杉

調査主体者

東脊振村教育委員会

調査期間

昭和62年４月～９月（前年度から継続）

調査面積

約600㎡（昭和61年度は600㎡）

図47　石動裏田遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

遺跡は脊振山地南麓に位置し、工事によって破壊される古墳５基のうち、昭和61年度に３基を調査し、２基を今年度事業として調査した。調査した古墳は２基はともに古墳時代後期の横穴式石室を内部主体とした円墳で、墳丘・周溝などの外部施設が大きく削平を受けていたが、石室の保存状態はよく２基ともに天井石・羨道部の大部分を残していた。出土遺物は少なかったが、２基のうち１基の閉塞石が一部残っていた為、その周辺から須恵器や土師器が若干出土した。又、周溝の埋土から縄文土器や石器の出土があったために古墳時代の遺構の下を掘り下げたが、縄文時代の遺構・包含層は確認できなかった。

図48　石動裏田遺跡調査地区全景（南西から）

1．石動裏田遺跡調査地区全景（上から）
2．ＳＴ001古墳（南西から）
3．ＳＴ002古墳石室入口（南西から）
4．ＳＴ002古墳石室入口閉塞石（南西から）
5．ＳＴ003古墳（北西から）
6．ＳＴ004古墳石室前庭部（南西から）
7．ＳＴ005古墳石室（南西から）

7．鶴前田遺跡（略号：ＴＭＤ）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字鶴

調査主体者

神埼町教育委員会

調査期間

昭和62年６月～10月

調査面積

1,800㎡

図50　鶴前田遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

鶴前田遺跡は、神埼町東部に所在し、城原川と三本松川に挟まれた標高７～９ｍの水田部に立地している。以前より古代道路跡（西海道）の存在が推定されていた地区で、馬郡集落北から西側への延長上にある。周辺には、昭和61年度農業基盤整備事業に係わり実施した中園遺跡[註1]、吉野ケ里遺跡[註2]、志波屋二の坪遺跡など、奈良時代の遺跡が分布している。調査は、東西に掘削される水路部分を対象に行い、東側の１区と西側の２区とに分けて実施した。

調査の結果、１区は幅10～15ｍ、北側に幅約２ｍの側溝を持った道路跡を検出した。南側では0.2～0.3ｍの段落ちがあるが側溝は確認できなかった。道路面は、基盤土となる灰黒色粘質土上に砂質土で整地を行い、青灰褐色砂質土により非常に堅く形成されている。道路路面は、中世～近世にかけての溝跡が掘り込まれ全容は不明であった。

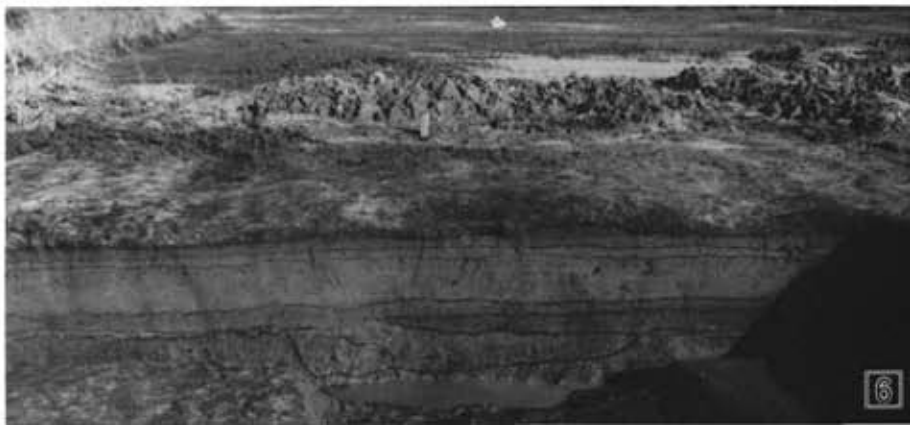
２区では幅13ｍ、南北に幅２～2.5ｍの側溝を持つ道路跡を検出した。道路面は１区と同じく非常に堅く形成され、一部には砂利敷きの面を確認した。

出土遺物は、道路跡に明確に伴うものはないが、中世～近世の溝跡より青磁碗、染付皿・碗、土師器小皿・鉢、カメ、瓦などがある。

以上のように、鶴前田遺跡の調査では古代の道路跡が確認された。この道路跡はこれまでの調査結果とともに古代の社会状況、交通体系を考える上において重要な遺跡と言える。

註１　緒方祐次郎・八尋実『的小渕遺跡12区・中園遺跡』神埼町文化財調査報告書第14集　神埼町教育委員会　1987

註２　八尋実・緒方祐次郎『中園遺跡・吉野ケ里遺跡・志波屋二の坪遺跡』神埼町文化財調査報告書第16集　神埼町教育委員会　1987



1．鶴前田遺跡
　1区全景（西から）
2．2区全景（西から）
3．1区道路跡（西から）
4．1区道路跡（東から）
5．1区土層断面
6．2区土層断面

8．柳郷（やなごう）城跡（略号：ＹＧＯ）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字横武

調査主体者

神埼町教育委員会

調査期間

昭和62年10月～昭和63年３月

調査面積

2,600㎡

図52　柳郷城跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

柳郷城跡は、神埼町南部に所在する。城原川と中地江川に挟まれた標高３～3.5ｍの低湿水田地帯に立地している。周辺には、昭和60年度農業基盤整備事業に係わり実施した本告牟田遺跡（註）、姉川城跡、横武城跡、上六丁、下六丁などの中世～近世の館跡・環濠集落跡が多く分布している。調査は、工事によって掘削される水路部分を対象とした。調査区は、柳郷八ヱ門の居館跡と伝えられ、周辺をクリークにより囲まれ４ケ所の島から成り立っている。便宜的に１～４区に分け実施した。

調査の結果、掘立柱建物跡３棟、溝跡35条、土壙３基、小穴などを検出した。掘立柱建物跡は４間×５間が１棟、１間×３間は２棟で建て替えが行われている。遺構は島の中で一番大きい１区からが大半で、他の調査区は溝、小穴のみである。

出土遺物としては、土師器小皿・杯・鉢・羽釜、須恵器片口・壺、陶磁器、石鍋、砥石、刀子などがある。遺物の中には、東幡系の搬入土器が含まれ興味深い。時期的には、14世紀～16世紀に位置付けられる。現在の地形は、旧クリークを埋め立てて形成された島であることが判明した。今後、周辺遺跡との関連の中で調査研究が必要である。

註　八尋実・緒方祐次郎『本告牟田遺跡・的小潤遺跡』神埼町文化財調査報告書第13集　神埼町教育委員会　1986

1．柳郷城跡調査区全景（北から）
2．1区全景
3．1区掘立柱建物跡
4．1区土壙
5．1区土壙遺物出土状況
6．1区遺物出土状況

9．下六丁遺跡（略号：ＳＲＣ）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字横武字灰巻

調査主体者

佐賀県教育委員会

調査期間

昭和62年７月～９月

調査面積

1,054㎡

図54　下六丁遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

下六丁遺跡は、神埼町南西部の城原川と中地江川に挟まれた標高約３ｍの水田部に位置する。遺跡の所在する横武地区及び周辺一帯には「堀」と称される水路が縦横に走り、本告牟田遺跡[註1]、横武四本黒木遺跡[註2]、柳郷城跡[註3]、横武城跡、姉川城跡等のいわゆる中世環濠集落・館跡が点在している。近年、一部調査が行われた遺跡も増え、「環濠集落跡」として一括されている遺跡の実体が少しずつ明らかになりつつある。

今回の調査地点は、上六丁・下六丁の両集落に挟まれた「カミヤシキ」と通称される場所で、遺跡の東端部にあたる。

調査の結果、室町時代の大小の溝と江戸時代の土坑を検出した。

室町時代に比定される溝のうち調査区南側のＳＤ001～006は一連の大溝で、ＳＤ001は南北の、ＳＤ002～006は東西の座標にほぼ合っている。ＳＤ001北半部とＳＤ002・004は一辺約25ｍの方形に廻ると想定され、上部幅2.5～3.0ｍ、深さ1.0～1.2ｍを測る。溝内からは、土師質土器鍋・鉢・擂鉢・羽釜・甕、瓦質土器擂鉢・羽釜、土師器坏・小皿、青磁碗、白磁碗・皿・坏、滑石製石鍋の他、横槌や担い棒等の木製品が出土した。遺物の中で多数を占めるのは、口縁が下垂れの台形状に肥厚する土師質の鍋である。これらの出土遺物は14世紀から15世紀に比定される。

下六丁遺跡は室町時代の「濠」を伴う集落跡が主体であると考えられるが、今回の部分的な調査では建物跡等の居住域を示す遺構は検出されず、遺跡の全体像を把むには至らなかった。

註１　八尋実・緒方祐次郎『本告牟田遺跡・的小渕遺跡』神埼町文化財調査報告書第13集　神埼町教育委員会　1986

註２　本書Ｐ．80。

註３　本書Ｐ．76。

1．下六丁遺跡調査区全景（南から）
2．ＳＤ001～004溝（南から）
3．ＳＤ003・004溝（東から）
4．ＳＤ001溝堆積状況
5．ＳＤ004溝堆積状況
6．ＳＤ003溝木製品出土状況

10. 横武四本黒木遺跡（略号：ＹＴＹ）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字横武字四本黒木

調査主体者

佐賀県教育委員会

調査期間

昭和62年10月～12月

調査面積

1,116㎡

図56　横武四本黒木遺跡周辺地形図（1：25,000）

遺跡の概要

横武四本黒木遺跡は、城原川と中地江川に挟まれた標高約３ｍの水田部に位置している。周辺一帯に発達した水路は「堀」あるいは「クリーク」と呼ばれ、佐賀平野の景観を特徴づけている。遺跡の所在する神埼町南西部から千代田町北部にかけての一帯は、このような水路を廻らした中世の集落・館跡が集中し、「環濠集落跡」と称されている。このうち、本告牟田遺跡[註1]、柳郷城跡[註2]、下六丁遺跡[註3]、横武城跡[註4]については一部調査が行われ、この種の遺跡の性格を明らかにする為の基礎資料が充実しつつある。

横武四本黒木遺跡もこうした「環濠集落跡」の１つであり、水路に囲まれた島状地の集合から成る。今回の調査は、掘削される範囲を島状地毎に１～４区として行った。

調査の結果、１区で東西に走る溝１条、２区で南北に走る溝２条・土坑２基・小穴群、４区で東西に走る溝２条を検出した。出土遺物は全体的に少ないが、15世紀～16世紀に比定される。

２区のＳＫ005土坑は長軸4.7ｍ、短軸2.4ｍ以上、深さ1.3ｍの不整楕円形で、埋土の中ほどには細かい層理を示す混土灰層がある。土師器小皿・坏多数の他、土師質土器鍋・擂鉢、瓦質土器火鉢・甕、青磁碗・皿、白磁坏・八角坏、李朝陶器皿、石鉢、丸瓦が出土した。

横武四本黒木遺跡は、近接する下六丁遺跡とほぼ同時期の遺跡であり、比較的短期間に形成されている。今回検出された遺構・遺物のみでは遺跡の性格を明らかにし得ないが、遺跡の範囲が「宝蔵寺」の跡であるという地元の伝承もあり、周辺の遺跡を含めて今後検討していきたい。

註１　八尋実・緒方祐次郎『本告牟田遺跡・的小渕遺跡』神埼町文化財調査報告書第13集　神埼町教育委員会　1986

註２　本書Ｐ．76。

註３　本書Ｐ．78。

註４　1987年度に神埼町教育委員会が発掘調査を実施した。

1．横武四本黒木遺跡調査区全景（南から）
2．２区全景（東から）
3．ＳＤ002溝（南から）
4．ＳＫ004・005土坑（東から）
5．ＳＫ004土坑（東から）
6．ＳＤ007溝遺物出土状況

11. 藤ノ木西分遺跡（略号：ＦＮＫ）

遺跡の所在地

神埼郡千代田町大字下板字西四ノ坪

調査主体者

千代田町教育委員会

調査期間

昭和62年５月～９月

調査面積

1,500㎡

図58　藤ノ木西分遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

藤ノ木西分遺跡は千代田町の東部、田手川の東方の標高3.5ｍの沖積平野上に立地する。遺跡の北方には、森の木貝塚、西方には詫田西分貝塚、詫田上地貝塚など弥生時代を中心とする貝塚遺跡が点在している。調査は、掘削を受ける水路部分、削平される微高地についてＡ～Ｄの小調査区に分けて実施した。

Ａ地点からは、13世紀前後を中心とする土壙８基、井戸跡５基、溝跡３条、掘立柱建物跡１棟などの遺構の他、大小の柱穴多数を検出した。遺構は、調査地点中央～東側に集中し、西側に行くにつれ少なくなる。

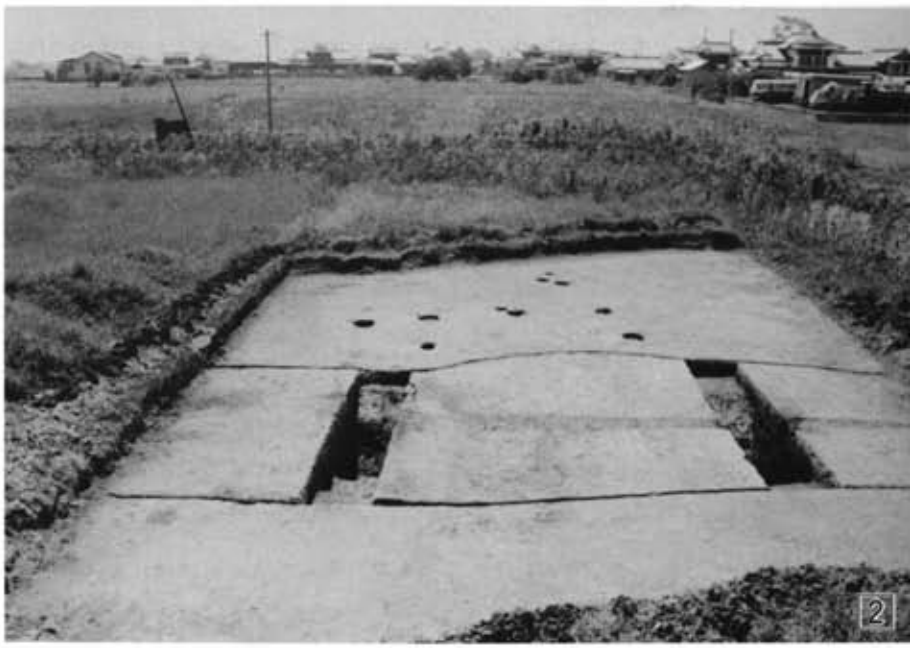
Ｂ地点からは、大溝１条、大小の柱穴を検出した。遺構は全体的に少なく、検出した大溝はクリークを埋めたてたものと考えられる。

Ｃ地点からは、Ａ地点と同様13世紀前後を中心とする土壙３基、堀立柱建物跡３棟の遺構の他、大小の柱穴を検出した。遺構は全体的に少ない。

Ｄ地点からは、埋土中に中世遺物が混入する包含層を検出したが、遺構を確認することはできず、遺跡の東端にあたる地点と考えられる。

出土遺物は各調査地点より13世紀前後を中心とする遺物が出土した。遺物は、土師器坏、皿、甕、須恵器杯、甕、蓋、瓦器椀、青・白磁椀、土錘、石鍋、石器（砥石）、獣骨、鉄滓が各遺構より出土している。特に注目される遺物としてふいごの羽口が出土しており、それに伴っての鉄滓、焼土がある。またこの他、Ａ地点の微高地からは、江戸時代の伊万里系の陶磁器が多数出土している。

以上のように藤ノ木西分遺跡は、13世紀を中心とする生活が行われた集落跡である。出土遺物でふいごの羽口の出土から、この辺一帯に製鉄関係の集落があり、この集落もその一部であったことが推定され、今後周辺地域を含め解明していかなければならない。また千代田町内で同時期の遺跡は少なく貴重な資料を与えてくれた。



1．藤ノ木西分遺跡
　A地点東側全景（南から）
2．B地点全景（北から）
3．C地点全景（西から）

12. 余江西二本松遺跡（略号：ＡＮＮ）

遺跡の所在地

神埼郡千代田町大字余江字西二本松

調査主体者

千代田町教育委員会

調査期間

昭和62年９月～11月

調査面積

2,000㎡

図60　余江西二本松遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

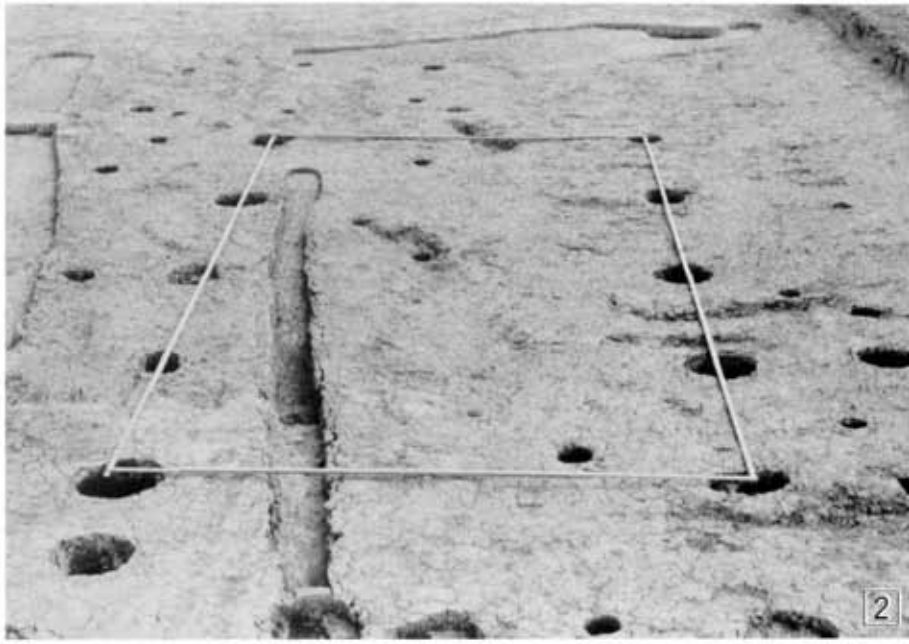
余江西二本松遺跡は、千代田町の南西部、中地江川の西方の標高3.3ｍの沖積平野上に立地する。遺跡の北方には、川崎遺跡、東方には柴尾遺跡、崎村遺跡、西方には貴別当神社弥生遺跡など弥生時代～中世の遺跡が点在している。調査は、圃場整備事業により掘削を受ける水路部分について行った。

余江西二本松遺跡で検出された遺構は、掘立柱建物跡１棟、土壙９基、井戸跡６基、溝跡23条、その他不明遺構６基、木棺墓１基、その他大小の柱穴多数を検出した。時期的には、12世紀～13世紀を中心とする遺構がほとんどで、若干の近世の遺物が出土した。

出土遺物は、土師器杯、皿、甕、須恵器杯、甕、土師質土器、須恵質土器、瓦器椀、皿、瓦質土器、青・白磁椀、皿、土錘、石錘、木製品（木櫛、スコップ状木器、椀、木槌、柱痕）、石鍋、植物種子、貝類など豊富な遺物が出土した。またその他に、近世の伊万里系の陶磁器が出土した。

またこの調査の結果、３点の注目される事があげられる。第１に、この地区は神埼庄の条里の南西隅にあたると考えられている所で、調査区内に東西に走る幅４～５ｍの溝跡に、南北に小溝が直交しており、何らかの条里遺構に関係あるものと考えられる。第２に、ＳＰ026木棺墓は、長方形の木棺中央に遺骸を収め、胸部に同安窯系の青磁椀、その椀の中に土師器皿を重ね副葬し、また遺骸の両側、頭部に15個の土師器皿を並べており、この墓は当核地の有力者の墓である事が推定された。第３に、出土遺物の中で、大陸系の青磁、白磁類が在地の土師器等の土器類に比べ非常に量が多い。また神出窯系、魚住窯系と思われる須恵質の片口土器が多量に出土しているなど、この地が当時の海の玄関口、あるいはそれに伴う重要な地点、また施設があったことがうかがわれた。

以上のように、余江西二本松遺跡の調査により多大の成果を収めることができた。特にこの地域は有明海を中心とする文化の伝来地点であり、筑後川を含め今後有明海沿岸の文化を考える上で非常に大切な地点となるであろう。



1．余江西二本松遺跡
　南側近景（北から）
2．ＳＢ001
3．ＳＰ026木棺墓
4．ＳＫ029

13. 直鳥四本松遺跡（略号：ＮＹＭ）

遺跡の所在地

神埼郡千代田町大字直鳥字四本松

調査主体者

千代田町教育委員会

調査期間

昭和62年12月

調査面積

800㎡

遺跡の概要

図62　直鳥四本松遺跡周辺地形図（1：25,000）

直鳥四本松遺跡は、千代田町の中央部、城原川西方の標高3.5ｍの沖積平野上に立地し、古くから環濠集落（直鳥城）として知られる。遺跡の南方には下直鳥貝塚、柴尾遺跡、西方には姉貝塚、姉遺跡、東方には詫田西分貝塚など弥生時代～中世にかけての遺跡が点在している。

環濠集落（直鳥城）は、犬塚家貞の四男犬塚山城守治部大輔家久が始祖といわれ、その妻は龍造寺隠岐守家員の娘である。家久のことについては分からないが、中央では応仁の乱がおさまり、室町末期の武田、上杉の対立、信長が擡頭しはじめた頃にあたり、犬塚氏もその武威は大いに揚がっていたと思われる。

直鳥城は古くから周知の遺跡として知られていたにもかかわらず、その全容はまったく不明で、今回の調査地は直鳥城推定地より西に200ｍと隣接しておりその一端を知ることができると期待された。

検出された遺構は、掘立柱建物跡１棟、土壙８基、井戸跡１基、溝跡６条、その他不明遺構３基、その他大小の柱穴を検出した。時期的には大きく２つの時期に分かれ、第Ⅰ期は、弥生時代後期後半～古墳時代前半の弥生土器、土師器（甕、壺、高杯、器台、鉢）、石器（磨石、凹石）が出土し、第Ⅱ期は、13世紀の土器（土師器甕、須恵器杯、青磁碗、皿、瓦器椀）、土錘などが出土した。遺跡の中心は、第Ⅰ期でほとんどの遺構がこの時期にあたる。

以上のように、直鳥四本松遺跡は弥生時代を中心とした遺跡で、また調査範囲が狭く限定され遺跡を解明するには至らなかった。また前述したように、環濠集落（直鳥城跡）に関連する直接的な資料を確認することができなかった。しかしながら、この調査を基礎に今後周辺部の調査を行い遺跡解明するとともに、環濠集落（直鳥城跡）解明を行っていかなければならない。

註　広江大元他「千代田町誌」千代田町教育委員会　1974

1．直鳥四本松遺跡
　東側全景（西から）
2．西側全景（東から）
3．東側遺構検出状況
4．西側遺構検出状況

14. 上和泉遺跡（略号：ＫＩＺ）

遺跡の所在地

佐賀市久保泉町大字上和泉字泉

調査主体者

佐賀市教育委員会

調査期間

昭和62年６月～９月

調査面積

4,000㎡

遺跡の概要

図64　上和泉遺跡周辺地形図（１：25,000）

上和泉遺跡は佐賀市域の北東部に位置する。周辺はその大半が田であるが、市域南部に見られるクリークはほとんどなく、その灌漑は急流小河川によるものである。

このような田が広がっている中で、その比高差約１ｍの低丘陵が点在する。遺跡はこの低丘陵及びその周辺に多く所在する。

今回の調査では、遺跡が５地点に分散したので、Ａ～Ｅ地区と呼称し、調査を実施した。この遺跡の時期は平安時代と江戸時代に大別でき、前者のものには土壙、溝、小穴、後者のものには溝がある。

これらの中で代表的な遺構としてはＣ地区ＳＫ010土壙、ＳＫ01土壙、Ｄ地区ＳＫ012土壙や、Ｅ地区ＳＤ005溝などがある。前者の３基の土壙は深さが0.6～1.4ｍと浅いので土壙という名称を使用したが、現在でも底面には湧水があり、井戸の機能がない訳でもない。これらの土壙埋土下層からは多数の土師器坏・椀を検出した。また、後者のＳＤ005溝からは土師器坏が整然と並べられた状況で50個体以上検出された。このような遺物を溝中全域から検出すれば、他所からの流れ込み又は溝中への投棄が考えられるが、前述の検出状況から遺構の性格を考えると祭祀目的以外には考え難い。しかし、このような検出例が佐賀市域では初めてのものであり、どのような祭祀であるかは今後の調査例の増加を俟って再検討したい。

1．上和泉遺跡A・B・C地区全景
2．C地区SK010土壙遺物検出状況
3．C地区SK011土壙遺物検出状況
4．D・E地区全景
5．D地区SK012土壙遺物検出状況
6．E地区SD005溝遺物検出状況

15. 佐保遺跡（略号：ＳＯＨ）

遺跡の所在地

佐賀郡大和町大字池上

調査主体者

大和町教育委員会

調査期間

昭和62年４月～６月

昭和62年８月～10月

調査面積

4,800㎡

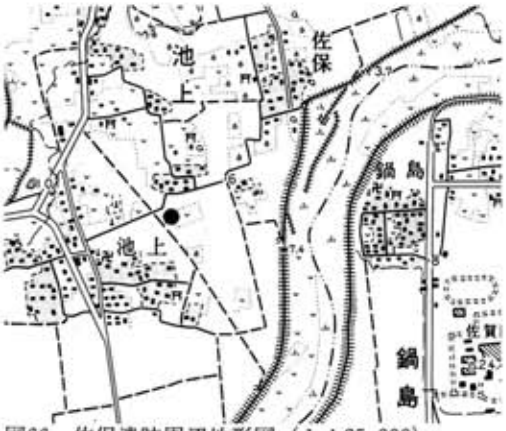


図66　佐保遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

今回調査を行った佐保遺跡はＡ、Ｂ、Ｃ地区に分けて調査を実施した。佐保遺跡は、大和町の西南部、嘉瀬川と平川に挟まれた、標高６ｍ～７ｍの水田地帯に立地する。先行して行った確認調査においても甕棺等を検出しており当初より弥生時代の墓域の可能性が高いと思われていた。また、当遺跡の周辺には、楢田三本松遺跡、久留間遺跡など弥生時代の代表的な遺跡や風楽寺古墳、導善寺古墳など前方後円墳があり、古代における大集落の可能性を秘めている。今回の調査は、工事により削平される畑部分について実施した。調査の結果検出された遺構は、甕棺58基、掘立柱建物４軒、井戸５基、溝13条、祭祀遺構２基である。

Ａ地区

この地区は主に弥生時代の甕棺と平安時代の掘立柱建物である。甕棺は、地区の北中央部分と南東部分に集中し、掘立柱建物は、北の東西部分に分かれる。甕棺は全部で46基検出した。うち成人棺25基、小児用棺21基である。掘立柱建物は２軒検出した。ＳＢ－２掘立柱建物は３間×２間（6.3ｍ×4.2ｍ）、ＳＢ－49掘立柱建物は３間×２間（6.9ｍ×3.3ｍ）で東側に半間の廂がつく。

Ｂ地区

この地区もＡ地区と同じく弥生時代の甕棺が主体である。検出した甕棺は11基である。他に祭祀遺構２基も検出している。Ａ地区とＢ地区は本来は同一の墓域であったものが後世に削平され水田として利用されたと思われる。

Ｃ地区

Ｂ地区より200ｍほど南に位置する。平安時代の掘立柱建物２軒、井戸５基、溝13条、土壙３基であった。その中でＳＢ－８掘立柱建物は２間×３間（4.4ｍ×7.5ｍ）、ＳＢ－19掘立柱建物は３間×２間（6.3ｍ×3.6ｍ）である。当地区南側に東西に走るＳＤ－16溝は幅4.6ｍ、深さ1.15ｍ、長さ39.4ｍ以上と大きく、集落の区画のための溝ではないかと思われる。

1．佐保遺跡Ａ地区
　ＳＪ－31・32甕棺墓
2．Ａ地区ＳＢ－２掘立柱建物跡
3．Ｂ地区全景（西から）
4．Ｃ地区全景
5．Ｃ地区掘立柱建物跡（北から）

16. 池上二本松B遺跡（略号：ＩＵＢ）

遺跡の所在地

佐賀郡大和町大字池上

調査主体者

大和町教育委員会

調査期間

昭和62年11月～昭和63年１月

調査面積

3,500㎡

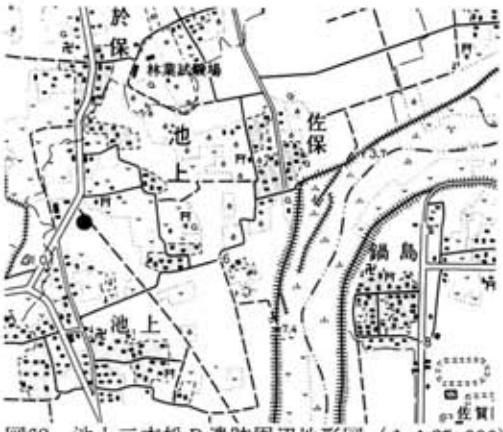


図68　池上二本松Ｂ遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

池上二本松Ｂ遺跡は大和町の西南部、嘉瀬川と平川に挟まれた、標高６ｍ～７ｍの水田地帯に立地する。先行して行った確認調査においても甕棺等を検出しており、当初より弥生時代の墓域の可能性が高いと考えられた。また、当遺跡の周辺には、楢田三本松遺跡、久留間遺跡など弥生時代の代表的な遺跡や風楽寺古墳、導善寺古墳など前方後円墳があり、古代における大集落の可能性を秘めている。今回の調査は、工事によって削平される畑部分について実施した。調査の結果検出された遺構は甕棺墓45基、土壙墓３基、土壙12基、溝８条、小穴13個、不明遺構14基である。甕棺墓45基のうち成人用は22基、小児用21基、不明２基である。成人用甕棺墓のうちＳＪ－１号甕棺墓とＳＪ－45号甕棺墓は甕を３個つなぎあわせたものである。甕棺墓は当遺跡の南側に集中しており、まだ南に延びることが予想されることから当地区には大甕棺墓群が存在すると思われる。次に土壙墓は３基検出している。３基とも２段掘りである。ＳＰ－40号土壙墓は、１段目が2.5ｍ×0.75ｍ、深さ0.4ｍ、２段目が1.25ｍ×0.6ｍ、深さ0.4ｍ。ＳＰ－50号土壙墓は、１段目が2.55ｍ×1.55ｍ、深さ0.5ｍ、２段目は1.95ｍ×0.5ｍ、深さ0.3ｍ。ＳＰ－51号土壙墓は、１段目が2.2ｍ×0.8ｍ、深さ0.5ｍ、２段目は、1.85ｍ×0.5ｍ、深さ0.5ｍ。溝は８条検出しているが、その内ＳＤ－49溝、ＳＤ－50溝、ＳＤ－51溝は方形に巡り一見方形周溝墓を思わせるような平面形をもっている。ただし、墓壙は確認できなかった。

1．池上二本松Ｂ遺跡
　　全景
2．ＳＪ－１甕棺墓
3．ＳＰ－50土壙墓
4．ＳＤ－49・50・51溝

17. 土師本村遺跡（略号：ＨＪＨ）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字大堂字土師

調査主体者

諸富町教育委員会

調査期間

昭和62年９月～10月

調査面積

800㎡

図70　土師本村遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

遺跡は、諸富町のほぼ中央に位置する土師地区集落を中心に広がる。周辺には、小杭村中遺跡・太田本村遺跡・上大津遺跡などが位置し、町内北部地域最大の遺跡群を形成する。調査は、この土師地区集落北西角に位置する水田面で実施した。調査の結果弥生時代後期終末～鎌倉時代にかけての溝跡・井戸跡・土壙・柱穴・不明遺構等が多数確認された。このうち鎌倉時代の遺構は少なく、弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭の遺構が中心を占める。

特に注目される物として、調査区東側角に位置するＳＫ９土壙や西側に位置するＳＥ76井戸跡が上げられる。ＳＫ９土壙は、長径1.05ｍ・短径0.82ｍ・深さ0.95ｍの土壙で内部より庄内式甕（搬入品）・山陰系壺・在地系甕・壺・長胴甕・東海系Ｓ字口縁甕等が一括で出土した。特に在地系の土器には、庄内式を模倣した物や在地の特色そのままの物もあり諸富地域での庄内式搬入時期を考える上で重要である。

またＳＥ76井戸跡は、長径1.27・短径1.15ｍ・深さ1.86ｍの円形素掘の井戸で、内部より布留式甕（布留１式）が17＋α個体出土した。これまで町内では、あまり完形で多数出土した例が少ないためこの時期の土器を考える上で重要である。またこの時期の在地系甕が共伴し注目される。町内北部地域では弥生時代後期後半の資料も見られるが、本遺跡では見られず、町内の陸地化の進行状況を考える上で注目される。

図71

1．土師本村遺跡
　全景　真全景（西から）
2．ＳＥ72土状況
3．ＳＫ９土状況

18. 石塚古墳群１号古墳(略号：ISZ-１)

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字為重字石塚

調査主体者

諸富町教育委員会

調査期間

昭和63年１月～２月、４月～６月

調査面積

76㎡

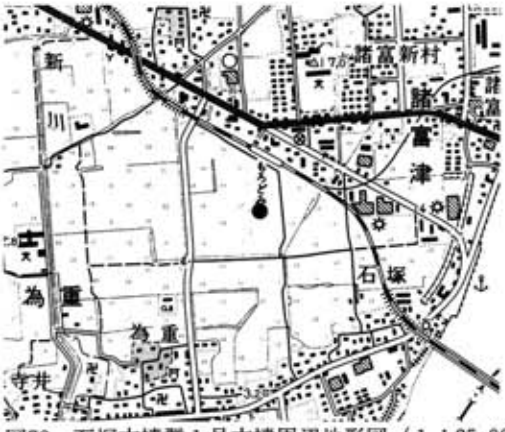


図72　石塚古墳群１号古墳周辺地形図（１：25,000）

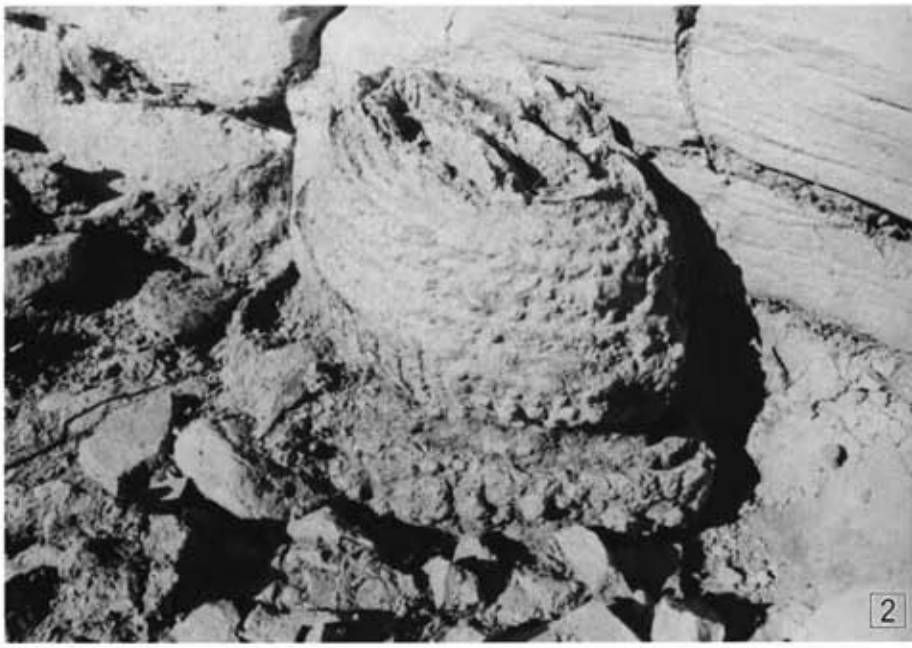
遺跡の概要

遺跡は、沖積平野の微高地（標高3.06ｍ）に立地する。諸富町では比較的高い地域で、筑後川流域に発達した自然堤防と考えられる。南方約200ｍ付近には４世紀中頃の貝塚等が発見され、更に100ｍ南方には近世の干拓地が所在することから当時の海岸線付近と推定される。古墳下及びその周辺より４世紀末と考えられる古式土師器が完形で出土し、古墳以前に集落が形成されていたと見られる。古墳は南西方向に伸びる長径約21ｍ・短径約12ｍの馬蹄形（長楕円）状の円墳で、南西側は、古墳以前の沼状の落ち込みを人為的に整地し古墳を築造したものと見られる。周溝は一部確認されたが、古墳の全体に廻っていたか不明である。盛土はこの地域の粘土質の土を用い、突き固めて造っている。発見当時、古墳は大きく削り取られていた。

石室は東南東に開口した横穴式石室であったと推定され、玄室奥壁部分及び右側壁及び羨道部が一部残存する。石室形態は、竪穴式石室的で、羨道部と玄室を単に仕切石で区別するタイプの横穴式石室と考えられる。玄室奥壁及び側壁は巨石を用い、羨道部は積石となる。玄室部床面には、右側壁から幅約1.5ｍでバラス状の敷石が見られ、上部に棺台的に人頭大の河原石を並べ、左側両端に棺留に使用したと思われる立石が見られる。羨道部は、玄室部分より更に小さなバラス状の敷石を敷く。玄室部分の棺台部分は、二次的埋葬面と見られる。

羨道部より挂甲（両引き合わせ）・馬具類（鐙金具・辻金具・杏葉・留金具）・鉄鏃・水晶製切子玉・メノウ製管玉・ガラス製小玉・須恵器提瓶・人骨（歯）・金銅製装飾品等が確認された。挂甲は、羨道右側壁角部分に見られ、馬具類は袖石及び仕切石部分、金銅装飾品は馬具・挂甲間の側壁部分、玉類・歯は、これらの南側敷石部に見られた。玄室棺台上部・下部より水晶製勾玉・水晶製・メノウ製管玉・水晶製切子玉・バラス製小玉・鉄器・馬具・銀環・人骨等が多数出土した。また棺台部左側奥壁部分付近には、挂甲小札・馬具（杏葉・素環鏡板）等が出土した。このことから羨道部に見られる挂甲・馬具等は、二次埋葬の時に玄室部分より羨道部に移動されたものと見られる。この他、墳丘及び石室上部・周溝などから弥生時代中期初頭の土器や須恵器・埴輪などが出土した。

図73



1．石塚古墳群
　1号古墳全景（西から）
2．挂甲出土状況
3．馬具出土状況

19. 三重二ツ寺遺跡（略号：ＭＦＴ）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字為重字三重二ツ寺

調査主体者

諸富町教育委員会

調査期間

昭和62年４月～８月

調査面積

1,900㎡

図74　三重二ツ寺遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

三重二ツ寺遺跡は、諸富町の南西部に位置する三重地区集落の中央北部水田面に位置する。約10,000㎡の広さを有する遺跡で、遺跡全体がほぼクリークに囲まれている。遺跡周辺には、弥生時代の土器が見られる三重櫟ノ木遺跡や三重本村遺跡などが知られ、町内南部地域最大の遺跡群を形成する。三重地区住民の話によると「むかしこの地に二つの寺が立っていた」と伝えられる。調査は、遺跡の北東部分に東西方向にトレンチを設定し実施した。その結果、奈良時代～中世にかけての溝跡５条・建物跡１戸・井戸跡３基・土壙20基・柱穴多数を検出した。遺構は、調査区の東西両角に遺跡を区画すると考えられる溝跡が見られ、内部より奈良時代から中世にかけての生活土器が多数見られた。特に注目される遺物として須恵器杯・瓦器椀・白磁碗に見られた墨書が上げられる。須恵器杯は、奈良時代の物で「万呂」・「国？」（国府・国麻呂・国麿と考えられる。）「大」・「田成」などが見られる。瓦器・白磁は、13世紀後半のもので「大」のほか花押的なものが見られる。

このような奈良時代の墨書土器は、国府や寺院・駅・郡衙等の地方の中心的地域に多く見られ注目される。

1．三重二ッ寺遺跡
　全景
2・3．遺物出土状況

20. 三重本村遺跡（略号：ＭＨＮ）・三重庚神茶屋遺跡（略号：　―　）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字為重字三重

調査主体者

諸富町教育委員会

調査期間

昭和62年10月～12月

調査面積

1,200㎡

図76　三重本村遺跡・三重庚神茶屋周辺地形図
（1：25,000）

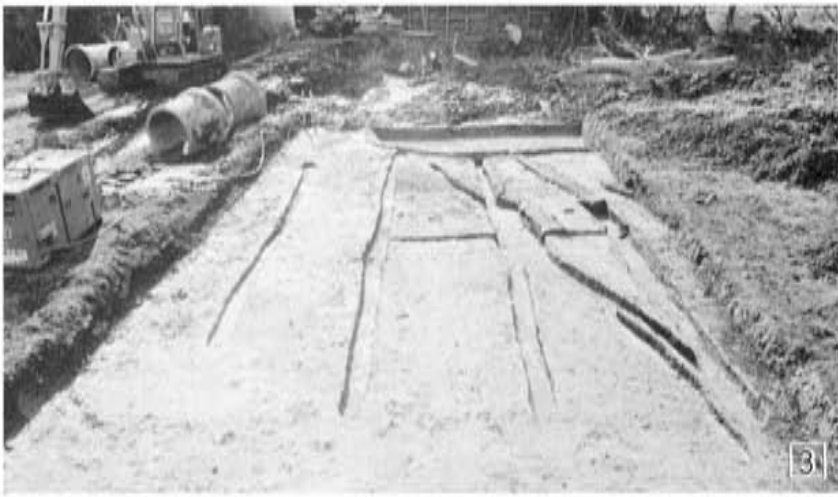
遺跡の概要

三重本村遺跡・三重庚神茶屋遺跡は、諸富町の南西部に位置する三重地区を中心に広がる遺跡である。周辺には、北側に三重二ツ寺遺跡・三重櫟ノ木遺跡などが見られ、町内南部地域最大の遺跡群を形成する。遺跡の所在する三重地区は、寛政年間鍋島藩の川副代官所が設置された地区で三重本村遺跡内には、代官所に関係した地域も含まれる。三重本村遺跡は、三重地区集落を中心に北側と南側に広がり、その南方約100ｍに三重庚神茶屋遺跡が広がる。

今回調査を実施したのは、三重本村遺跡の北側水田面（１区）と南側水田面（２区）さらに三重庚神茶屋遺跡東角を東西に伸びる水路部分で実施した。三重庚神茶屋遺跡は、８月の設計変更によりそれまで遺跡を東西に横断して計画されていたものが遺跡東角を南北に走る水路に変更された。調査は、バックホーによる遺構確認から行い、調査区南角部分より表土下約15㎝の深さより摩滅した土師器片が確認されたが、明瞭な遺構は発見できなかった。このことにより遺跡は、調査区の西側に広がると考えられる。

三重本村遺跡１区は、集落と水田を区別するクリークから北に向かって設定した調査区で遺跡の西角に位置する。表土下約15㎝の地点より溝跡・土壙などを確認した。調査区の北側には遺構は見られず、南側の集落側に集中して見られた。各遺構からは、奈良時代の須恵器・土師器等が見られた。１区北側には奈良時代～鎌倉時代の集落跡と考えられる三重二ツ寺遺跡が位置する事から、これらとの関係が注目された。

三重本村遺跡２区は集落側に東西に向かって設定した調査区で、中央を幅約４ｍ・深さ1.5ｍの溝跡が走る。溝跡は断面逆台形で内部より古唐津・土師器・瓦器・青磁・白磁染め付け・陶器・瓦器等が多数出土した。調査区西側には三重代官所跡が見られ、これらとの関係が注目された。



1．三重本村遺跡
　Ⅰ区全景（北から）
2．Ⅱ区ＳＤ001西側
3．Ⅰ区南側溝
4．Ⅱ区ＳＤ001東側

21. 太田本村遺跡（略号：ＯＨＭ－２）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字大堂字太田

調査主体者

諸富町教育委員会

調査期間

昭和62年８月～９月

調査面積

900㎡

図78　太田本村遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

太田本村遺跡は、諸富町のほぼ中央に位置する太田地区を中心に広がる約110,000㎡の広さを有する町内最大の遺跡である。遺跡の中心に位置する太田地区は、集落全体をクリークに囲まれた集落で、亨禄４年（1529）に関東より下向した太田氏（太田資元）の居城「太田城」（田中城）があったと伝えられる。集落内には、太田氏の氏寺「慈広寺」・祈祷所「宝光院」などが見られる。慈広寺は七堂伽藍を持った寺院と伝えられ、寺院内の墓碑等に当時の面影が偲ばれる。太田地区には、現在も東館・西館・館橋・北小路・門前・溝口などの通称が遺存している。

今回調査を実施したのは、集落の中央東側部分に位置する慈広寺の東側水田面で、慈広寺北の墓地群から東に伸びるクリーク南側部分、さらに寺院に沿って南側に伸びる水路予定地について実施した。調査の結果クリーク南側部分では、現況クリーク面が近世に埋め立てられたと考えられる痕跡が認められた。寺院に沿った南側部分からは、溝跡・土壙墓・土壙・柱穴等が確認され遺構内より15世紀～17世紀にかけての土師器・陶器・輸入青磁・染付白磁・古伊万里・古唐津・木器などが多数出土した。特に注目されるのは、調査区中央部分を現在の寺院建物に沿って南北に伸びる溝あとより多数の灰層が確認され、寺院に火災があったか不明であるが、火災時の堆積の可能性があり注目される。また溝跡は地域を区画するように東側に伸び、寺院に関連した建物の存在も予想され注目される。

1．太田本村遺跡Ⅱ区全景
2．Ⅱ区ＳＤ032南側
3．Ⅱ区北側

22. 小杭村中遺跡（略号：ＯＧＭ）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字山領字小杭分二本松

〃　　大字大堂字一本杉・四本谷

調査主体者

佐賀県教育委員会

調査期間

昭和62年５月～11月

調査面積

5,970㎡

図80　小杭村中遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

小杭村中遺跡は、諸富町のほぼ中央部に位置している。筑後川下流の右岸域にあたる標高約３ｍの起伏が殆どない平坦地である。

佐賀平野南部では河川沿いに発達した自然堤防等の微高地部を中心に遺跡が形成されており、本遺跡の周辺でも太田本村遺跡[註1]、土師本村遺跡[註2]の一部が調査され、弥生時代に始まるこの地域の開発過程とその特質が明らかになりつつある。

調査は、大字の境を成す水路を挟んで北側を１区、南側の南北に走る部分を２区、東西に走る部分を３区として行った。

調査の結果、古墳時代前期初頭～中世の遺構を検出した。遺構は掘立柱建物跡４棟、井戸11基、溝13条を始め、多数の土坑・小穴等であるが、１区と２区南側には疎らで、２区南側と３区に集中していた。

奈良時代の遺構は３区に密で、ＳＥ246井戸からは多数の土器が出土したが、そのうち須恵器３点に墨書が認められ、水滴の出土と併せて識字層の存在を窺わせる。

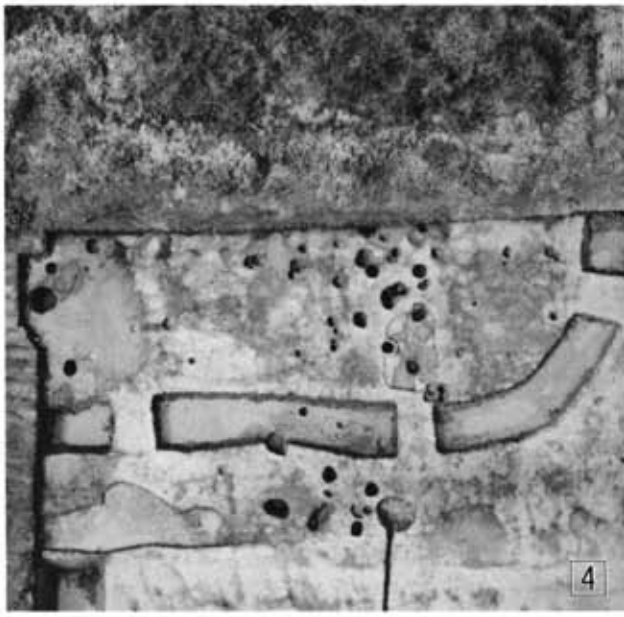
平安時代の遺構は２区南側にまとまっており、ＳＤ041溝からは10世紀中頃から11世紀初頭の特徴を持つ多数の土器類が出土した。

中世の遺構のうち、１区のＳＤ026溝と２区のＳＤ035溝は大規模であるが、遺物の出土は少なく周辺に生活関連遺構もないことから、居住域から離れた水路の可能性が強い。３区では井戸・土坑等が検出されたが、ＳＥ303井戸からは瓦器と共に丸鍬が出土し、この時期の木製農耕具の貴重な１例となった。

このように古墳時代から中世の多数の遺構・遺物を検出したが、それでも今回の調査区は縁辺部の感が強く、遺跡の主体は現在の小杭集落を中心に広がっていることが予想される。

註１　本書Ｐ．102。

註２　本書Ｐ．94。



1．小杭村中遺跡２・３区全景（南から）
2．２区全景（南から）
3．３区全景（西から）
4．２区ＳＤ041溝周辺（東から）
5．１区ＳＥ004井戸遺物出土状況
6．３区ＳＸ140遺構遺物出土状況

23. 上田町遺跡（略号：ＪＹＤ）

遺跡の所在地

多久市南多久町大字下多久字木浦町

調査主体者

多久市教育委員会

調査期間

昭和62年７月～９月

調査面積

1,000㎡

図82　上田町遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

上田町遺跡は多久盆地の中央から東に広がる平野の中央部に位置する上田町遺跡群の一つで、天山（1,046ｍ）を源流とする今出川の左岸、標高18ｍ前後の水田に所在する。上田町遺跡群はこれまで縄文時代の土器片や石器、弥生時代の甕棺墓などが出土し、遺跡周辺には大工田遺跡・今出川遺跡・原田遺跡など縄文時代～奈良時代の遺跡が所在し、市内でも遺跡が集中する地域の一つとして知られていた。

調査は削平を受ける４枚の水田について実施し、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器溜、古墳時代後期～奈良時代の溝状遺構、江戸時代の土壙を検出した。

ＳＸ001土器溜は耕作土直下の約６×４ｍの範囲に、上面を削平された状態で土器類が集中した。遺構の掘り込みは確認できず、流れ込みとも考えられるが、遺物が同一時期であることや出土状態から原位置を保っていると判断した。遺物は甕・広口壺・二重口縁壺・長頸壺・鉢・高杯・椀・台付鉢・台付甕・手捏土器などの土器類と鉄鏃が出土した。

ＳＸ002土器溜は調査区中央部に約５×３ｍの範囲で遺物が集中した。遺構の掘り込みは明瞭ではないが確認でき、台形状の不定形であった。遺構内で炭火物と焼土を検出した。遺物は甕・広口壺・短頸壺・鉢・高杯・手捏土器が出土した。

ＳＸ003土器溜は調査区南側に約４×２ｍの広さで土器が集中した。遺構の掘り込みは確認できなった。遺物は甕・台付甕・鉢・高杯・鼓形器台などが出土した。

ＳＸ004土器溜は調査区東側の約５×３ｍの範囲に、上面を削平された状態で土器類が集中した。遺構の掘り込みは検出できなかった。遺物は甕・胴長甕・台付甕・壺・鉢・高杯・鼓形器台・手捏土器などと鉄鏃などが出土した。

土器溜はＳＸ003土器溜が弥生時代終末、ＳＸ004土器溜が弥生時代終末～古墳時代初頭の過渡期、ＳＸ001土器溜が古墳時代初頭、ＳＸ002土器溜がこれに続き、多久市では弥生時代から古墳時代への過渡期の遺構および遺物の検出は今調査が初めてで、これまで解明されていなかった時代の実態を明らかにする多大の成果を得ることができた。

1．上田町遺跡
　ＳＸ001土器溜遺
　出土状況
2．ＳＸ002土器溜遺
　出土状況
3．ＳＸ004土器溜遺
　出土状況

24. 木浦町遺跡（略号：ＫＵＲ）

遺跡の所在地

多久市南多久町大字下多久字木浦町

調査主体者

多久市教育委員会

調査期間

昭和62年８月～10月

調査面積

2,800㎡

遺跡の概要

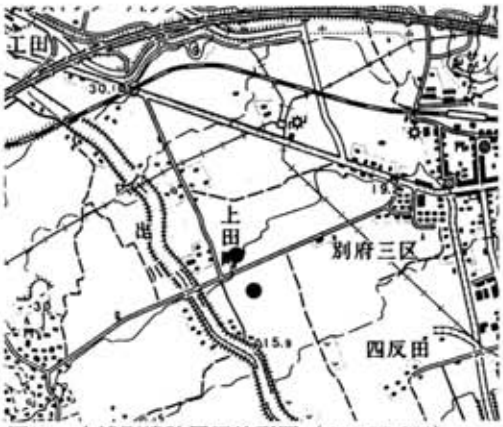


図84　木浦町遺跡周辺地形図（１：25,000）

木浦町遺跡は上田町遺跡の南東170ｍに位置する標高16ｍ前後の水田（第Ⅰ地点）と、北東120ｍに位置する標高19ｍの水田（第Ⅱ地点）に所在した。

第Ⅰ地点は２×１ｍの範囲に約20個体の土器が集中し、そのほとんどが復元できるものである。土器は二重口縁壺・広口壺・短頸壺・杯・高杯・椀などが出土した。注目される遺物として２面の土製鏡があり、遺構の掘り込みは検出できなかったが祭祀遺構であろう。

第Ⅱ地点は古墳時代後期の住居跡９棟を検出した。ＳＨ001・002竪穴住居跡は複合住居跡で、火災を受けたあと、一部を拡幅し建て直したと考えられる。土師器壺・甑・ミニチュア土器・手捏土器・須恵器杯などが出土した。ＳＨ003竪穴住居跡はＳＨ004竪穴住居跡に切られた方形住居跡で土師器甕・壺・須恵器杯などが出土した。ＳＨ004竪穴住居跡からは土師器甕・壺などの破片が出土した。ＳＨ005竪穴住居跡は3.5ｍ平方の方形住居跡で、土師器片が出土した。ＳＨ006竪穴住居跡は2.5ｍ前後の方形住居跡で、土師器片が出土した。ＳＨ007竪穴住居跡は５×4.5ｍの方形住居跡で、土師器甕・壺などが出土した。ＳＨ008竪穴住居跡は東側の壁の一部を残すだけの住居跡で、聰が出土した。ＳＨ009竪穴住居跡4.3×4.6ｍの方形住居跡で、土師器甕や壺の破片が出土した。

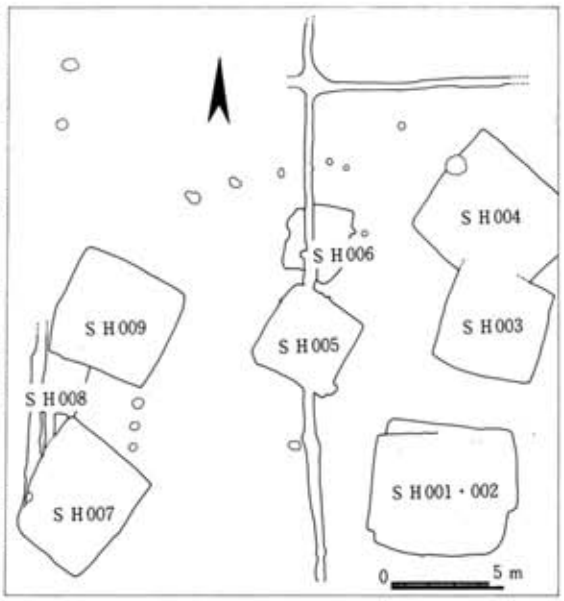


図85　木浦町遺跡第Ⅱ地点遺構配置図

多久市で古墳時代前期の祭祀遺構や古墳時代後期の住居跡の検出は初めてで、周辺に所在する古墳との関連を知る手がかりとなるものであろう。

1．木浦町遺跡
　第Ⅰ地点全景
2．第Ⅱ地点
　ＳＨ001・002竪穴住居跡
3．第Ⅱ地点
　ＳＨ003・004竪穴住居跡

25. 吉祥寺遺跡（略号：ＫＳＧ）

遺跡の所在地

武雄市東川登町大字袴野字浦川内

調査主体者

武雄市教育委員会

調査期間

昭和62年４月～７月

調査面積

4,300㎡

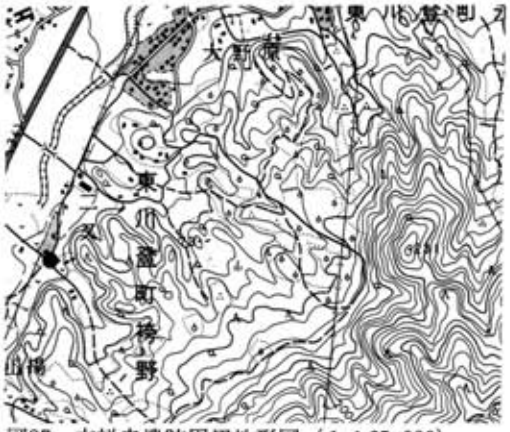


図87　吉祥寺遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

吉祥寺遺跡は、武雄市東川登町のほぼ中央、六角川によって開析された谷平野に面する山裾部に立地する。標高約300ｍである。遺跡の現況は畑地であり、工事によって削平される4,300㎡を調査対象とした。

調査の結果検出された遺構は、掘立柱建物跡10棟、土壙31基、溝６条、埋甕７基、塚２基、および柱穴等である。掘立柱建物跡は５間×２間１棟、３間×１間２棟、２間×１間７棟である。土壙、柱穴には柱痕をもつもの（ＳＫ207、Ｐ30）もある。埋甕は、大型の甕を埋めたもの（ＳＪ212・218・301～303・308）と小型の甕を埋めたもの（ＳＪ213）がある。ＳＪ303は、中に栗石を多数つめこんであった。塚ＳＪ203、204は、盛土の上および内部から、五輪塔・宝篋印塔が出土した。当調査区で出土した遺物は、大半が陶磁器で、その他、土錘、銅銭、魚骨が出土した。

吉祥寺遺跡は、江戸中期～後期にかけて営まれた遺跡であると考えられる。その性格は、遺跡の名称が示すように寺跡が考えられたが、地元には、これを示すような伝承等は残っていない。また寺の性格を示すような遺構・遺物も検出されなかった。なお、当遺跡の北東、山の斜面に、天正元年（1573年）銘の六地蔵塔があり、この前後から当遺跡が営まれだしたものと思われる。

1．吉祥寺遺跡
　3区全景（東から）
2．P－30（東から）
3．SJ303（西から）

26. みやこ遺跡（略号：ＭＹＫ）

遺跡の所在地

武雄市橘町大字大日字郷ノ木

調査主体者

武雄市教育委員会

調査期間

昭和62年９月～11月

調査面積

1,000㎡

図89　みやこ遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

みやこ遺跡は橘町の南部、六角川の右岸側（標高約８ｍ）に位置する。これまでに六角川の河川改修工事に伴う調査や昭和61年度に圃場整備に伴って水路敷の調査を実施している。これらの調査において多数の遺構及び遺物を出土した。特に弥生時代後期においては甕棺墓及び石棺墓等の墳墓が検出され、副葬品として鏡（片）や鉄製武器を出土したものがある。これらの墳墓はⅡ区・Ⅲ区で多く検出され、今回の調査区はその東隣に位置する。

調査区は昭和61年度に調査を実施した水路の延長で、幅４ｍ×延長250ｍを対象とし、２－24号水路調査区とした。

調査の結果、土壙17基、井戸跡５基、溝12条、墳墓４基及び柱穴などを検出した。井戸跡は中世のもので、枠は確認されなかったが、１基からは土師器坏などとともに竪杵状木製品が１本出土した。墳墓は甕棺１基、石棺１基、石蓋土壙墓２基で、石棺及び石蓋土壙墓は３基並んだ状態で検出された。このうちＳＰ024石蓋土壙墓の蓋石直上（蓋石に付着した状態）で鉄斧１が出土した。甕棺は小児用と考えられ、甕と壺の合わせ口甕棺である。土壙は大小各種あり、時代的にも弥生時代と中世の二時期に大別される。

以上のように今回の調査においても、遺構の密度及び性格等はこれまでの調査結果と変化なく、今回の調査区南東部で、密度が少なくなり、遺跡の縁辺部と考えられる。

註　原田保則「みやこ遺跡」武雄市文化財調査報告書第15集上巻　武雄市教育委員会　1986

1．みやこ遺跡
　２－23調査区（南から）
2．ＳＰ024～026（東から）
3．ＳＪ035（南から）

27. 小野原遺跡（略号：ＯＮＢ）

遺跡の所在地

武雄市橘町大字大日字小野原

調査主体者

武雄市教育委員会

調査期間

昭和62年11月

調査面積

1,000㎡

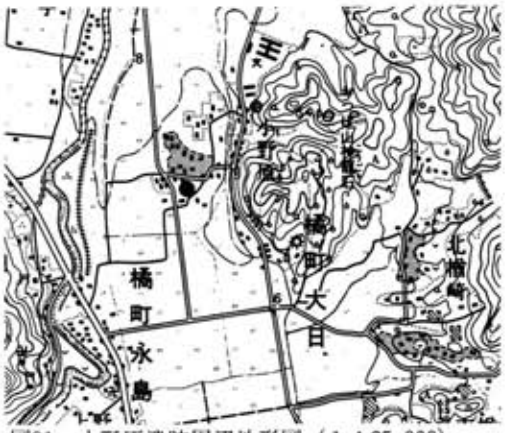


図91　小野原遺跡周辺地形図（1：25,000）

遺跡の概要

小野原遺跡は橘町の南部にあり、六角川と東川にはさまれた標高約7.5ｍの水田・畑地及び宅地に位置する。昭和61年度施工の県営圃場整備事業に伴って遺跡北西部の水路敷を調査しており、今回は遺跡の南東部の調査を実施した。遺跡の東側には史跡おつぼ山神籠石、西側にはみやこ遺跡が隣接し、杵島山の古墳群や玉島古墳、潮見古墳などが近接する遺跡である。

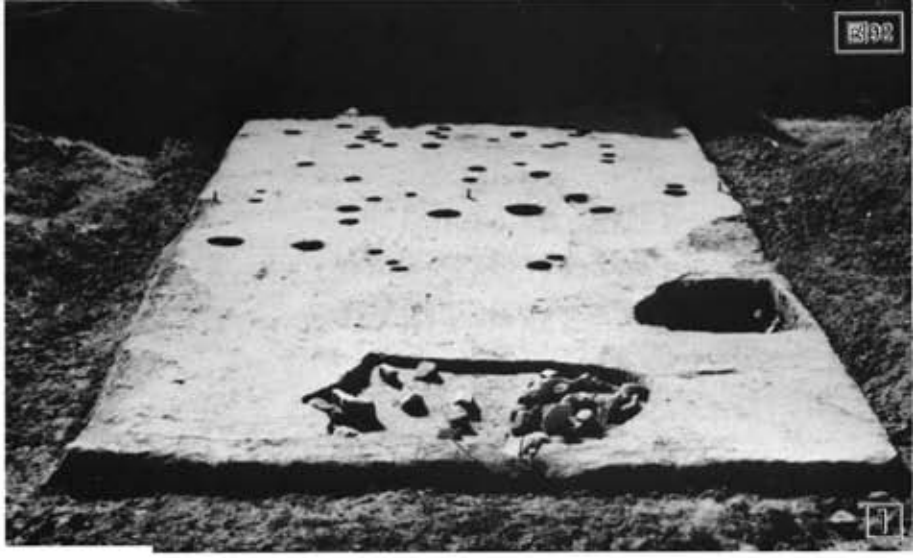
調査は削平を受ける点在する畑地を対象とし、集落内を４区、集落の南に位置する地区を５区として実施した。

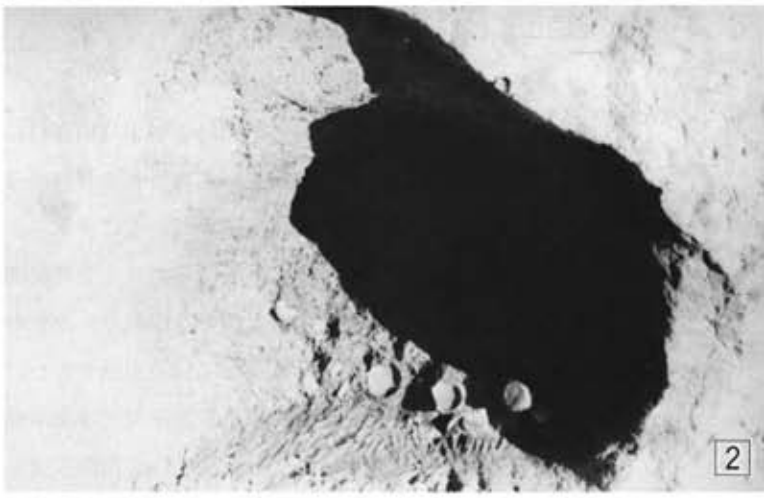
調査の結果、４区では土壙３基、井戸跡３基、溝３条、墳墓２基及び柱穴などを検出した。墳墓はともに石棺で、１基は畑の法面に一部を露出していたもので、調査のきっかけとなった。ともに副葬品の出土はなかった。墳墓以外は中世の遺構と考えられ、土壙等からは青磁等の出土があり、ＳＥ411井戸跡からは多量の土師器坏・小皿が出土した。

５区では土壙３基、溝１条及び柱穴などを検出した。出土した遺物は少なく、土師器を主体としたものであり、時期的には古墳時代の所産と考えられる。

以上のように今回の調査では、遺跡の東南部、特に５区は縁辺部と考えられる。従って、遺跡の中心部は現在の集落地であり、これまでに石斧や弥生土器を出土した地点からもそのことがうかがえる。

註　原田保則『小野原遺跡』武雄市教育委員会　1987





1．小野原遺跡
　4Ｄ区全景（北から）
2．4Ｄ区ＳＥ411井戸跡
　（西から）
3．4Ｂ区ＳＰ401石棺墓
　（北から）
4．4Ｂ区ＳＰ401石棺墓
　（東から）

28. 玉江遺跡（略号：ＴＡＭ）

遺跡の所在地

武雄市橘町大字永島字北上野

調査主体者

武雄市教育委員会

調査期間

昭和62年11月～昭和63年２月

調査面積

3,800㎡

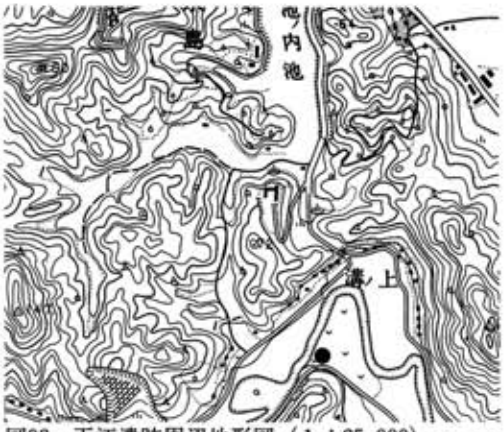


図93　玉江遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

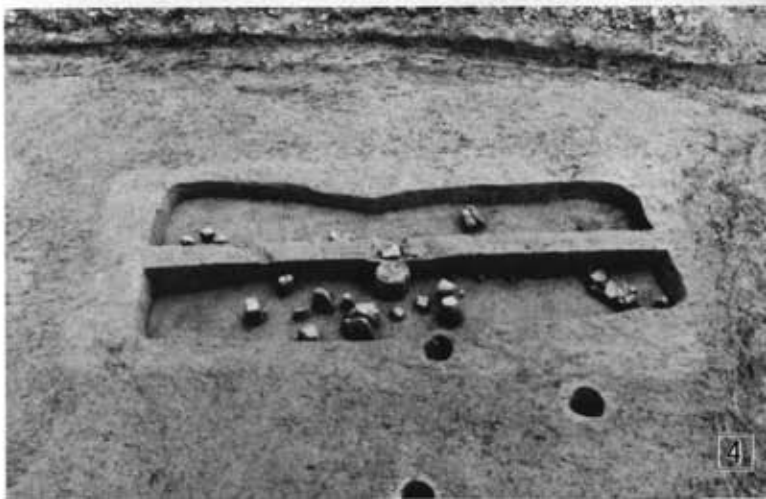
玉江遺跡は橘町の南西端、六角川の右岸（標高11ｍ前後）に位置する。これまでに六角川の小規模河川改修工事に伴う調査が実施されており[註]、今回の調査直前には九州横断自動車道に伴う調査が県文化課によって実施されている。本来、玉江遺跡は中広銅矛を出土した遺跡として知られていたが、これまでの調査結果では古墳時代の竪穴住居跡や奈良・平安時代の掘立柱建物跡などが検出され、出土した銅矛は埋納されたものと考えられる。

調査区は東から４区・５区（５－12号水路を含む）・６区とし、新設された上野橋の北側を７区として、削平を受ける畑地及び水路の一部を調査した。

調査の結果、竪穴住居跡４軒、掘立柱建物跡３棟、土壙11基、溝跡５条、土壙墓１基及び柱穴などを検出した。竪穴住居跡はすべて方形プランと考えられ、ＳＨ707住居跡は壁高約0.5ｍを測り、土師器等多量の土器が出土した。掘立柱建物跡は小柱穴よりなる建物で、ＳＢ601建物跡は３間×２間の東西棟建物跡である。溝跡のうちＳＤ502溝跡は幅1.0ｍ、深さ0.5ｍを測り、土師器坏（底部ヘラ切り）や須恵器・黒色土器・瓦器などを出土した。土壙墓は上面に人頭大の礫石数個を配置しており、石の下から青磁碗１個を出土した。これらの遺跡の時期は古墳時代から中世の所産と考えられる。

以上のような成果をあげたが、４～６区までは点在する畑地を主体としたため、遺構の性格把握には困難を要したが、概ね従来の調査成果と相違ないと考えられる。また、７区は遺構密度が小さくなり、遺跡の縁辺部に相当すると考えられる。

註　原田保則『玉江遺跡』武雄市教育委員会　1987



1．玉江遺跡７区全景
（東から）
2．７区ＳＨ707（北から）
3．７区ＳＰ702土壙墓
（西から）
4．７区ＳＫ610土壙（北から）

29. 甕屋窯跡Ａ遺跡（略号：ＫＫＫ－Ａ）

遺跡の所在地

武雄市西川登町大字小田志字亀屋

調査主体者

武雄市教育委員会

調査期間

昭和62年８月～９月、昭和63年１月

調査面積

2,400㎡

図95　甕屋窯跡Ａ遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

甕屋窯跡Ａ遺跡は西川登町の南部に位置し、虚空蔵山（608ｍ）から北東に延びた支脈（焼山＝168ｍ）の南東斜面にＡ窯跡があり、その下の水田面（標高約47㎝）に存在する。窯跡の調査は九州横断自動車道に関連して県文化課が実施している。周辺には、谷をはさんで南にＢ窯跡（３基）があり、字小田志には多くの近世古窯跡が存在する。なお、Ａ窯跡で焼かれた製品は甕（大・中・小）が主体を占めるようであり、その時期は江戸初期頃と考えられている。

調査は削平を受ける田地を対象とし、その結果、掘立柱建物跡９棟、土壙35基、溝３条及び柱穴などを検出した。建物跡の規模は５間×１間２棟、４間×１間２棟、３間×１間４棟、２間×１間１棟で、１間の長さは桁行柱間で1.8ｍ～２ｍ、梁行柱間で約４ｍを測る。これらの柱穴は径約0.3ｍの小柱穴で構成されるものと、径0.7ｍ前後の柱穴で構成されるものに大別される。土壙は大小各種あるが、方形を呈するものが多く、中には灰が詰まっていたものがある。出土した遺物は土壙を中心としており、Ａ窯跡の製品が多いが、そのほかに、日常の碗や皿（磁器を含む）、すり鉢、特殊なものとして土鈴、薬研、土馬（陶製）、銅銭などが出土した。時期的には江戸時代初期の遺跡と考えられ、Ａ窯跡に関連する工房跡かと考えられる。

以上のような成果をあげ、遺跡の重要性から、削平を受けない地区において、工事施工時に平面測量による遺構配置図を作成し、新たに７棟の掘立柱建物跡を確認することができた。合計16棟となり、窯跡本体の調査と工房跡の調査がほぼ並行して実施できたことに大きな意義が認められる。

註　副島正道編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第10集　佐賀県教育委員会　1988

1．甕屋窯跡Ａ遺跡近景
（甕屋窯跡Ｂ遺跡から）
2．Ａ遺跡全景
3．ＳＢ134建物跡（西から）
4．ＳＫ125土壙検出状況
（南から）

30. 湯崎東遺跡（略号：ＹＳＨ）

遺跡の所在地

杵島郡白石町大字湯崎字湯崎

調査主体者

白石町教育委員会

調査期間

昭和62年７月～昭和63年１月

調査面積

3,000㎡

図97　湯崎東遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

湯崎東遺跡は、杵島山系東部に広がる標高約3.4ｍを測る水田地帯に約60㎝の高まりを示す畑地に立地する。本遺跡西部の杵島山丘陵部には、船野山古墳群１号墳（通称「かぶと塚古墳」）を始め、湯崎古墳群、野柄古墳群など、古墳時代中～後期の古墳群が存在している。また、南西部の標高約3.0ｍ付近の水田部には、平安～鎌倉時代の久治遺跡が確認されている。

調査の結果、第２層においては中世の柱間約２ｍを測る一間四方の掘立柱式建物跡１軒、東南部では江戸時代の墓地跡が確認された。墓地跡では、五輪塔、宝篋印塔等の残欠が散在する中に、口径30～50㎝程の甕が20個程検出された。大型の甕底部には成人男性の骨が残存していた。この他、乳歯とともに径約３～４㎜のガラス玉120個が副葬されていた甕もあった。同様の甕は第２層中部、第３層からも検出されたが、これらは第２層から掘り込まれたものと考えられる。第３層では木棺墓15基も検出された。

第３層からは、古墳時代前期～奈良、平安時代の土壙約90基、井戸跡18基、溝７条、小穴多数が検出された。遺構は遺跡中央部に集中する傾向がみられる。

遺物は、少数の弥生時代前期の甕片、多量の土師器、須恵器の他に、銅鏡片、緑釉陶器、瓦器、石器、木製品、石鍋等がある。なかでも、ＳＫ278から出土した櫂３本は、古墳時代の海岸線を推定する手掛かりとなる。「木本」、「日」と墨書された奈良時代の須恵器皿や「大」、「志」等の墨書銘のある平安時代の土師器椀も出土した。

今回の調査では、当初予想されていた住居跡は確認されなかったものの、本遺跡は集落周辺部にあたるものと考えられ、今後の調査において、明確にされる可能性はある。白石平野における大規模な調査は今回が最初であり、古代から中世にかけての様相の一端を示す資料を得ることができた。

1．湯崎東遺跡第３層遺構全景（真上）北は下側
2．Ｅ５区第２層近世墓地跡全景（西から）
3．ＳＫ278土壙櫂出土状況（南から）
4．ＳＥ201井戸遺物出土状況（東から）

31. 多田遺跡（略号：ＴＡＤ）

遺跡の所在地

杵島郡白石町大字今泉字多田

調査主体者

白石町教育委員会

調査期間

昭和63年１月～２月

調査面積

3,200㎡

図99　多田遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

多田遺跡は、白石平野北西部の標高約2.0～2.4ｍを測る水田部に位置している。周辺からは古墳時代後期から奈良時代前期の土器が多く採集されており、早くからその存在が知られていた遺跡である。本遺跡の所在する多田周辺は、『和名類聚鈔』によれば奈良時代に「多駄郷」が、平安時代になると皇室領「太田荘」が設置されるなど、白石平野部では比較的早くから開発されたことが明らかな地域である。

今回の調査は、掘削される水路予定地４ケ所（Ａ～Ｄ地区）について実施した。Ａ地区では遺跡は中、南部に集中して古墳時代中期の土壙、溝、２×１間の掘立柱式建物跡１軒と多数の小穴が検出された。全体的に北側から南側へ約60㎝の差を以て傾斜しており、中央部では大きな窪みがある。遺物としては土師器がほとんどで、須恵器は少量出土したのみである。Ｂ地区からは、古墳時代後期～奈良時代の土壙、溝と小穴多数が検出された。ＳＫ025からは羽子板状の木製品が出土した。Ｃ地区からは、古墳時代後期～奈良時代の土壙、溝、２×２間の掘立柱式建物跡１軒と近世の土壙、溝、木棺墓３基が出土した。不定形落ち込みを示すＳＫ032から、「養入厨」と墨書された杯蓋が出土した。木棺墓01は全長約90㎝、幅約50㎝、残存高約20㎝を測り、北枕の30～40歳程の女性が体全体を屈曲した状態で埋葬されていた。掘り方底部西側に土師器小皿９個、木製盤が置かれ、底部に木簡４本を位牌が置かれた上に竹を７本等間に敷並べ、その上に遺体を安置していた。木簡はいずれも頭部を三角形になし、「北」「東錢心門」などの文字が読みとれる。径約60㎝の桶型の木棺墓02には成人男性の骨が残存しており、棺内には櫛、底部には銅銭10数枚が錆着した状態で出土した。Ｄ地区では遺構は北西側に集中し奈良時代の土壙、溝等が検出された。ＳＫ069からは、判読不明ではあるが墨書土器と木製容器の一部が出土した。底部には木質部の混在した茶褐色細砂質土が堆積していた。

今回検出された遺構は近世のものも含まれるが、古墳時代後期～奈良時代が中心で、生活遺構の一部にあたると考えられる。文献に記される「多駄郷」との関連を窺わせる遺物も出土しており、古代における開発を証明する資料が得られた意義は大きいといえよう。

1．多田遺跡Ａ地区ＳＤ002溝
　　甕出土状況（東から）
2．Ｃ地区ＳＸ01木棺墓（東から）
3．Ｃ地区ＳＸ01木棺墓
　　墓壙遺物出土状況（東から）
4．Ｃ地区遺構状況（北から）

32. 国広遺跡（略号：ＫＮＨ）

遺跡の所在地

鹿島市大字中村字国広

調査主体者

鹿島市教育委員会

調査期間

昭和62年９月～10月

調査面積

500㎡

図101　国広遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

国広遺跡は、塩田川及び鹿島川によって形成された沖積平野である北鹿島平野の南側、標高３ｍに位置する。北鹿島平野では中世以降の遺跡が中心で、古代以前の遺物・遺構は現在確認されていない。国広遺跡の周囲には、横造城、本町遺跡、鷲ノ巣城、森岳城、常広城など中世から近世の城跡を中心とした遺跡が存在する。

調査は事業地区内のポンプ場に付随する水路部分について調査を実施した。その結果、溝３条、土坑数基、杭跡と考えられる小穴多数を検出した。このうち溝２条が接して東西に並走し、さらに溝に接して北側に東西に帯状に小穴が集中する部分があり、柵の存在が考えられる。このことから、溝２条と柵によって南北を隔てていたと思われる。建物等の遺構は検出していないが、確認調査等の結果から調査区の北東側に可能性が高い。遺物の多くはＳＤ－02で、北側より投げ棄てられたと思われる状況で出土した。遺物には、中国明代の青花・青磁・白磁、国産陶器、土師器、瓦質土器の他、木錘・木製鉤・赤漆で家紋状の文様を描いた漆器椀等の木製品、石臼・砥石等の石製品が出土した。遺物には14～16世紀後半のものを含むが、廃棄の時期は16世紀後半であろう。

この遺跡は、遺構が防禦としての機能を持つと思われることや、漆器椀等の遺物の出土から武士階級に関わる遺跡と考えられる。調査地の東方約0.5kmに横造城が存在したと推定されているが、この遺跡は年代的にも一致しており注目される。横造城は、有馬氏が藤津郡への支配権を強めた天正年間（1532～1554）年に築かれたが、天正４年（1576年）の有馬義純と龍造寺隆信との戦いの時落城している。[註] 国広遺跡とこの横造城の関係については、漆器椀の文様を含めて今後検討する必要があろう。

註　肥前史談会「北肥戦史」『肥前叢書』第二輯　青潮社　1973

1．国広遺跡A・B区（南から）
2．全景（南東から）
3．A・B区（北から）
4．溝及び小穴群（南東から）
5．SD－02・03（東から）
6．木製鉤
7．漆器椀

33. 西尾遺跡（略号：ＮＳＯ）

遺跡の所在地

伊万里市二里町大里字西尾

調査主体者

伊万里市教育委員会

調査期間

昭和62年８月～12月

調査面積

2,200㎡

図103　西尾遺跡周辺地形図（１：25,000）

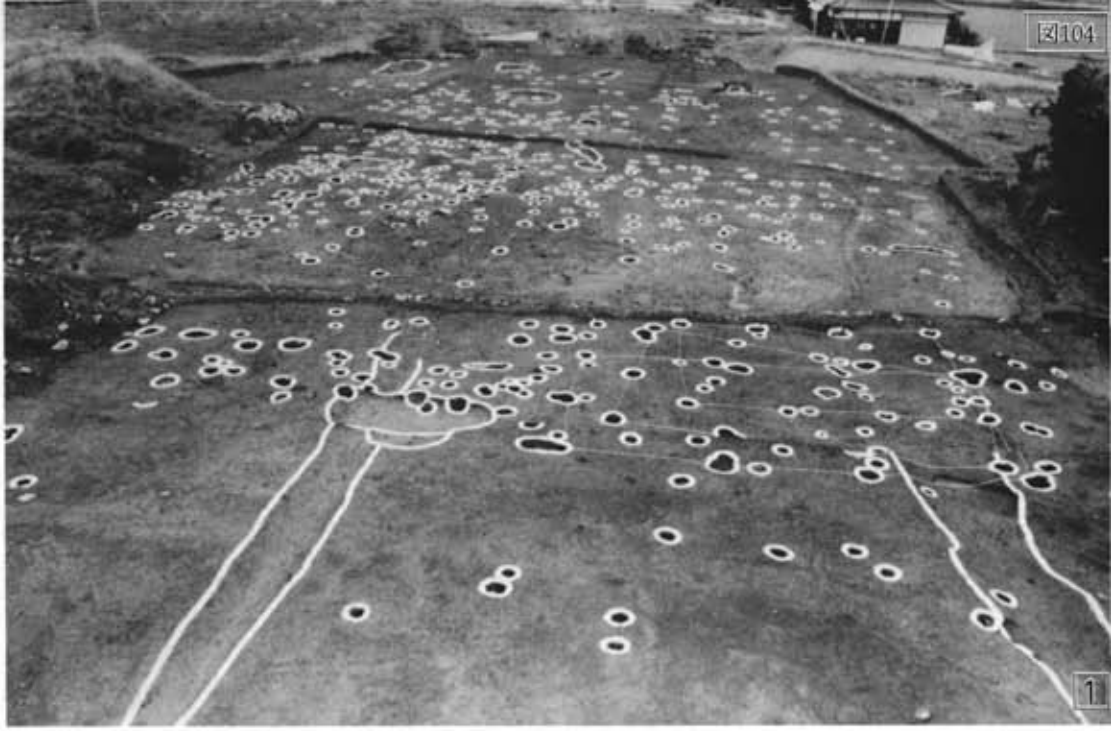
遺跡の概要

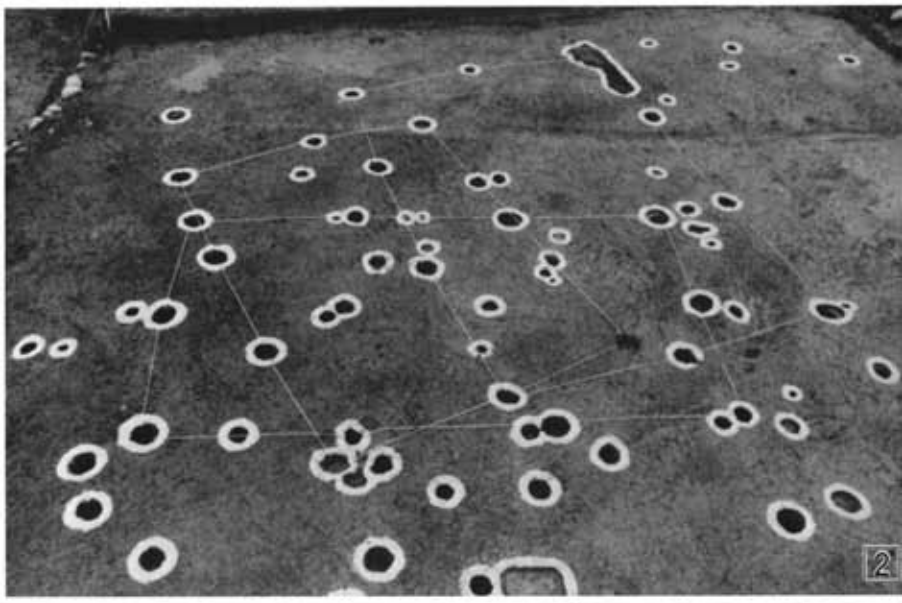
西尾遺跡は伊万里市街地から南西方向約2.5㎞に位置し、有田川によって形成された扇状地と烏帽子岳から派生した丘陵のほぼ接点にあたる。遺跡は有田川に注ぐ西尾川と緑川にはさまれた東方向へ伸びる緩やかな丘陵の先端部に位置し標高は12～21ｍである。今回調査した範囲は、遺跡の東部に位置する。

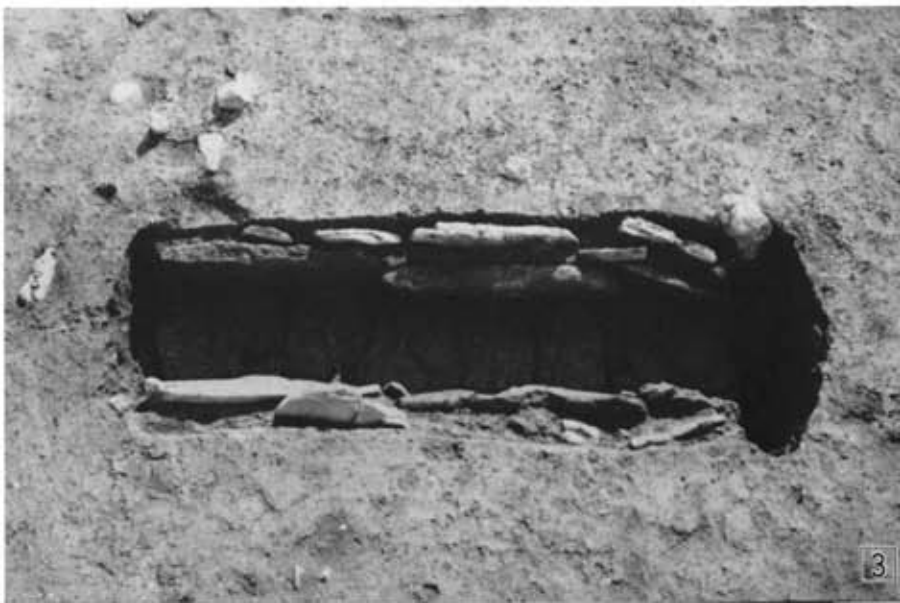
Ａ地区（略号：ＮＳＯ－Ａ）の調査の結果、地山層は数回にわたり削平を受けており、そのため遺構検出面と各時代の生活面は一致しない。覆土内から旧石器時代のナイフ形石器、台形様石器が出土し、縄文時代の黒曜石製石鏃、チャート製鋸歯鏃、石英製の２次加工のある石器等が出土した。遺構としては、弥生時代中期の甕棺３基（成人用単棺）、敷石のある箱式石棺１基、丹塗りの土器を伴う土器群１ケ所、中世（平安末期から鎌倉時代にかけて）の掘立柱建物跡15棟、土壙８基などを検出した。掘立柱建物跡の大部分は３間×２間で、棟持支柱を持つものも見られる。これらの建物跡に伴う遺物として、輸入陶磁器（白磁、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁）、石鍋等が出土した。特徴的な遺物として、瓜形白磁合子、青磁小壺の破片が出土した。

Ｂ地区（略号：ＮＳＯ－Ｂ）の調査の結果、Ａ地点と同様、数回にわたり削平を受けていた。覆土内から縄文時代後期の鉢（北久根山式）の破片、掻器、石鏃などが出土した。遺構としては、江戸時代初期の掘立柱建物跡３棟を検出した。出土遺物は、初期伊万里、唐津等の陶磁器片、刀子などが出土した。

今回の調査によって集落跡を確認したことは、古代から近世にかけての伊万里の歴史を知るうえで貴重な資料を得られた。







1．西尾遺跡
　A地点調査区全景
　（西から）
2．掘立柱建物跡
　（SB10、11、12）（北から）
3．箱式石棺（蓋石除去後）
　（北東から）

34. 草履作遺跡（略号：ＺＯＴ）

遺跡の所在地

唐津市枝去木字草履作

調査主体者

唐津市教育委員会

調査期間

昭和62年７月～10月

調査面積

4,750㎡

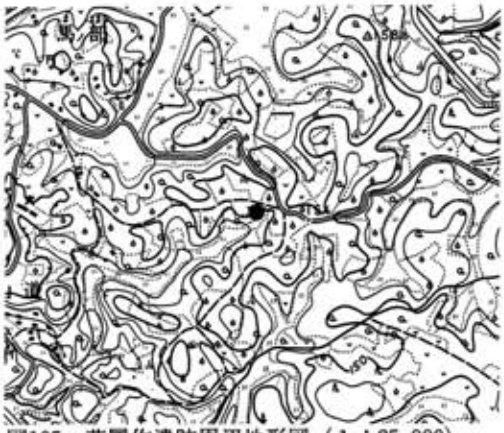


図105　草履作遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

遺跡のある上場台地（東松浦半島）東端は、標高150ｍ～200ｍの準平原状の玄武岩質安山岩の風化台地で、旧石器時代～縄文時代の遺跡が濃密に分布している。台地上は、小河川による開析で、盆地状の谷も形成されている。本遺跡のある山道地区も、西流して半島西部仮屋湾にそそぐ、上場台地最大の河川である有浦川の最上流域にあたる。

山道内区は、こうした上場台地内でも、特に遺跡の密集する枝去木－馬部－笹ノ尾－八幡溜地区の核地帯にあり、原遺跡、枝去木山中遺跡、分校入口遺跡、馬部甚蔵山遺跡、笹ノ尾遺跡群等多数の旧石器～縄文早期の遺跡がある。また、中世室町期の集落跡を検出した名場越後田遺跡もこの谷下流域にあたる。

遺跡は、東に侵入する枝状谷の谷頭湧水点をのぞむ、凹状の南側緩斜目に立地している。

調査は、縄文期の遺物の分布状態を知るために、５ｍ×５ｍのグリッド方式をとった。各グリッド間に設定した0.5ｍ×1.0ｍの畦土層によって、層序堆積状況を確認した。この結果、層位は、１層の表土（10～25㎝）、２層、暗褐色粘質土（10～20㎝）、３層、黄褐色～暗黄褐色粘質土（40～50㎝）からなり、各層はまた地区、堆積状態によって、いくつかに細分されるものである。２層面と３層面の間には、丘陵南側に向かうにしたがい畑地（水田）造成時の埋土層が認められたが、３層面は、良好な遺物包含層となっていた。

遺構は、このうち３層面から、土壙、柱穴状遺構が検出され、礫群状遺構も遺存していた。また、３層下部の丘陵端部には、自然倒木の樹根も検出された。この他、中世期の炭焼窯状遺構も認められた。

遺物は、石鏃、石匙、スクレイパー、石槍、磨石等の石器群と条痕文土器等の土器破片がある。これらは、縄文早期に属するものでプライマリーな包含層出土の遺物の分布は、散集があり分布域（ユニット）としてとらえられる。他に陶磁器、土師質の土馬も出土した。この土馬は、谷頭湧水点との関連性が指摘されるもので貴重なものである。

今回の調査によって、縄文時代早期の遺構と中世～近世期の遺構が検出されたこと、また中

世～近世期の耕地変遷状況を確認したことが成果として上げられる。このうち、本遺跡の主体は、縄文時代早期の集落関連の遺構群と考えられ、一部、削平は受けているものの良好な包含層も遺存していた。特に土壙群は、谷に向かう丘陵凹部に分布するもので、埋土中に小礫を混入し、黒曜石剥片、土器片を多数含むもので、集落、居住地の中での占地領域を考察する上で興味深い。

35. 十蓮Ⅱ遺跡（略号：ＪＲ（Ⅱ））

遺跡の所在地

唐津市湊町字十蓮

調査主体者

唐津市教育委員会

調査期間

昭和62年６月～８月

調査面積

2,700㎡

遺跡の概要

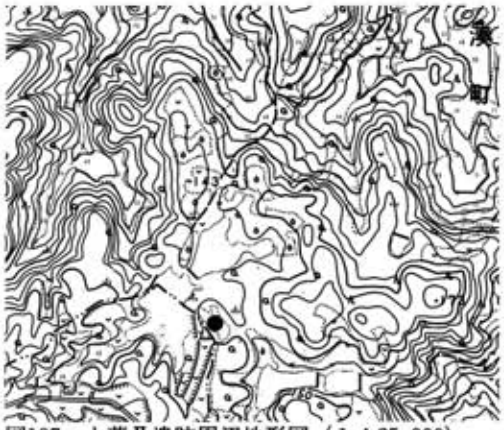


図107　十蓮Ⅱ遺跡周辺地形図（１：25,000）

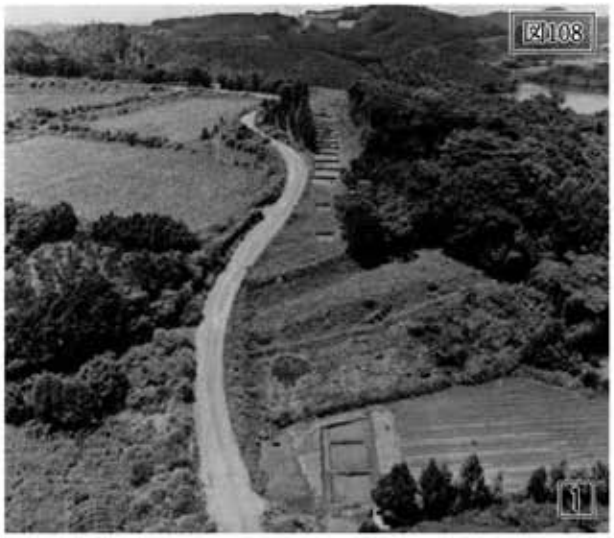
遺跡は佐賀県北西部、上場台地と呼ばれる第三紀層や花崗岩を基盤とし、数期にわたる玄武岩噴出の結果形成された溶岩台地（標高200ｍ前後）の北端部の支脈台地上にある。遺跡の周辺にはいくつもの溜池がまとまって分布しており、この地区の豊富な湧水を物語っている。この谷湧水は下って湊地区の平野をうるおしている。遺跡の東側は台地が急傾斜で落ち、狭い平野を介して海岸に接している。

遺跡は南と北にそれぞれ上葉溜と十蓮溜・朝月溜をひかえ、東を標高180ｍの丘陵、西に標高160～170ｍの丘陵をいただく。遺跡の周辺には十蓮・朝月・湊中野などの先土器時代から縄文時代にかけての遺跡が多く、弥生時代から古墳時代にかけての高地性集落である湊中野遺跡は東傾に隣接した丘陵上にある。遺跡は三つの溜と湊中野によって取り囲まれた小丘陵上に位置し、標高160～170ｍを測る。現況は山林、みかん園であった。

調査は丘陵上の十蓮Ⅱ遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ地区について行った。Ａ地区は丘陵頂部にあたり、２ｍ×２ｍを基本とした、東西に長いグリットを設定した。遺跡の層位はＡ区西傾で見ると、Ⅰ層表土（10㎝）、Ⅱ層黄褐色粘質土（20～30㎝）、Ⅲ層赤褐色粘質土（30～40㎝）、Ⅳ層灰褐色風化礫層であり、Ⅱ層を中心に先土器時代の遺物集中地点（ブロック）１ケ所を検出した。Ⅰ～Ⅱ層上面には中世の遺物の分布が認められる。

Ｂ地区は丘陵頂部中央の平坦面にあたり５ｍ×５ｍの東西に長いグリットを設定した。遺跡の層位はⅠ層表土（５㎝）、Ⅱ層暗黄褐色粘質土（20～30㎝）、Ⅲ層赤褐色粘質土（20～30㎝）、Ⅳ層灰褐色風化礫層であった。遺物の出土状況では西傾はまばらな散布状況であったのに対して、東傾は遺物の密度が極めて高く、Ⅰ・Ⅱ層を中心とし一部Ⅲ層上面に及んでいた。遺物集中地点（ブロック）は長さ約20㎝に及び調査区外南北にも及んでいると予想される。遺物集中地点（ブロック）の中には４～５ｍ程度の特に密集したまとまり３～４個所がみうけられ、この中より、縄文時代晩期中葉の黒川式土器の深鉢・浅鉢・壺・組織痕土器多数をはじめとして、石皿・磨石・打製石斧・磨製石斧・打製石鏃・スクレイパーなどの多量の石器群を検出した。

C地区は丘陵東部の緩斜面にあたり、西端側についてはB地区の遺物集中地点（ブロック）が広がり、中央部北側については縄文時代早期の遺物包含層が検出され、東端部はみかん園造成時の二次堆積層中より縄文時代・先土器時代の遺物を確認した。中央部の土層はⅠ層耕作土（20㎝）、Ⅱ層黄褐色粘質土（20～30㎝）、Ⅲ層赤褐色粘質土（20～30㎝）であり、Ⅰ～Ⅱ層を中心に縄文時代早期の押型文・条痕文・打製石鏃・スクレイパーや先土器時代のナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・Uフレ・剥片などが出土した。



1．十蓮Ⅱ遺跡全景
（東から）
2．B地区全景
（東から）
3．B地区全景
（西から）

36. 松尾田古墳群（略全：ＭＴＤ）

遺跡の所在地

東松浦郡呼子町大字殿ノ浦字マツヲダ

調査主体者

呼子町教育委員会

調査期間

昭和62年７月～８月

調査面積

1,700㎡

図109　松尾田古墳周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

松尾田古墳群は、佐賀県の西北部、玄海灘に向かって突き出た東松浦半島の北端に位置する横穴式石室を内部主体に持つ２基の円墳は北側に海を見おろす標高43メートル前後の微高地に立地する。

ＳＴ001古墳は、後世の削平によって墳丘は全く残存しておらず、周溝も検出できなかった。横穴式石室は、単室で、西北西に開口するが、旧状を留めているものは、右側壁の２個の腰石のみである。石室の規模は、推定で奥行き2.5ｍ、幅1.5～1.7ｍである。玄門、羨道は不明、墓道は約2.0ｍを検出したが、先端部は南側に大きく屈曲するため明らかにし得なかった。

出土遺物は、石室内と墓道から須恵器坏身、提瓶、壺、甕、鉄製銛頭（？）また玄門の床面付近から少し浮いた状態で完形の須恵器坏身が出土しており、これらの遺物から築造時期は、６世紀末頃と推定される。

ＳＴ002古墳は、直径6.0ｍ裾部からの高さ1.0ｍの墳丘が遺存していた。周溝は東から南側部分にかけてよく残っており、部分的ではあるが、墳裾を意識した列石も見られた。横穴式石室は単室で南に開口する。石室の遺存はほとんど腰石のみである。全長4.5ｍ、玄室奥行き2.2ｍ、幅1.45ｍで長方形をなす。この石室は、玄室部分の腰石と、羨道部のそれとを連続して据え置いて一直線に築造し、玄門部の裾石はその内側に独立する。さらに裾石に続いて入口にかけて、石を構築するために、羨道部分が二重に石積みされた構造となっている。墓道は石室主軸から東に方向を変えて掘削し、周溝南側とつながっている。上縁幅で1.8ｍ、深さ0.3ｍ、地山の傾斜にあわせて緩やかに南東方向へおりている。

出土遺物は、須恵器蓋坏、高坏、直刀などであるがいずれも原位置は保っていない。これらの遺物から、この古墳の築造年代は６世紀末頃と考えられる。なお墳丘からは、12～13世紀の青磁碗、白磁碗、白磁皿も出土している。

1．松尾田古墳群
　ＳＴ002古墳（南から）
2．ＳＴ002古墳（東から）
3．ＳＴ001古墳（西から）

37. 中川原西遺跡（略号：ＮＧＮ）

遺跡の所在地

東松浦郡鎮西町大字加倉字中川原

調査主体者

鎮西町教育委員会

調査期間

昭和62年10月～11月

調査面積

200㎡

図111　中川原西遺跡周辺地形図（1：25,000）

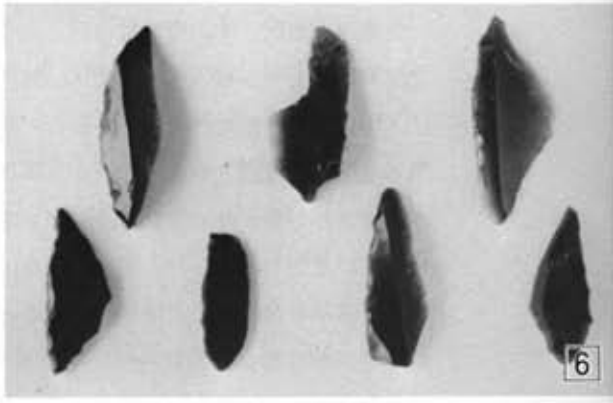
遺跡の概要

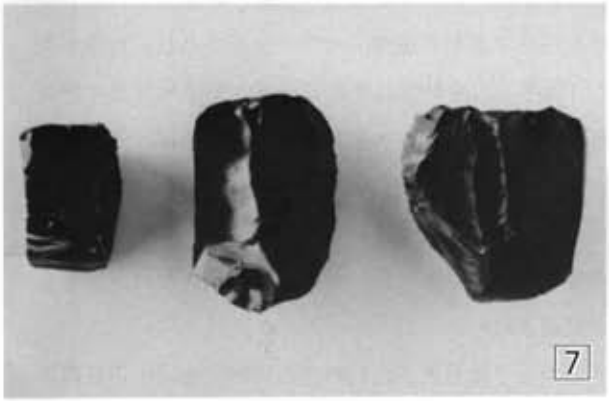
佐賀県西北部に位置する東松浦半島は、標高100～200ｍの波形状丘陵が連なる玄武岩質溶岩台地からなり、一般に「上場台地」と総称されている。台地上には、旧石器～縄文時代の遺跡が多数分布し、その数は11,000ケ所近くにものぼるといわれており、全国でも有数の密集地帯として知られている。中川原西遺跡は、比較的なだらかな丘陵が連なった鎮西町南端の内陸部に位置し、唐津市と境界を接する東西にのびた尾根状地形の西端部に立地している。標高約148㎝、海岸までの最短距離は直線で約2.9㎞である。

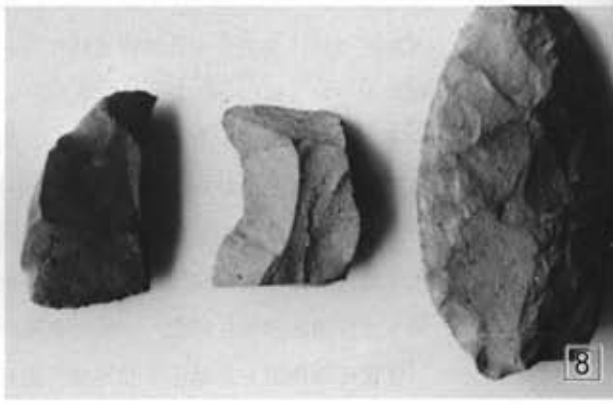
調査は、用水路管埋設部分と工事用仮設道路として削平を受ける部分約200㎡について実施した。遺跡の現況は山林であり、人為的な攪乱が少なかったためか、旧石器～縄文時代にかけての各時期の遺物包含層を良好な状態で確認することができた。玄武岩の風化土壌であるため、色調・粘性ともに漸移的な推移を示すが、大きく４枚の層に区分できる。遺物はⅡ層から52点、Ⅲ層から49点、Ⅳ層から18点、土坑から14点が出土し、土器片７点以外は石器類である。

Ⅱ層では、土器・石鏃・細石刃・ナイフ形石器・削器・磨石・敲石など旧石器～縄文時代の遺物が混在して出土している。樹根等による二次的移動が原因であろう。本来的には押型文土器の出土から、縄文時代早期の包含層と推定される。遺構は検出できなかった。Ⅲ層は、細石刃が主体を占め、石刃・石核がこれに次ぐ。ナイフ形石器も基部片が１点のみ出土している。遺構としては、上部から配石遺構１基と土坑６基が検出された。配石は厚さ１㎝程度の小型の板状石を南北に配したものであるが、性格を示唆するような他の痕跡は何ら認められなかった。土坑は不整形のものが多く、上場地域の当該時期に通有のものである。ただし、当遺跡の場合、覆土が脆弱かつ均一で、周囲に一部地山ブロックが認められるなど、風倒木の可能性が強い。Ⅳ層は、製品としてはナイフ形石器・石刃のみであり、単純な様相を示している。遺構は検出されなかった。

上場地域では土壌の堆積が薄いため、耕作等により地山まで削平されている場合が多いが、山林に立地する遺跡では、当遺跡のように良好な包含層の存在が予想される。







1．中川原西遺跡遠景（南から）
2．土層堆積状況
3．土坑全景（東から）
4．ＳＫ01土坑・ＳＸ01配石遺構（南から）
5．出土石器（石鏃・細石刃・石刃他）
6．　〃　（ナイフ形石器）
7．　〃　（石核）
8．　〃　（削器）

Ⅵ. 総　　括

昭和62年度に実施した農業基盤整備事業に係る文化財調査のうち、確認調査は佐賀東部地区で鳥栖市・基山町・北茂安町・三根町・中原町・東脊振村・神埼町・三田川町・千代田町の14地区、佐賀西部地区で佐賀市・諸富町・多久市の９地区、佐賀南部地区で武雄市・北方町・白石町・有明町・鹿島市・塩田町の13地区、佐賀北部地区で伊万里市・西有田町・相知町の８地区、佐賀上場地区で唐津市・肥前町・玄海町・鎮西町の８地区で、白石町については埋没地割り確認調査を実施した。その他、筑後川下流用水事業に係る文化財確認調査は、北茂安町・神埼町・千代田町の３地区について行った。

発掘調査は、佐賀東部地区12遺跡、佐賀西部地区12遺跡、佐賀南部地区８遺跡、佐賀北部地区１遺跡、佐賀上場地区４遺跡について実施した。以下、確認調査については地区ごとに、発掘調査については時代ごとにまとめる。

文化財確認調査

佐賀東部地区　基山町園部地区、北茂安町北茂安東部地区、三根町三根東地区、中原町中原北部地区、東脊振村大塚ケ里地区、神埼町石井ケ里・志波屋地区・横武地区、三田川町田手地区、千代田町下西地区で遺跡の存在が確認された。園部地区では奈良～平安時代の集落跡（東福寺遺跡）が確認された。北茂安東部地区では中世の有力国人層であった馬場氏の居城とされる中野城跡の堀が確認された。三根東地区では西島二本杉遺跡で土坑等の遺構が確認され、14世紀代の遺物が出土した。中原北部地区では弥生時代の大規模な集落跡（原古賀三本谷遺跡・原古賀四本谷遺跡）と古墳時代の集落跡（原古賀五本谷遺跡）が確認された。大塚ケ里地区では中世以前に遡る可能性の強い水田面が確認された（大曲二の坪遺跡）。石井ケ里・志波屋地区では弥生～古墳時代の集落跡（志波屋一の坪遺跡・上志波屋七の坪遺跡）が確認された。横武地区では代表的な中世環濠遺跡である横武城跡で多数の遺構・遺物が確認された。遺跡の主体部については、「クリーク公園」としての保存・活用が検討されている。田手地区では奈良～平安時代の遺構・遺物が検出され、集落跡の一部と考えられる（田手一本杉遺跡・田手二本杉遺跡・殿ノ隈遺跡）。下西地区では中世の遺物包含層（下西八本松遺跡）を確認した。

佐賀西部地区　佐賀市久保泉東部地区・久保泉西部地区で遺跡の存在が確認された。久保泉東部地区では本村遺跡で弥生時代～中世の集落跡が確認された。久保泉西部地区では村徳永遺跡・立野遺跡で弥生時代～中世の集落跡が確認された。

佐賀南部地区　武雄市川登地区・武雄南部地区・橋地区、白石町白石西第二地区・白石西第四地区、鹿島市鹿島西部地区で遺跡の存在が確認された。川登地区では古墳時代の遺物と小穴が確認された（天神裏遺跡）。武雄南部地区と橋地区ではいずれも中世集落跡（井手橋遺跡・市場遺跡）が確認された。白石西第二地区では古墳時代～中世の集落跡である多田遺跡で多数

の遺構・遺物が検出された。白石西第四地区では多田遺跡と共に白石平野を代表する集落跡である弥生時代～中世の湯崎東遺跡で遺跡の広がりが確認された。鹿島西部地区では縄文時代晩期の遺跡（吹野遺跡）が確認された。

佐賀北部地区　伊万里市立岩地区で旧石器～縄文時代の遺跡が確認された。

佐賀上場地区　唐津市唐ノ川地区、玄海町値賀川内地区、鎮西町加倉地区で遺跡の存在が確認された。唐ノ川地区では旧石器～縄文時代の遺跡（唐ノ川遺跡群）が確認された。値賀川内地区では文禄・慶長の役に伴って築かれた特別史跡木下利房陣跡に隣接して石墨等の遺構が確認された。加倉地区では旧石器～縄文時代の小規模な遺跡（中川原西遺跡）が確認された。

筑後川下流用水事業　遺跡は確認されなかった。

発掘調査

旧石器時代～縄文時代

中川原西遺跡は狭い尾根上に営まれた小規模な遺跡で、ナイフ形石器文化・細石刃文化・縄文早期の各期の遺物が層位的に分離される傾向が認められた。また、細石刃文化期に比定される配石遺構が検出されている。草履作遺跡では縄文早期と考えられる遺構・遺物が検出された。船石遺跡の縄文時代土坑からは量的には少ないものの北久根山式土器・鐘崎式土器や磨製石斧等が出土した。十蓮Ⅱ遺跡では黒川式並行期の遺物が出土し、上場地区における当該期の追加資料となった。

弥生時代

本年度は墓地の調査例が目立った。船石南遺跡では昭和60年度に597基の土器棺墓が調査された地区に隣接して新たに120余基の土器棺墓が検出され、県内でも有数の弥生時代墓地であることが再確認され、中期前半の甕棺墓から細形銅剣の切先が出土した。池上二本松Ｂ遺跡・佐保遺跡では土器棺墓・土坑墓が、みやこ遺跡では土器棺墓・石棺墓・石蓋土坑墓が、小野原遺跡では石棺墓が、西尾遺跡では土器棺墓・石棺墓が検出された。県西部地域に位置するみやこ遺跡・小野原遺跡・西尾遺跡は、大型土器棺墓地帯周縁部の墓制を考える上で重要である。集落遺跡としては江口二本松遺跡・船石遺跡・直鳥四本松遺跡・湯崎東遺跡が調査され、湯崎東遺跡からは後漢鏡片が出土している。

古墳時代

石塚１号古墳は佐賀平野での古墳分布図に修正を迫る立地を示し、その副葬品と共に極めて興味深い古墳である。この他、後期の小規模古墳として石動裏田遺跡と松尾田古墳群が調査されている。玄界灘に面した小半島の先端部に位置する松尾田古墳群からは銛頭と思われる鉄器が出土しており、対岸にあたる加部島の御手水古墳・鬼ノ口古墳と同様に臨海性集団の長がその被葬者であると推定される。集落遺跡では江口二本松遺跡・土師本村遺跡・石動三本松遺跡・下石動遺跡・小野原遺跡・玉江遺跡・上田町遺跡・木浦町遺跡・多田遺跡が調査されてい

る。

古代（奈良時代～平安時代）

鶴前田遺跡では大宰府と肥前国府を結ぶ駅路の推定地が調査され、馬郡・竹原地区遺跡群や吉野ケ里遺跡群の調査と併せ、奈良時代の道路遺構が明らかになりつつある。集落遺跡の調査が増える中で墨書土器や刻書土器の文字資料の出土が相次いだ。船石遺跡では「肥人」、三重二ツ寺遺跡では「万呂」・「国□」・「大」・「田成」、小杭村中遺跡では「□師」、多田遺跡では「養入厨」、湯崎東遺跡では「木本」・「日」・「大」・「志」等が出土しており、各遺跡の性格を論じる上での参考となろう。

中世（鎌倉時代～室町時代）

鎌倉時代の集落跡として、藤ノ木西分遺跡・余江西二本松遺跡・西尾遺跡が調査された。余江西二本松遺跡からは東播系須恵器が多数出土しており、佐賀江川を利用した交易基地の可能性が考えられる。西尾遺跡では掘立柱建物跡群が検出されたが、それらの中には棟持支柱を持つ構造のものが認められ、豊富な輸入陶磁器の出土等から松浦党との関連も示唆されている。柳郷城跡・下六丁遺跡・横武四本黒木遺跡はいずれも神埼町横武地区に位置する室町時代の「環濠集落跡」で、その成立過程や性格等必ずしも実体の明らかでないこの種の遺跡の基礎資料となるものである。国広遺跡では16世紀後半に廃棄されたと考えられる遺物が逆茂木状の杭を留める溝等から出土し、近接する横造城の争奪戦に関わる一時的な防禦施設の可能性が指摘された。

近世（安土・桃山時代～江戸時代）

甕屋窯跡Ａ遺跡は江戸時代前期の窯跡に隣接する工房址と考えられ、窯場の総体を知り得る数少ない調査例と言える。吉祥寺遺跡では江戸時代中～後期の建物跡・土坑・溝・埋甕・塚が検出され、文献記録・伝承等からは決定できないが、寺院跡と思われる。この他、西尾遺跡では江戸時代初期の建物跡群、湯崎東遺跡・多田遺跡では江戸時代墓地の調査が行われている。

佐賀県文化財調査報告書第94集

佐賀県農業基盤整備事業に
係る文化財調査報告書 7

発行　平成元年 3 月31日
佐賀県教育委員会
佐賀市城内1-1-59

印刷　㈲音成印刷所
小城郡小城町253
TEL0952-73-4113